



に詰め込まれ、その多くがガス室で、一部がガストラックで殺されたという。また、ドイツ人は東部戦線の背後で、膨大な数のユダヤ人を殺戮したという。ガス処刑されたもの、射殺されたもの、病気、疲弊、飢餓その他の原因で死亡した犠牲者の総数は、500 万から 600 万に達したという。

この比類のない虐殺は、普通「ホロコースト」と呼ばれている。「完全に焼き尽くすこと」という意味のギリシア語の単語に由来する「ホロコースト」は、1979 年にアメリカの同名の映画が放映されると、英語圏以外にも、世界中に広がっていった。

ユダヤ人が第二次大戦中にこのような運命をたどったという話は、西側世界のあらゆる辞書、歴史書に描かれている。「ホロコースト」は世論の中では、自明の理となっている。この話から逸脱することは、押しとどめられている。これに反論するような声は、メディアの強力な検閲によって封鎖され、多くのヨーロッパ諸国では、政治警察のテロルによって封殺されている。

過去数十年間に、「ホロコースト」に関する多くの本が出版されたが、多くの人々はラウル・ヒルバーグの『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』を、このテーマに関する標準的な作品とみなしている。

ユダヤ人のヒルバーグは、1926 年にウィーンで生まれ、1939 年に両親に連れられてアメリカに移住した。1944 年には、アメリカ軍に入隊した。1948 年、ヒルバーグは、ナチス体制下でのユダヤ人の運命という問題を研究し始めた。1951 年と 1952 年、彼は、ヴァージニア州アレクサンドリアの連邦資料センターで働き、捕獲されたドイツ側資料を発掘した。1952 年、政治学修士となり、1955 年に法学博士となった。「ホロコースト」を扱う多くの研究者がそうであるように、彼も歴史が専門ではなかった。しかし、ヒルバーグは、ヴァーモント大学で、長年にわたって、国際関係と合衆国の対外政策に加えて、第二次大戦中のユダヤ人の歴史を教えている。<sup>1</sup>

『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』初版は 1961 年に登場し、1967 年と 1979 年に、改訂されずに再版された。1985 年には、少々手を加えた「改訂・決定」版が続いた。驚くべきことに、ドイツ語版が出版されたのは、1982 年になってからのことであり、しかも、それを出版したのは小さな出版社（ベルリンの Olle and Wolter）であった。それは、*Vernichtung der europäischen Juden* という題であった。フランクフルトの Fisher Taschenbuch Verlag が 1997 年 5 月に出版した 3 巻本を利用できるであろうが、それは、1985 年の英語版にもとづいている。<sup>2</sup>

ヒルバーグの「ホロコースト」研究は、この種の本の中で、比類なく、もっとも浩瀚なものとされている。ドイツ語版の序文に明瞭に述べられている。

「もしも、『標準的作品』という言葉があるとすると、ホロコーストに関するヒルバーグの有名な包括的歴史は、そのようなものとみなすことができる。…この作品のテーマは、作戦の張本人、計画、方法、そして作戦自体である。ヒルバーグは、偉大なる歴史家たちの特徴である『冷静さと正確さを持って』（『南ドイツ新聞』）、政府、産業、軍部の支配エリートがユダヤ人の絶滅に関与・参画していった過程を跡づけている。また、普通の役人、鉄道員、政治家、兵士が絶滅作業に関与していく過程も跡づけている。1945 年以降には、法廷に引き出されることのなかった人々、すなわち、プロイセンの将軍、民族主義的保守派の役人、外交官、産業家、化学者、医師たちである。ヒルバーグは、これまでの人生を費やして、この本のための資料を集め、整理した。資料の大半は犯人たちが作成したものであ

るが、ヒルバークはこのような資料を分析する専門家である。犯人たちは、公式の用紙や印鑑を使いながら、きわめて徹底して、数十万回にわたって、自分たちの死の作業の証拠を記録してきた。

ホロコーストに関するこの包括的な歴史は、『専門家には典拠資料、理論家には分析資料、そして、一般の人々には、最良の歴史書』（『サンデー・タイムズ』）である。」

修正主義者は、第三帝国でのユダヤ人の運命に関する定説に反対しているが、その修正主義者でさえも、ヒルバークの作品が献身的で広範囲な研究の成果であることを認めている。もっとも著名な修正主義者のフランス人ロベール・フォーリソンにとって、ヒルバークは「ポリャーコフ、ヴェレール、クラルスフェルトのような人々の上に」3君臨している。ヒルバークが、「ホロコースト」正史の研究書の中で飛びぬけているために、修正主義者は何回も彼の作品に立ち向かわなくてはならなかった。最初に立ち向かったのは、『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』初版が出版された3年後の、1961年のことであった。フランス人ポール・ラッシニエがヒルバークを全面的に攻撃した。ラッシニエは、レジスタンスの闘士であり、ブッヘンヴァルトとドラといったナチスの強制収容所の経験を持ち、修正主義の創立者であった。ラッシニエは、自分の本『ヨーロッパ・ユダヤ人のドラマ』の中で、第二次大戦中のユダヤ人の損失人口についてのヒルバークの統計を検証した。そして、ユダヤ人犠牲者数を510万とするヒルバークの結論を否定した。ヒルバークはデータを操作して、この数字にたどりついたというのである。ヒルバークのデータにもとづいたラッシニエによると、ナチスによるユダヤ人犠牲者数は、100万以下であるというのである。

ラッシニエのヒルバーク批判が現れてから35年間以上も、修正主義者は手をこまねいていたわけではない。しかし、ヒルバークの方法を包括的に分析したもの、ヒルバークの結論を批判的に評価したものは現れなかった。この欠落を埋めるのが本書の目的である。

本書の研究は以下の諸点に向けられる。

- ・ ナチス体制が自分たちの支配地区で生活するユダヤ人の物理的絶滅を計画していたという点について、ヒルバークはどのような証拠を提示しているのか？
- ・ 絶滅収容所、すなわち、ユダヤ人の殺戮のために、全面的あるいは部分的に建築され、このためのガス室を備えていた収容所が実在していたという点について、ヒルバークはどのような証拠を提示しているのか？
- ・ ナチスの政策のユダヤ人犠牲者数について、ヒルバークは約510万としているが、ヒルバークはどのような証拠を提示しているのか？

簡単に言えば、ヒルバークの大部な著作は言われているような学術的価値を持っているのか、それとも、欠陥があるのか、この点を本書は裁定するであろう。

## II. 全体の検討

ヒルバーグの本を一読すると、以下の3点が明らかとなる。

### 1. 反対意見を一貫して無視すること

「ホロコースト」研究の諸問題についての知識を持たないで、ヒルバーグの標準的著作を読んでしまうと、ここに記述されている諸事件には疑問の余地がないと判断してしまうであろう。ヒルバーグは、第三帝国がユダヤ人絶滅政策をとっていたことに疑問を呈する研究者が存在することだけではなく、「絶滅収容所」や殺人ガス室が実在したことにも疑問を呈する研究者が存在することに、まったくほのめかしもしていない。ホロコースト正史のその他の提唱者は、たとえ、研究もせずに悪罵を投げつけるだけであっても、異論が存在することをほのめかしている。<sup>5</sup> しかし、ヒルバーグは修正主義など耳にしたことがないかのようなふりをしている。バツツ、シュテークリヒ、フォーリソンのような尊敬すべき、誠実な学者の研究など耳にしたことがないかのようなふりをしている。ヒルバーグは、修正主義者の著作や修正主義者の雑誌を一つもあげておらず、絶滅論に対する修正主義者の異論について少しも検討していないのである。

1961年に『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』初版を刊行したときであれば、ヒルバーグは、第三帝国のユダヤ人の運目に関する定説に疑いを投げかけている見解を無視しても、許されたかもしれない。当時、修正主義者の研究は少なかったからである。<sup>6</sup> 1985年には、このような姿勢は許されない。(修正主義者の研究は大きく進んでいた。一方、プレサックを除くと、絶滅論の提唱者は足踏みしており、何も新しいものを生み出さなかった。)

反論を無視したり、抑圧したりすることは、学問的な方法ではない。だから、ヒルバーグの学問的な姿勢には大きな疑問を感じるのである。

### 2. 殺人ガス室とガストラックについての写真も記述もない

ヒルバーグの本は1351頁、3巻にもおよぶ大部な著作であるが、3巻のタイトル頁に3枚の写真を掲載しているだけである。(英語版の『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』——以後DEJとする——は1232頁であるが、まったく写真は掲載していない。)テキスト本文には、一つも写真がなく、このように大部な著作としては異常なことである。さらに、ガス室やガストラックといった殺戮装置を使ったことは新奇なことであり、殺戮の規模の大きさを示しているものであるにもかかわらず、ヒルバーグは、ガス室やガストラックについてまったく記述していない。図版やスケッチを掲載すれば、このような残酷な殺戮装置がどのように作動したのか読者に理解させやすいにもかかわらず、そうした類のものはまったくくない。

ヒルバーグは、強制収容所やいわゆる「絶滅収容所」の物理的実態を検証することを嫌っていた。彼が、収容所の現場調査を自分で行なったことはなかった。ヒルバーグは1948年から「ホロコースト」研究を始めたとされているが、その彼は、1985年以前には、トレ布林カで1日、アウシュヴィッツ I とアウシュヴィッツ・ビルケナウで半日過ごしたただけである。それもすべて、メモリアル・セレモニーに参加しただけであった。それ以外の収容所を訪問したことはまったくくない。<sup>7</sup> ヒルバーグとは対照的に、フェルデラー、フォーリソン、マッソーニョ、ルドルフといった修正主義者やその傾向の人々、非修正主義者のプレサックも、証人たちが大量殺戮の現場であると証言した建物を徹底的に検証し、利用できるかぎりの建築図面を研究してきた。このような現場検証は、この論争を解決する

には絶対に必要である。

### 3. 著作の表題と内容の乖離

ヒルバーグの使用した資料の大半が信用すべきものであることには疑いが無い。このことは、ユダヤ人の迫害 (Judenverfolgung)、ドイツとその同盟国の反ユダヤ的法律や措置を記述した 400 頁にはとくにあてはまる。しかし、本の表題は『ヨーロッパ・ユダヤ人の迫害』(Die Verfolgung der europäischen Juden)ではなく、『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(Die Vernichtung der europäischen Juden)なのであり、この表題は著作の全体をあらわすものとしては不適切である。第一巻の 283 頁までを読破しても、この表題のテーマは登場しない。第二巻の最初の 123 頁、すなわち、287-410 頁 (DEJ, v.1, pp.271-390、邦訳上、207-296 頁)は「移動殺戮作戦」にあてられている。東部戦線の背後での大量殺戮についてである。515 頁ほど (pp. 411-926; DEJ, v.2, pp. 391-860、邦訳上 297-515 頁、下 3-145 頁)が、ドイツやその同盟国の支配地域からのユダヤ人の移送を扱っている。移送の事実関係に関しては、ほぼ疑問の余地はない。

人々のイメージの中で、ホロコーストをおどろおどろしいもの、野蛮なものにしているのは、絶滅収容所での工業的な殺戮であるが、それがはじめて登場するのは 927 頁である。「殺戮センター作戦」の章のはじめである (DEJ, v.3, pp. 861-990、邦訳下、147-236 頁「絶滅収容所」の章)。しかし、「殺戮センター」にたどり着くには、さらに 100 頁ほど読まなくてはならない。「殺戮センター作戦」の章には、「起源」、「組織・人員・維持」、「労働力の利用」、「医学実験」、「押収」という 5 つの節があり、そのあとで、やっと、「絶滅センター」が登場する。驚くべきことに、「殺戮作戦」という節はわずか 19 頁 (DEJ では 18 頁、邦訳では 12 頁)である。そして、すぐに、「殺戮センターの解体と絶滅過程の終了」という節に移っていく。

290 頁の第三巻は、「帰結」、「考察」、「影響」、「その後の展開」にあてられており、その後、ユダヤ人の喪失についてのヒルバーグのデータも含む付録が続く。(DEJ では、第三巻は「殺戮センター作戦」の章を含む。)要約すると以下ようになる。

- ・ 1351 頁の「ホロコーストに関する標準的作品」のうちの 123 頁 (DEJ では 1232 頁のうちの 120 頁)が東部戦線の背後での殺戮を扱っている。このテーマは、学術書や一般書ではあまり関心を集めておらず、ヒルバーグによる犠牲者数を認めたとしても、絶滅収容所での大量殺戮の犠牲者数よりも少ない。

- ・ 1351 頁のうち 19 頁 (DEJ では 1232 頁のうち 18 頁)だけが、「ホロコースト」の主演、すなわち、ガス室での大量殺戮の実際過程にあてられている(さらに、「殺戮センターの解体」という節に、11 頁の関連頁がある)。

- ・ 第一巻のすべてと第二巻の大半(とくに、移送に関する 515 頁、DEJ では第一巻の大半と移送に関する 470 頁の第二巻すべて)は、ヒルバーグが自著に与えた表題『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』とは、直接関係していない。第三巻では、人口統計だけがこのテーマに関係している。

したがって、ヒルバーグの著作はその表題が約束していることを記述していない。

### Ⅲ 第一巻の検討

ヒルバークは、自著の第一章(「予備的考察」)を次のようにはじめている。8

「ドイツ人によるヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅は、一大事業ではあったが、ドイツ人の暴力下にユダヤ人を破滅させることは、明らかに失敗であった。この二つの現象は、ともに長い前史を持つ帰結であった。

反ユダヤ政策や反ユダヤ的行為は1933年をもって始まるものではない。[何世紀にもわたって、]多くの国においてユダヤ人は絶滅行為の犠牲になってきた。」(p. 11; DEJ, p. 5, 邦訳上4頁)

ヒルバークは、ヨーロッパ史のなかの「反ユダヤ主義」について予備的に考察している。彼は、「ナチスの絶滅過程」を「循環的にあらわれる傾向の頂点」とみなしている。最初は、ユダヤ人を改宗させようとした。しかし、彼らの多くが、改宗を望まなかったため、追放が試みられた。最後に、第三の、もっとも根本的な措置が続いた。ユダヤ人の物理的絶滅である(pp. 14f; DEJ, p. 8, 邦訳上6頁)。ヒルバークは、自説を次のようにまとめている。

「キリスト教会の伝道者たちは結局、こうやってきた。すなわち、あなたたちはユダヤ人として、われわれとともに生きる権利はない、と。これを受けて世俗の支配者たちは、ユダヤ人たちに、われわれとともに生きる権利はない、と宣言した。そしてナチスがついに、おまえたちは生きる権利そのものがないのだ、と宣言した。」(p. 15; DEJ, p. 9, 邦訳上7頁)

ヒルバークは、ドイツには長い伝統があったので、ユダヤ人への敵意がもっとも極端にあらわれたのはドイツであったと述べている。マルチン・ルターは、彼の書物『ユダヤ人とその虚偽について』(1543年刊)が示しているように、ユダヤ人の厳しい反対者であった。ヒルバークは、ルターから、19世紀のドイツの反ユダヤ主義、ナチズムのユダヤ憎悪イデオロギーにまで進んでいく。次に、彼は、繰り返される迫害に対するユダヤ人の反応にコメントしている。すなわち、ユダヤ人は、迫害に対していつも「緩和と服従」(p. 34; DEJ, p. 27)で対応したというのである。第三帝国では、この対応は、彼らの悲運を決定付けたというのである。

「1933年、ナチスが権力を握ったとき、古くからのユダヤ人の対応パターンがふたたび作動した。しかし、今度は結果は破局的であった。ドイツの官僚制はユダヤ人の弁解に手加減せず、ユダヤ人の不可欠性によって立ちどまることもなかった。ドイツの官僚たちは、出費のことも気にすることなく、スピードを加速し、破壊効果を持続的に拡大しつつ、ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅に着手した。ユダヤ人社会は抵抗に転換することもできずに、ドイツの方策のテンポと協調し、結局、ユダヤ人の絶滅を早めたのであった。

それゆえに加害者側も犠牲者側も相互に取引しつつ、彼らの古くからの経験にたよった。だが、ドイツ人はそれを成功のうちに行ない、ユダヤ人は大いなる不幸のうちにならされたので

あった」(p. 35; DEJ, p. 28、邦訳上 22-23 頁)。

ヒルバーグは大部な自著の冒頭で、ユダヤ人の絶滅にいたる歴史を、歴史的、心理的、哲学的に考察している。しかし、絶滅については、証拠をまったく提供せずに、自明の理としている。つまり、馬の前の馬車に馬具をつけているようなものである。学問として適切な方法であれば、事実をもたらした哲学を考察する前に、事実自体を明らかにするであろう。

ヒルバーグは、第二章「前史」で、ナチス党の権力奪取後の反ユダヤ主義的措置を記述してから、「絶滅の構造」(pp. 56ff.; DEJ, pp. 51ff.)に向かう。彼は、「絶滅過程」の構成要素として、以下の諸点をあげている。

- ・ ナチスによる「ユダヤ人」概念の定義 (pp. 85-163; DEJ, pp.81-154、邦訳上 51-63 頁)とアーリア人とユダヤ人の結婚禁止。
- ・ ユダヤ人の収容 (pp. 85-163; DEJ, pp. 81-154、邦訳上 65-120 頁)
- ・ 指定区域、主としてゲットーへのユダヤ人の強制収容。最初は、戦前のドイツ帝国とボヘミア・モラヴィア総督府のユダヤ人に適用されたが、その後、1939 年に征服したポーランドのユダヤ人にも適用された。

この章でヒルバーグが依拠している資料は、その多くが確固としたものであり、ほかの人々がアクセスできる資料であるので、彼の記述にはおおむね疑問の余地がない。彼の著作のこの部分は、ナチス体制のもとでユダヤ人の権利が次第に剥奪されていったプロセスを、資料にもとづいて跡づけており、有益である。しかし、その分類と用語法は詐欺行為である。少数者の差別、収容、ゲットー収容は「絶滅政策」の構成要素ではない。南アフリカ黒人はアパルトヘイト政策の下で無権利状態であり、大半が隔離地区で生活していたが、理性的な人であれば、彼らが支配層によって「絶滅」されていたと主張しはしないであろう。パレスチナ人は、イスラエルや、イスラエルの占領地域で過酷な取り扱いを受けているが、決して「絶滅」されてはいない。ヒルバーグは意図的に概念を混同している。

第一巻には、このほかにも、不誠実な事例がある。ドイツ系ユダヤ人の東部地区への移送と関連する 221 頁 (DEJ, p. 212、邦訳上 162-163 頁)では、ヒルバーグは次のように記している。

「1941 年 10 月に、大量の強制移送が帝国ではじまった。それは絶滅過程が終わるまで終了しなかった。この移送の目的は移住ではなくユダヤ人の絶滅であった。しかしながら、いまのところはまだ犠牲者がガスで処刑される絶滅収容所が存在していなかったので、死の収容所の建設を待つあいだは、ユダヤ人は編入地域や東方の占領下のソ連のゲットーにほうり込まれることに決められた。編入地域において終着駅となったのはウーチ市のゲットーであった。」

ヒルバーグは、この主張の証拠を読者に提供しなくてはならない。東部地区へのドイツ系ユダヤ人の移送の過程全体については、あれこれの資料にもとづいて立証することができ、ヒルバーグが依拠している資料の大半は、数多くの脚注を見ればわかるように、ドイツ側資料なのであるが、引用した箇所については、いかなる典拠資料も、さらには、

目撃証言さえも引用していない。

ヒルバーグは第二巻では不誠実な戦術をたびたび使っているが、この文章はその事例を示す最初の明白な例である。すなわち、彼は、「ユダヤ人の迫害」や「ユダヤ人の移送」については資料にもとづいて適切に記述しているのであるが、その中に、資料にもとづかない主張（あるいは、問題のある目撃証言だけにもとづく主張）をまぎれこませるのである。そして、その際、読者は自分のあとを追うことはできないであろうと考えているに違いない。内容的に考察すれば、この主張が非論理的であることは明らかである。215－225 頁( DEJ, pp. 205-214)で、ヒルバーグは、1939 年に帝国に編入された西ポーランドと総督府にドイツ系ユダヤ人を大量に移送することが引き起こした兵站・補給および組織的な困難、地元のナチス当局がこの移送に激しく反対したことを記している。例えば、リッツマンシュタットと改名されたウーチ市長ヴェルナー・ヴェンツキは、SS 全国指導者ヒムラーの計画に強く抗議した。ヒムラーは、1941 年 9 月に、20000 名のユダヤ人と 5000 名のジプシーをウーチのゲットーに移送し、翌年にそこから、東部地区に移送しようと考えていた。ヴェンツキは、すでに人口過密なゲットーに 25000 名が移送されてくれば、一部屋あたりの人口密度が 7 人に上昇し、新来者は工場に寝泊りしなくてはならなくなるので、生産を阻害するし、餓死者が増えて、疫病を抑えることはできないであろう、と述べている(pp. 222f.; DEJ, p. 212f, 邦訳上 163 頁)。にもかかわらず、移送は進められた。

もしも、移送の目的が、ヒルバーグの主張するように、「ユダヤ人の移住ではなく絶滅」であるとすれば、「死の収容所」が完成する前にユダヤ人を東部地区に移送するというナチスの政策はナンセンスとなる。ヒルバーグによると、最初の二つの「死の収容所」チェルムノとベウジェッツが稼動するようになったのは、それぞれ 1941 年 12 月と 1942 年 3 月である(p. 956; DEJ, p. 893)。とすれば、次のような疑問が生じる。ドイツ人は、移送を 3、4 ヶ月中断して、ゲットーでの組織的な難題や混乱を避けるかわりに、なぜ、「死の収容所」が稼動し始めるのを待ちながら、1941 年 10 月に、大量のユダヤ人をゲットーに移送したのであろうか。これは当然な疑問なのであるが、ヒルバーグは答えようとしていない。

以上のような欠点を持っているにもかかわらず、『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』第一巻は、1933－1941 年の第三帝国におけるユダヤ人の運命に関して、十分な資料にもとづいた研究であるといえる。事実の解釈に異論のある人々も存在するであろうが、われわれが関心を抱いているのは事実だけであり、ヒルバーグと違って、勝手な哲学化を差し控えている。結論的にいえば、ヒルバーグがこの時期のナチス体制の措置を「絶滅政策」と分類するのは馬鹿げている。



#### IV. 絶滅政策についての資料の欠如と正統派歴史家にとってのその帰結

##### 1. 「資料はまったく現存していない」

あらゆる傾向の歴史家たちは、ヒトラーやその他のナチスの有力者によるユダヤ人の物理的絶滅文書命令は発見されていないことで意見の一致をみている。「ホロコースト」の正統派のレオン・ポリャーコフは、明白に次のように述べている。<sup>9</sup>

「第三帝国の文書、その指導者の供述や陳述を使えば、攻撃、軍事作戦、ナチスの世界改造手段に関する計画の起源と発展について、その詳細まで完全に明らかにすることができる。ユダヤ人絶滅作戦だけが、その考え方およびその他の本質的側面について、暗闇に包まれている。推測、心理的考察、第三次・第四次の報告を使えば、かなり正確に、その進展を再現することができる。しかし、細部については、永遠に知られないまま残るであろう。全面的な絶滅計画を実際に作成したおもな 3、4 人は死んでしまっているし、資料はまったく現存していないし、おそらくは、存在しなかったであろう。」

この一節に手を加えることは何もない。1984 年に、シュトゥットガルトで「第二次大戦におけるユダヤ人の殺戮」という歴史家の会議が開かれたが、その参加者は、一つの点、すなわち絶滅の文書命令は発見されていないという点で一致している。<sup>10</sup>

こうした事情は、長いあいだ、歴史家の頭痛の種であった。数百万のユダヤ人を「絶滅収容所」に移送し、彼らを殺戮するという巨大な作戦には、数十万の人員が関与する組織の存在を前提とするし、とりわけ、第三帝国のような官僚的に組織された国家では、文書命令なしには、ありえないことだからである。ナチスは、敗戦が近づいても、文書資料を破棄しなかった。むしろ、膨大な資料が戦勝国の手に入った。シャイラーは、有名な『第三帝国の興亡』のなかで、次のように述べている。<sup>11</sup>

「…外務省、軍部、ナチス党、ヒムラーの秘密警察を含むドイツ政府やその部局の大半の文書が捕獲された。このように膨大な宝物が同時代の歴史家の手に落ちたことはなかったであろう。…1945 年に第三帝国が降伏して、すぐに崩壊してしまったために、膨大な秘密文書だけではなく、日記、極秘演説、会議記録、往復書簡、ゲーリングが空軍の中に設置した特別局によるナチス指導者の電話の盗聴記録のような重要文書、…ドイツ外務省の 485 トンの記録文書が、ベルリンからの焼却命令の直前に、ハルツ山脈の城や鉱山の中で、アメリカ第一軍によって捕獲された。…数十万の捕獲文書が、主要戦犯裁判の証拠として、ニュルンベルクに急いで集められた。」

ナチス文書の山を考えると、ユダヤ人絶滅政策の文書証拠が存在しないことは、「ホロコースト」正史の提唱者にとっては、苦痛に満ちた、当惑する事態であった。少なくとも、「絶滅収容所」では犯罪を示す文書が破棄されたという主張も、とくに 1991 年以降は、役に立たなくなった。この年、ソ連は、1945 年に赤軍が捕獲したアウシュヴィッツ中央建設局の資料を西側研究者に公開したからである。中央建設局は、ユダヤ人を大量に殺戮したガス室を装備していたとされる焼却棟の建設に責任を負っていた。少なくとも、88000 頁の資料がある。<sup>12</sup>

絶滅政策の資料的な証拠、殺人ガス室の建設の資料的な証拠がまったくないために、

ユダヤ人の意図的・組織的絶滅理論を支持している正統派の歴史家たちは、意図派と機能派に分裂した。二つの主張を比較しておこう。

## 2. 意図派と機能派

1982年、パリのソルボンヌで「ナチス・ドイツとユダヤ人の虐殺」というシンポジウムが開かれたが、そこで、アメリカの歴史家ブローニングは、ユダヤ人の絶滅政策の起源に関する意図派と機能派の意見の相違を次のようにまとめている。13

「近年、ナチズムの解釈は、ティム・メイソンが的確にも『意図派』と『機能派』と呼んでいる、二つのグループにますます二極分解している。前者は、ナチス・ドイツの発展をヒトラーの意図からでたものとして解釈している。すなわち、それは、一貫した論理的なイデオロギーに由来しており、全権を持つ独裁制のおかげで実現されたというのである。『機能派』は、ナチス国家の無政府的な性格、内部対立、意志決定の混沌とした過程を指摘する。そして、そのことが、即興性と過激性をもたらしたというのである。…

…このような二つの歴史の解釈方法は、ナチスのユダヤ政策全体および、特殊には最終解決に与えられているきわめて分散した意味合いを分析するには有効である。一方では、急進的な意図派であるダヴィドヴィチは、すでに1919年に、ヒトラーはヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅を決定していたという観点を支持している。それだけではない、ヒトラーは、どの時点で、自分の殺戮計画が実現されるかも知っていたというのである。第二次大戦は、ヒトラーの『ユダヤ人に対する戦争』を実行する時期であり、同時に手段であった。ヒトラーは、自分の『大計画』を実行する適切な時期を待っている一方で、国家や党内で、ユダヤ政策についての無意味な見解の検討がなされるのにも、寛容であった。

ダヴィドヴィチは、急進的な意図派であり、ヒトラーの意図と『大計画』を強調している。これに対して、極端な機能派であるブロシャートは、とくに、最終解決の決定に関する、大統領の役割について対極的な見解を持っている。ヒトラーは、最終解決について最終決定を下さなかったし、全体命令を出さなかったというのである。絶滅計画は、1941年末と1942年の一連の個別的な虐殺と結びつきながら、進化していった。これらの地域的に限定された虐殺は、二つの要因の結果として進展した不可能な状況に、即興的に応じたものであった。一つの要因は、『ユダヤ人のいない』ヨーロッパを作り出せというイデオロギー的、政治的圧力であり、それはヒトラーから発していた。第二の要因は東部戦線での軍事的敗北であった。それは、鉄道輸送を停滞させ、ユダヤ人が姿を消すために移住させられていた緩衝地帯を作り出していた。ひとたび絶滅計画が進行すると、それは、兵站・補給問題を単純に解決する手段としてすぐに意識されるようになり、普遍的に適用され、単純に追求されるような計画となっていた。

ダヴィドヴィチにとっては、最終解決が考え出されたのは、その実行の20年前であった。ブロシャートにとっては、この考え方は実行から進化していった。すなわち、ユダヤ人集団を散発的に殺戮することが、ユダヤ人全体を組織的に殺戮する考え方を生み出したというのである。」

ブローニングは、意図派と機能派の極端な代表者としてダヴィドヴィチとブロシャートを描いているが、その内容は支持できない。

第一に、ダヴィドヴィチは、ユダヤ人絶滅がヒトラーが権力奪取するずっと前からの彼の「大計画」であったという理論を提唱していることである。もしそうだとすれば、ヒトラーは、ユダヤ人

の移住をあれほど執拗に、長年のあいだ追及しなかったことであろう。第三帝国が平和であった6年間、できるかぎり多くのユダヤ人を移住させることがナチスの政策であったことに疑いはない。ナチスは、このために、シオニスト勢力とも協力していた。シオニストもできるだけ多くのユダヤ人をパレスチナに移住させようとしていたからである。14 しかし、オリエント地域での不確実な将来にかけるといふリスクをおかそうとするユダヤ人の数は少なかった。

ヒルバークは、ナチスが一生懸命に、ユダヤ人の移住を追及したことを詳しく描いている。彼は、ナチスが、1938年に(!)、ドイツで生活している数千のポーランド系ユダヤ人にポーランドに帰るように説得し、後者が自分たちユダヤ人の仲間のもとに戻るのを拒否したことを記している(p. 413; DEJ, p.394, 邦訳上 299-300頁)。注目すべきは、ヒトラーが支配してから5年たっても、数万のポーランド系ユダヤ人が、自分たちの故郷であるポーランドで暮らすことよりも、反ユダヤ主義的な第三帝国で暮らすことを選択したことである。

ヒトラーが権力を掌握したとき、ドイツで生活しているユダヤ人は 520000 名であった。移住と死亡率が出生率を上回ったために、1938 年までにこの数は、350000 名に減少したが、オーストリアとの合併のおかげで、190000 名のオーストリア系ユダヤ人が加わった(p. 412; DEJ, p. 394, 邦訳上 299 頁)。この状況に対応して、1938 年 8 月 26 日、帝国弁務官(オーストリアと帝国との再統一の行政官)ビュルケルは、「ユダヤ人移住中央本部」を設立した。ビュルケルの方法はすぐに帝国の他のところでも行なわれるようになった。1939 年 1 月 24 日、ゲーリングは「ユダヤ人移住全国本部」の開設を命令し、ハイドリヒを責任者とした(pp. 414f.; DEJ, p. 396, 邦訳上 301 頁)。

戦争が始まっても、ナチスのユダヤ政策の基本方針は変わらなかった。当然のことながら、難題は多くなった。大量の外国人ユダヤ人、とくにポーランド系ユダヤ人が加わったことで、ユダヤ人の数が増えたからである。個々人の移住によっては、ヨーロッパのドイツ支配地域を「ユダヤ人のいない」(judenrein、ナチスの用語)地域にすることはできなくなった。だから、ナチス指導部はマダガスカル計画に関心を向けたのである。この計画について、ヒルバークは次のように述べている。

「マダガスカル計画は、数百万のユダヤ人を取り扱うことを想定していた。この計画の発案者は、帝国と保護領およびポーランドの全占領地域からユダヤ人を一掃したいと考えていた。しかし、マダガスカル計画は具体化しなかった。この計画はフランスとの講和条約の結論次第であり、その条約はイギリスとの戦争状態が終わるかどうにかかっていた。…

実現の可能性が薄まった時でさえ、もう一度この計画は、1941 年 2 月初めに、ヒトラーの本営で、話題にのぼった。その時に、党の労働戦線指導者ライが、ユダヤ人問題のこゝろを持ち出したのである。ヒトラーは詳しい返答の中で、戦争がユダヤ人問題の解決を加速するであろうが、いろいろな困難も付け加わっていると指摘した。彼が言うには、最初はせいぜいドイツのユダヤ人に対処することしかできなかったが、今では枢軸国の勢力範囲全体でユダヤ人の影響を除去することを目標としなくてはならない。…自分は、マダガスカル計画についてフランスと話し合ってみよう。以上のように、ヒトラーは語った。ボルマンが、この戦争の最中にどうしたらユダヤ人をそこに運べるのかと尋ねると、ヒトラーは、その点は考えなければならないと言った。自分は喜んで、この目的のためにドイツの全艦隊を使いたい、乗組員を敵の潜水艦の魚雷にさらしたくない。」(pp. 416f.; DEJ, pp. 397f., 邦訳上 301-302 頁)

もしもヒトラーが、ダヴィドヴィチその他の意図派の主張のように、ユダヤ人の絶滅を計画しており、世界大戦の枠内で、その目標が達成されうると見通していたとすれば、ユダヤ人の移住を奨励するようなことは決してしなかったであろうし、とくに戦争が始まってか

らは、移住措置を阻んだことであろう。ナチス指導部が支持するようなマダガスカル計画などありえなかったことであろう。移住するユダヤ人は絶滅の対象とはならないからである。

この反対意見、すなわち、ブロシャートのような急進的な機能派の理論も、ユダヤ絶滅論の支持者の主張、および、その他の機能派の主張ともまったく矛盾してしまっている。

ブローニングが 1982 年のパリ・シンポジウムで要約しているように、ブロシャートは、地域的なユダヤ人虐殺がユダヤ人全体殺戮計画へと進化していったと考えている。すなわち、考え方が実際状況から進化してきたというのである。東部戦線での敗北のために、ユダヤ人を移住させることになっていた緩衝地帯が消えてしまったというのである。この見解は、東部戦線の背後での大量殺戮はドイツのソ連侵攻直後にはじまったとする正統派歴史家の見解とは矛盾している。最大の大量銃殺事件といわれているキエフ郊外のバービー・ヤール事件が起こったとされているのは、1941 年 9 月のことであり、このとき、ドイツ国防軍はまだ敗勢ではなかった。ドイツ人が掌握したキエフのユダヤ人の総数は 33000 名であり、バービー・ヤールで射殺されたというのである。その後、数ヶ月間、数万以上のユダヤ人犠牲者が同じ運命をたどったという。<sup>15</sup>

独ソ戦の勃発直後に、ユダヤ人の射殺が行なわれた点について、否定することはできないが、この問題は次章で検討する。その大半は、ドイツ軍に対するパルチザン攻撃への報復であった。(ユダヤ・ポリシェヴィキ人民委員を射殺せよという「コミッサール命令」はここでは適切ではない。職務による個々人の射殺を扱っているのであって、「人種」による民間人の大量虐殺を扱っているのではないからである。)バービー・ヤールのような大量流血事件は、ハイレベルな当局の許可なくしては起こりえない。だから、もしも、ドイツ軍が侵攻したキエフで、そこで生活するユダヤ人全員が殺されたとすると、それは、絶滅政策の一部として考えられていたのではなくてはならない。そして、バービー・ヤールの事件が真実であるとする、絶滅政策は 1941 年 9 月にすでに存在していたことになる。

この議論をさらに検証してみよう。チェルムノ(ドイツ語ではクルムホフ)は、1941 年 12 月に、最初の「絶滅収容所」として開設されたという(p. 956; DEJ, p. 893)。もしヒルバークが正しければ、収容所は一夜でできるわけではないので、建設命令はもっと前に出されたに違いない。地元のドイツ当局が自分の判断で絶滅収容所建設を決定することなどありえない。しかし、ここでもまた、高いレベルの当局からの命令の存在が、絶対的な前提となっている。

ブロシャートは、ホロコーストは東部戦線でのドイツの敗勢の結果として生じたという機能派の理論を唱えているが、上記のことはこの理論の破産を意味している。したがって、ユダヤ人絶滅命令はいつ出されたのかという意図派の質問に戻ろう。

ブローニングは、パリのシンポジウムで、ダヴィドヴィチとブロシャートの理論を説明したのちに、次のように記している。<sup>16</sup>

「これらの二つの極端な立場のあいだに、折衷的な立場を占める多くの立場がある。イエツケルは、ユダヤ人殺戮という考え方がヒトラーに生まれたのは 1924 年ごろであったと考えている。ブラヒャーは、30 年代末のヒトラーの脅迫演説を強調し、彼の意図はすでに固まっていたと考えている。ヒルブルガーとヒルデブランドは、イデオロギー的な要因が重要であると考えているが、正確な日付を

出してはいない。その他の人々は、機能派だけではないが、1941 年が決定的な時期であると考えている。すなわち、ポリャーコフは、1941 年初めがもっともありそうな時点であると考えており、一方、ケムプナーとクラウスニクは、ヒトラーが決定を下したのは、ロシア侵攻の準備中であった 1941 年春であったと考えている。…アダムは、決定が下されたのは、軍事的な攻勢が停滞し、ロシアへの大量追放による『地域的解決』が不可能となった 1941 年秋であったと考えている。最後に、機能派ではないハフナーは、12 月初頭という日付を擁護している。そのとき、ヒトラーは、軍事的な敗北を始めて予感し、ユダヤ人に対する絶対的な勝利を追及したというのである。」

このような説明によると、「ホロコースト」正史の歴史家がきわめて、滑稽に、年代的な混乱をしていることを示している。彼らは、カッコーの島で、怠惰に、陰謀的な推測にふけらざるを得ないのである。多くの日付が提案されているが、そのすべてに重大な根拠がなく、資料的な証拠もない。これらの学者たちは、ユダヤ人絶滅がいつ決定されたのかについて、むやみに憶測を重ねる代わりに、果たしてこうした決定が存在したのかどうかを、まず、疑問とするべきなのである。この核心的な疑問は、パリでの歴史家会議や、その2年後のシュトゥットガルトの歴史家会議でも避けられてきた。シュトゥットガルトの会議では、最終的な決定がいつ下されたのかという日付の問題は、拷問を受けて、死んでしまった。会議の参加者は、2 年前のパリでの会議と同じような事態におちいったのである。

注目すべきは、ユダヤ人の絶滅決定がなされたのは、1942 年 1 月 20 日のベルリンのヴァンゼー会議であったという古くからのおとぎ話を支持している研究者は誰もいないということである。1992 年、イスラエルの「ホロコースト」専門家バウアーは、古くからあるこの神話を「馬鹿話」とあざけた。17

### 3. ヒルバークの誤りと混乱

#### a. 不吉なヒトラーの命令は存在したのかどうか

ヒトラーが自分の支配地域にいるユダヤ人を物理的に消滅せよという命令をいつ発したのかという核心的問題について、ヒルバークは、初版と改訂版では、違う回答をしている。1961 年の初版では、ヒルバークは、ヒトラーの二つの連続命令があり、一つはロシア系ユダヤ人を殺害する命令、第二は、ドイツの支配下にあるその他のユダヤ人すべてを絶滅する命令であったと記している。彼は、これらの命令についての資料的な証拠を提示していない。当該の頁を引用しておこう。18

「殺人の局面がどのように生じたのか。基本的に、われわれは二つのヒトラーの命令を扱っている。一つの命令は、ソ連邦への侵攻が計画中の 1941 年春に出された。SS と警察がソ連領に派遣され、町から町に移動して、ユダヤ住民全員を即座に殺害することになっていた。この方法を『移動殺戮作戦』と呼ぶことができるであろう。移動殺戮作戦が占領下のソ連地区で始まった直後、ヒトラーは、第二の命令を手渡した。この決定は、残りのヨーロッパ・ユダヤ人の運命を定めた。」

1985 年に、第二版、「決定版」が登場し、ドイツ語版はそれにもとづいているが、そこでは、これらの幻の命令は二つとも、あとかたもなく消え去っている。ブローニングは、

1986年の論文でこの件を次のように述べている。19

「ヒルバーグ氏の新しい版では、『最終解決』(ブローニングは物理的絶滅を意味していると理解している)に関するヒトラーの決定や命令についてのテキストのすべての脚注は、体系的に削除された。」

この一節は、ヒルバーグの信憑性に対する壊滅的打撃である。もちろん、ヒルバーグは依然として、ヒトラーがユダヤ人の絶滅を発案したと考えている。1985年に、このように記している。

「何年間も、行政機構は主導権を発揮し、一歩ずつ略奪に参与していった。この展開の中で、方向性が定められ、パターンが確立していった。1941年半ばまでに、境界線が引かれた。この線の向こう側には、過去の限界に煩わされない前代未聞の行動があった。参加者はしだいに、今から起こるであろうことの本質を理解し始めていた。この結晶化の中心となったのは、アドルフ・ヒトラー自身であり、世界に対する彼の位置であり、もっと特定して言えば、内輪の仲間に語った彼の希望や期待であった。」(p. 420; DEJ, pp. 401f, 邦訳上 304 頁)

この大げさな文の背後には、ヒトラーがユダヤ人絶滅を個人的に命令していたという前提が隠されている。それゆえ、ヒルバーグを「穏健な意図派」と呼ぶことができる。彼が依拠している情報はアイヒマンである。アイヒマンは回想録の中で、1941年から1942年への変わり目に、国家保安部長官ハイドリヒから、総統がユダヤ人の絶滅を命令したと聞いたと記しているからである。20 ヒルバーグは420f頁の脚注30(邦訳上304頁注31)でこの件を述べており、次のように続けている。

「エルサレムでのイスラエル警察の尋問の時には、彼[アイヒマン]は、ヒトラーの命令は、6月22日のドイツ軍のソ連攻撃から2、3カ月後に出ていた、とより信憑性の高い推測をしている。…出来事の時系列と状況を考えると、ヒトラーの決定は夏の終わりよりも前であったことを示している。」

このように決定的な記述が脚注に追いやられていることを考えると、ヒルバーグはきわめて困惑していたに違いない。ヒルバーグの記述はアイヒマンに依拠しており、そのアイヒマンの記述は伝聞証拠に依拠しているからである。

1984年のシュトゥットガルト会議では、ヒトラーがユダヤ人絶滅命令を出したのは、無論、口頭であり、それは1941年夏であったと述べている。21 ヒルバーグの日付は、マダガスカル計画が真剣に考慮されていた1941年2月よりもあとのことであり、バービー・ヤールでの虐殺とされているもの、チェルムノ[絶滅収容所]の稼働の開始とされているものよりも前のことであった。ヒルバーグは、そのように設定することで、ダヴィドヴィチとプロシャートの理論がよってたつ根拠の薄弱さが持つ重大な矛盾を回避したのである。

ダヴィドヴィチ、プロシャート、その他意図派、機能派の「ホロコースト」史家と同じく、ヒルバーグも、自説を立証するような資料を一つも提示できていない。さらに、彼は、独ソ戦の開始以前の「絶滅政策」、「絶滅過程」、「絶滅機構」を何回も繰り返して使っており、

自己矛盾に陥ってしまっている。ヒトラーがマダガスカル計画について最後に考慮していたのは 1941 年 2 月のことであるが、これに関連して、ヒルバークは次のように記している。

「ヒトラーが考えているあいだに、絶滅機構の中に不安が浸透した。ゲッ  
ト一化が過渡期の措置だと考えられていた総督府では、貧乏な人々でい  
っぱいになった見苦しいユダヤ人街のため、その地区のドイツの役所の忍耐  
力は限界に達した。彼らの苛立ちと欲求不満は、1940 年晩夏以降の月例  
報告に現れている。ルブリン地区では、管区長のクラスニスタフが、行政的  
職務にうんざりして、ポーランド化した名前を持つユダヤ人はドイツ語式に  
綴るべきであると主張し、マダガスカルではマダガスカル風の名前をもてる  
のだからと付け加えた。」(p. 417; DEJ, p. 399、邦訳上 302 頁)

もしも、a)ヒトラーが 1941 年 8 月か 9 月にユダヤ人絶滅を決定していたとすれば、そし  
て、b)地元もドイツ人の役人が 1940 年 9 月に、マダガスカルにおけるユダヤ人の未来を  
予言していたとすれば、1940 年 9 月に、「絶滅機構」について語るのは、ナンセンスである。

基本的なことではないかね、ワトソン君！

b.「特定の機関も、…特定の予算もない」

絶滅政策には、その実行のためのメカニズムが必要であり、このメカニズムは、必要  
な権力を持つ中央機関の手になくはならない。しかし、そんなものは存在しなかった。  
ヒルバークは、存在しなかったと述べている。第一巻ですでに次のように記している。

「結局、ユダヤ人の絶滅は法律や命令の産物というよりも、精神とか、共通  
理解とか、一致や同調の問題であった。

この企てに加担したのはだれなのか。この事業のためにどんな機構が作  
動したのか。絶滅機構はさまざまなものの集合体であった——全作業を  
担った官庁はなかった。…

ヨーロッパ・ユダヤ人を絶滅するために、特定の機関が創出されることは  
なかったし、特定の予算も割かれなかった。それぞれの組織は絶滅過程に  
おいてそれぞれの役割を果たし、それぞれの課題を実行する方法を発見  
せねばならなかった。」(pp. 55, 66; DEJ, pp. 55, 62、邦訳上、44、50 頁)

次のような構図となっている。すなわち、戦時という条件の下で複雑になった巨大な事  
業計画がある。そこでは、「絶滅収容所」を建設し、各国から数百万の人々をこの収容所  
に移送しなくてはならない。そして、これらすべてを、責任ある中央機関、特別部局、特  
別予算なしで、実施しなくてはならないというのである。

ヒルバークは、1982 年のパリでの歴史家会議に参加している。彼の報告の題は、「最  
終解決の官僚制」であった。ヒルバークによると、ユダヤ人の絶滅の実行に必要であっ  
たのは、1) 鉄道、2) 警察、とくに、3) 献身的な官僚であった。<sup>22</sup>

なんと洗練されていることか。国家が、数百万の人々を各国から列車で死の工場に運  
び、そこで殺害することを決定したとき、実際に必要であるのは、貨車を運ぶ列車と、犠  
牲者をガードする警察と、寛容すぎない官僚が必要だということである。こうしたことを理

解できずに、「ホロコースト」に関する標準的な著作を執筆しなければ、ヴァーモント大学教授にはなる必要がないというわけである。ヒルバークが振りまいている月並みな表現では、絶滅政策に関する失われた証拠のかわりをつとめることはできないであろう。

### c. コード言語神話

ヒルバークは、ユダヤ人絶滅政策についての資料的な証拠がないので、はぐらかしにたよっている。それは、「ホロコースト」正史派の歴史家のあいだで、長らく広く広まってきたやり方であり、ニュルンベルク裁判にさかのぼることができる。イタリア人研究者マッテオニは、次のようにそれを特徴づけている。23

「ニュルンベルクの審問官は、…このような婉曲語法を発明した。それは、特定の資料の中に、自分が語らせたいことを読み込むのである。このような方法は、ナチス当局は極秘資料の中であっても、コード言語を使っていたという、恣意的で根拠のない憶測のベースである。ニュルンベルクの審問官は、自分たちこそが、このコード言語を解読する鍵を持っていると主張した。このために、まったく無害な資料が、絶滅論を立証するために、組織的に歪曲された。」

一例がある。ヴァンゼー会議では、ユダヤ人絶滅についてのヒトラーの決定がはじめて、ナチスの官僚の小さな集団に開示されたとされてきたが、ヒルバークは、この会議の目的についてこのように述べている。

「『最終解決』のニュースは、しだいに役所の職員たちに漏れていった。その知識は、一度に全部の職員に行き渡ったわけではない。ある人がどのくらい知っているかは、その人が絶滅作戦にどのくらい近いかということ、絶滅過程の本質をその人がどのくらい洞察できるかに依っていた。しかし、その理解が記録に残されることはめったになかった。官僚は、移送の問題を取り扱わなくてはならないときには、ユダヤ人の『移住』という言葉を使い続けた。公式の書簡では、ユダヤ人はまだ『移動』していた。彼らは、『疎開し』、『移住した』。また『国外移住し』、『いなくなった』。こういった言葉は、純真さの産物ではない。それは心理的抑圧の便利な手段だった。」(p. 425; DEJ, p.406、邦訳上 307 頁)

ヒルバークは、「再定住」(aussieden)、「疎開」(evakuieren)その他の表現を「殺害」を意味するコード言語であると解釈しているが、それはいいがかりにすぎない。さらに、ヒルバークでさえも、いわゆるヒトラーのユダヤ人絶滅命令のあとでも、多くのユダヤ人が東部地区の占領区に移住させられ、「再定住」(Aussiedlung)と呼ぶことができると記している。例えば、ヒルバークは、ドイツ系ユダヤ人のリガとミンスクへの移住を記している(p. 369; DEJ, p.352)。戦時におけるドイツの状況が悪化したために、この政策は不可能となった。もしも、当局がこれらのドイツ系ユダヤ人の殺戮を望んでいたのであれば、彼らをドイツ国内で殺害したり、すでに、ポーランドで建設されていたとされている(1941年11月)「絶滅収容所」に送ってしまうかわりに、貨車をきわめて必要としていたラトヴィアや白ロシアに連行しなくてはならない理由などまったくないのである。

ヒルバークが、「最終解決」(Endlösung)という用語が「絶滅」(Ausrottung)と同義語であ



ると考えていることには疑いがない。例えば、1942年7月31日のハイドリヒ宛のゲーリングの書簡を、ヒルバーグはそのような意味で解釈している。ゲーリングはハイドリヒに「ユダヤ人問題の望ましい最終解決を実行するための組織的・实际的・物質的措置に関する全体計画を、早急に私のところに」<sup>24</sup>送るように要請すると命じているが、ヒルバーグは、ハイドリヒが今や「絶滅過程の手綱を握った」(p. 420; DEJ, p.401、邦訳上 304 頁)と付け加えている。ゲーリングの書簡は、ハイドリヒが「移住と疎開という形で、時局の即したもっとも有利なユダヤ人問題の解決を図る任務」を引き受けるべきであると述べているのであるが、ヒルバーグは、ポリヤーコフからライトリンガーまでの先人にならって、それを物理的絶滅のコード言語であると解釈している。オリジナル資料をこのように恣意的に歪曲することが許されているのは、第三帝国と第二次世界大戦に関する歴史家だけであろう。

ナチスは、「ユダヤ人問題の最終解決」(Endlösung der Judenfrage)を、ヨーロッパからのユダヤ人の追放(Ausweisung)・除去(Abschiebung)という意味で理解していた。多くの資料がこのことを証明している。例えば、外務省ドイツ局でユダヤ人問題に責任を負っていた役人ラデマッヘルは、1942年2月10日に、外務省のビーフェルトに書簡を送って、総統は「ユダヤ人をマダガスカルではなく、東部地区に移送すべきである」と決意したと述べ、「マダガスカルは最終解決には必要となくなるであろう」<sup>25</sup>と付け加えている。この書簡の日付1942年2月10日という時期は、ヒルバーグによると、大量殺戮が全面稼働し、チェルムノに続いて、ベウジェッツが第二の絶滅収容所として開設されようとしていた時期である。たとえヒルバーグという巨人であっても、ドイツ人がユダヤ人をガス処刑しようとしていたのは、マダガスカルのジャングルの中であったとは主張しないであろう。そして、ヒルバーグは、このような重要資料をどうして無視してしまうのであろうか。

#### d. 大量殺戮の「証拠」としてヒトラーを引用すること

ヒルバーグは、「ホロコースト」正史の構図の提唱者と同様に、ユダヤ人を「根絶」とか「絶滅」という用語で脅迫しているヒトラーの発言を、そのようなことが実際に起こった証拠と解釈している。彼は、1942年9月30日のヒトラー首相の国会演説を引用している。

26

「1939年9月1日、国会で、私は二つのことを話した。一つは、戦争を余儀なくされた今日、どんな武器も、また時の経過も、われわれをうち負かすことはない、ということだった。もう一つは、もし万一ユダヤ人が、ヨーロッパのアーリア人を処刑するために、もう一度世界戦争を企てているのならば、処刑されるのはアーリア人ではなく、ユダヤ人であろう、ということだった。…

かつて、ドイツのユダヤ人は私の予言を笑った。彼らがまだ笑っているのか、それとも笑う意志をすべてなくしたのか、私は知らない。しかし今、私は、ユダヤ人はどこでも笑いをやめるだろう、という発言を繰り返すことしかできない。そして、この予言でも、私は正しいであろう。」(p. 425; DEJ, p. 407、邦訳上 308 頁)

ナチスは権力を掌握する前、集会や、屋内や街頭で左翼過激派という敵と数限りなく闘わなくてはならなかった。だから、戦争口調はナチスの特徴であったことを指摘しておかなくてはならない。また、戦時中は、敵に対する野蛮な脅迫も当たり前のことであった

ことを想起すべきである。しかし、重要な点は意味論である。現在の用法では、ausrotten は「物理的に清算すること」だけを意味しているが、以前には、もっと広い意味を持っていたのである。だから、ヒトラーは『わが闘争』の中で、第一次世界大戦以前のドナウ王朝の状況について、次のように記している。<sup>27</sup>

「ドイツ民族が負わなくてはならない重荷は膨大であり、税金や流血の面での犠牲は計り知れないものであった。しかし、まったく盲目でないならば、これらすべてが無益であろうと認めざるを得ないであろう。われわれをもっとも苦しめたのは、このシステムがドイツとの同盟によって道徳的に取り繕われ、その結果、古い王朝のなかのドイツ性の絶滅 (Ausrottung) が確実に、ドイツ自身によって認められたという事実である。」

ここでは、ヒトラーは、フランツ・ヨーゼフ皇帝がすべてのドイツ系オーストリア人をガス処刑あるいは射殺しようとしていたと述べているわけではない。スラヴ族に権力を譲ろうとしていたと述べているのである。したがって、Ausrotten とは、「権力を剥奪すること、影響力を奪うこと」という意味を持っていたに違いない。

さらに、ヒトラーは 1939 年 9 月 1 日に、「アーリア民族の絶滅」(Ausrottung der arischen Völker) のための世界戦争を仕掛けているとユダヤ人を非難していることも想起すべきである。ここでも、彼が言わんとしているのは、ユダヤ人はヨーロッパ起源のすべての住民を全滅させようとしているということではない。Ausrottung は、「従属」とか「権力を剥奪すること」を意味しているのである。「ホロコースト」文献には、ヒトラーの引用が際限もなく歪曲されて使われているが、以上のような意味合いを当てはめるべきである。

#### e. 二つの解決しがたい問題

ヒルバークは、急進的あるいは穏健な意図派と同様に、二つの克服しがたい問題に直面しているが、それを無視している。

1. ナチスが占領地域にいるユダヤ人を物理的に絶滅するという決定を下したのであれば、それがいつの時期であっても、その時期からは、ユダヤ人の労働力を配置することに関する文書は存在しないはずであろう。しかし、このような文書は大量に存在する。移送をめぐる問題を扱うときに、そのいくつかを引用するであろう。<sup>28</sup> 次の問題は、意図派にはもっと解決しがたい。

2. ユダヤ人絶滅という組織的な政策があったとすれば、第三帝国が支配する地域にはユダヤ人はまったくいなくなるはずである。ドイツ人が捕まえたユダヤ人は誰もが殺されるはずであり、もし生存者がいたとすると、それは、「偶然」か「奇跡」であるとみなさなくてはならない。しかし、実際には、第三帝国が占領した国々のユダヤ系住民の大半は、移送を逃れたのである。よく知られているように、フランスから移送されたユダヤ人は 20%にすぎず、その多くは外国人か、身分を証明できなかったものである。フランス人のパスポートを持つユダヤ人の大半は、手を付けられないままであった。同じことが、ベルギーのパスポートを持つものにもあてはまる。もしも絶滅政策が存在したとすれば、帰還できた人はほとんど存在せず、すべての図書館を埋め尽くしているような「ホロコースト生存者の無数の証言」も存在しないはずであろう。<sup>29</sup>

f. 「信じられないほどの精神の一致」

1983年2月、ヒルバークは、あつかましくも次のように述べている。30

「…1941年にはじまったことは、計画されてもおらず、特定の機関によって組織されてもしない絶滅の過程であった。絶滅措置の青写真も、予算もまったく存在しなかった。それらは段階を踏んで実行されていった。出現したのは、実行計画ではなく、幅広い官僚層が抱いた信じられないほどの精神の一致、総意の読み取りであった。」

フォーリソンは、ヒルバークの解釈の珠玉を指摘し、皮肉な調子で、官僚層から予想することができた最後のものが精神の一致とテレパシーであったとコメントしている。31

皮肉を言わざるを得ない。この文章ほど、「ホロコースト」正史の破綻、その中心人物、粘土足の巨人の破綻を明白に示しているものはない。

## V. 東部戦線の背後での虐殺

### 1. 初期の状況

1941年6月22日、ドイツ国防軍はソ連に侵攻した。これはいわれのない攻撃であったというのが定説である。これに対して、ロシア人歴史家スヴォーロフやドイツの歴史家ホフマンのような修正主義者は、ヒトラーが攻撃したのはソ連の先制攻撃を阻止するためであったと考えている。<sup>32</sup>

ドイツ占領区では、ソ連のパルチザンが血なまぐさい地下戦争を引き起こし、そのために、多くのドイツ兵が殺された。ソ連は、パルチザンは50万名のドイツ兵を殺したと自慢している。<sup>33</sup> ドイツ人は、こうした行動に対して、民間住民に対してさえも厳しい報復措置をとるという方法でこたえた。これは、これ以前の占領軍、以後の占領軍がとってきたやり方であった。<sup>34</sup> 多くの民間人が人質として射殺され、村全体が焼き払われたのである。

ソ連でのユダヤ人は、当初から、共産主義体制を作り上げるにあたって、ひときわ大きな役割を果たし、<sup>35</sup> パルチザンの中でも、ひときわ高い比率を占めていたために、<sup>36</sup> ユダヤ系住民は非ユダヤ系住民よりも、ドイツの過酷な報復の対象となった。「無差別」射殺、すなわち、パルチザン攻撃への報復ではない射殺でさえも発生した可能性は排除できない。多くのユダヤ・共産主義者人民委員が、1941年のヒトラーの「人民委員命令」のために殺されたことも疑いない。この命令は、東部地区ではドイツ軍将校によってしつこく採用されたが、1942年初期に放棄された。さらに、数千のユダヤ人がドイツ軍の侵攻に続いた地元住民のボグロムの中で殺された。ラトヴィア人、リトアニア人、ウクライナ人その他は、ポリシェヴィキのくびきから解放されると、ユダヤ人に復讐した。赤色テロル機構は主としてユダヤ人によって維持されてきたし、不幸なことに、この報復は、共産主義者の犯罪とは関係のないユダヤ人にも襲いかかったからである。<sup>37</sup>

正統派の歴史家は、ドイツ人がユダヤ人に対する絶滅戦争を実際に遂行していたと述べている。この説をもっとも過激に展開しているのが、1981年に出版されたクラウスニクとヴィルヘルムによる『世界観戦争の部隊』(Die Truppe des Weltanschauungskrieges<sup>38</sup>)である。本書では、ヒルバークの見解を分析しているのであって、この本の検証は後日となる。以下では、ヒルバークがこの説を証明するのにどのような議論を展開しているのかを検証しておこう。ただし、最初に、ヒルバークが、ドイツ占領下のソ連系ユダヤ人に何が起こったと述べているのかを要約しておこう。

### 2. ドイツ占領下のソ連地区でのドイツのユダヤ政策に関するヒルバークの説

ヒルバークは、ソ連系ユダヤ人の大量殺戮が始まったのは、1941年8月であったと述べている。

「当初、部隊は、大量射殺も計画しておらず、家族全員を犠牲者とするのもしなかった。日常的な殺戮にはまだ慣れていなかった。数世紀続いた古い伝統の影響を受けていたので、命令が全方向にまたがるものであるとは考えていなかった。『ユダヤ人』という単語は男性だけを意味していると考えていた。大量殺戮が始まったのは、やっと1941年8月であった。」(p. 307; DEJ, na)

「部隊」は4つの特別行動部隊に所属していた。特別行動部隊は、戦争前に設立され、

ドイツの合法地域の治安の維持を目的としていた。すなわち、前線の背後で活動するパルチザンと戦う予定であった。ヒルバークによると、特別行動部隊にはさらに二つの任務があった。特別行動部隊Dの司令官オーレンドルフの戦後の証言39によると、次のようなものであった。

「行動部隊の4人の司令官はヒムラーから個人的に命令を与えられた。戦後証言をしたこの4人のうちオーレンドルフだけが、自分たちの仕事の重要な部分は、『ユダヤ人(男・女・子供を問わない)と共産主義幹部の除去』であると知らされたと言っている。」(p. 303; DEJ, p. 290、邦訳上 222 頁)

ヒルバークは、特別行動部隊はまた、捕虜収容所を捜索して、射殺対象者を見つけ出したと述べている。ハイドリヒは、すべての「職業革命家」、赤軍政治将校、「熱狂的な共産主義者」、「全ユダヤ人」を選別せよと命令し、特別行動部隊がこの仕事にあたった(p. 351; DEJ, p. 335、邦訳上 258 頁)

総勢 3000 名の 4 つの行動部隊には、通訳とか無線通信士のような非戦闘員も少数ながら存在した(pp. 302f; DEJ, p. 289、邦訳上 221 頁)。

最初の「殺戮の波」は 1941 年 8 月に始まり、同年の 12 月まで続いた。しかし、第一波が終わる前に、秋にはすでに、第二の殺戮の波が始まり、その目的は、見過ごしてしまったユダヤ人の逮捕・清算であった。

第二波には、行動部隊のほかに、ティルジットのゲシュタポ、総督府からの出動部隊、親衛隊・警察長官の指揮する編隊も協力した(p. 312.; DEJ, p.298、邦訳上 229 頁)。

大量射殺は、少しばかりの変更点があるものの、規格統一されていた。ユダヤ人は町から連行され、町の外の穴のところに連れて行かれた。穴の多くはすでに作られていたが、その時に掘られたものもあった。そして、ユダヤ人は殺された。死体の山は、穴に土がかけられる前に、5、6 層になることもあった(pp. 333f.; DEJ, p. 318f、邦訳上 244 頁)。

ヒルバークによると、射殺はその実行者に心理的な負担を引き起こしたので、ドイツ人は、殺戮装置として、ガストラックの使用を考え出した。それは 1941 年 12 月から始まり、各行動部隊に 2、3 台が割り当てられた。ユダヤ人は、ガストラックの中で、中に充満した排気ガスで殺された(pp. 349f.; DEJ, na、邦訳 257 頁)。

ヒルバークは、いくつかの町の犠牲者をあげている。

- ・ キエフ: 33000 名
- ・ リガ: 10600 名 (このときの行動部隊はわずか 21 名だった)
- ・ カーメネツ・ポドリスク: 23600 名
- ・ ドニエプロペトロフスク: 15000 名
- ・ ロヴノ: 15000 名
- ・ シムフェノーポリ: 10000 名

ヒルバークは、ユダヤ人の大量殺戮の責任をドイツ人だけではなく、ルーマニア人にも負わせている。後者は、1941 年 10 月 23 日の一日だけで、19000 名を殺戮したというのである。

第二の殺戮の波は、第一の波が終わる前の3ヶ月間に、進行していたとされているにもかかわらず、ヒルバーグは、ゲットー化という「中間段階」があったと述べている。その目的は二重であったという。ヒルバーグは、行動部隊 C の報告「とされている」ものに基づいて、次のように書いている。

「行動部隊司令官は全員——ひよつとすると、無慈悲なシューターレッカー博士[行動部隊 A の司令官]は例外かもしれないが——ユダヤ人を一回の掃討で殺害することはできないと認識していた。ある報告は、逃亡した先から町に戻ってきたユダヤ人逃亡者について、絶望的なニュアンスさえ漂わせている。…行動部隊が町を去ったあとに再び戻ってみると、殺された人数よりもっと多くのユダヤ人がそこにいた。」(p. 358; DEJ, p. 342、邦訳上 263 頁)

ヒルバーグは、「ゲットーは、その本質において、犠牲者の分散を防ぎ、射殺のための捕獲を容易にするためのものだった」(p. 366; DEJ, p. 349、邦訳上 268 頁)と考えている。

ゲットー化の第二の目的は、ユダヤ人の経済的利用であった。

「移動殺戮部隊は、第二波を容易にするためにユダヤ人を集中させることしか興味がなかったが、軍政部と民政部はこの間、この状況を利用しつつそうとした。こうして、労働力の活用と財産の押収という経済的措置が、中間段階の重要な様相となった。」(p. 372; DEJ, p. 355、邦訳上 272 頁)  
「軍は、修理工場でユダヤ人労働者を必要とし、事務所ではユダヤ人事務員を必要とした。『信託』下におかれている軍需産業は、ユダヤ人労働力に依存し続けた。ヴォルニニ＝ポドリヤ総弁務官領のヴォルニニ地区の軍需産業では、1941—42 年を通じて、労働力の 90%がユダヤ人であった。」(p. 376; DEJ, p. 359、邦訳上 275 頁)

「中間段階」としてのゲットー化政策は、1941 年 12 月に完了した最初の殺戮の波と、1941 年 9 月に始まる第二の殺戮の波の間に起こったけれども、

「1941 年 7 月、8 月に占領地区の一部が民政に引き継がれたとき、移動殺戮部隊はすでにゲットー化をほとんど完了していた。行動部隊 A は、管轄権の移転の時点で、ヴィリニウスを除く全ユダヤ人社会をゲットーに組み込んでいた点を誇った。」(p. 361; DEJ, pp.344f、邦訳上 265 頁)

リガとミンスクのゲットーは、移送されてきたドイツ系ユダヤ人の受け入れのためであった。しかし、地元のユダヤ人にもドイツ系ユダヤ人にも利用できるスペースは十分ではなかった。リガでは、1941 年 11 月 29 日と 12 月 9 日のあいだに、ナチスは(前に、10600 名を虐殺したのちに)、二回に分けて 27800 名のユダヤ人を射殺した。「いまやドイツから輸送されるユダヤ人のために、ゲットーそのものの間にスペースが作られていた。」(p. 370; DEJ, p. 353、邦訳上 271 頁)。しかし、リガ地区や近くの労働収容所のドイツ系ユダヤ人は、1941 年末の移送のあと数ヶ月、数年の間に、チェックされていない疫病が流行したために、ほんの一握りの人しか生き残らなかった(p. 371; DEJ, p. 353、邦訳上 271 頁)。このことは、ドイツ人に多くの経済的損失をもたらした。以下の理由からである。

「リガ地域には、ドイツ・ユダヤ人が『ごく一時的に宿泊』しており、移送されてきた者の中には、『身体障害者や戦争廢疾者や 70 歳以上の者』が多かったが、それでもやはりユダヤ人労働者に対する需要は幅広く存在した。あるとき、地区弁務官の職員は、兵隊が 1000 人以上のユダヤ人を大声で要求して、規制を無視した労働力を手に入れた、と苦情を言った。1943 年まで生き残っていた数千のドイツおよびラトヴィアのユダヤ人労働者は、親衛隊や陸軍、海軍、空軍、鉄道、企業といった多くの雇主の間で分配された。」(p. 377;DEJ, pp.359f、邦訳上 275 頁)

ドイツ帝国とボヘミア・モラヴィア保護領からミンスクに移送された 5000 名のユダヤ人は、11 月 25 日と 29 日に射殺された(p. 371;DEJ, p. 353、邦訳上 271 頁)。

1943 年中ごろ、ヒムラーは、ゲッソーシステム全体の清算を決定した。ゲッソーは強制収容所に変えられることになった。この変更は、ラトヴィアでは円滑に進んだが、リトアニアでは、広い範囲の殺戮作戦を伴っていた(p. 407; DEJ, p. 388、邦訳上 291 頁)。ヒルバーグは次のように記している。

「1943 年の 8 月、9 月までに、ヴァリニユスのゲッソーは解体した。住民の大多数は、エストニアとラトヴィアに送られ、そこで衰弱死や射殺にさらされた。それを生き延びた者は、シュトゥットホフ強制収容所に送られた。他の数千人はルブリンの死の収容所に輸送され、それ以外のものは検挙され射殺された。」(p. 405;DEJ, p. 385、邦訳上 289 頁)

ミンスクのゲッソーのユダヤ人はポーランドに移送された(p. 407; DEJ, p. 388、邦訳上 291 頁)。

ヒルバーグによると、ドイツ占領下のソ連地区では、総勢 135 万人のユダヤ人が殺されたという。このうち、三分の二以上が行動部隊によって殺され、残りは、パルチザン戦闘に巻き込まれた親衛隊、警察軍、ドイツ国防軍、ルーマニア軍によって殺されたか、収容所、ゲッソー、野原や森林で、物資的欠乏のために死んだ(pp. 409f;DEJ, p. 390、邦訳上 296 頁)。さらに、150 万のソ連系ユダヤ人がドイツの支配を逃亡した(p. 305;DEJ, p. 291、邦訳上 224 頁)。1941 年 6 月 22 日以前にソ連で暮らしていた 500 万のユダヤ人のうち、400 万がドイツの支配することになる地域の住民であり、こうした条件の下で、100 万以上がドイツ支配地域で生き残ったのに違いない(pp. 304f.;DEJ, p. 291、邦訳上 223-224 頁)。

以上が、ドイツが席卷したソ連地域でのユダヤ人に何が起こったのかについての、ヒルバーグの記述である。著名な「ホロコースト」史家が自分の主張を立証するために使用した資料を検証する前に、彼の描いた光景が、常識的な観点から、信用できるのかどうかを考えてみよう。

### 3. ヒルバーグの記述のうちのみことしやかなこと

占領されたソ連地区でのドイツのユダヤ政策に関するヒルバーグの記述を論理的に分析する能力を持っている人ならば、この記述を支持することはできない、したがって、この記述は信用できない資料に依拠したものに違いないという結論に達するはずである。非常に不合理な記述の例を挙げてみよう。

#### a. 行動部隊による犠牲者数

行動部隊による犠牲者数はありえないほど多い。4つの部隊のうち最大の行動部隊 A の構成員は 990 名であった。ここから、172 名の運転手、3 名の女性、51 名の通訳、3 名のテレタイプ通信士、8 名の無線通信士を除くと、大量殺戮に従事できる戦闘員は約 750 名である (p. 303; DEJ, p. 289、邦訳上 221 頁)。1941 年 10 月 15 日までに、行動部隊 A は 125000 名のユダヤ人を殺したという (p. 309; DEJ, p. 289、邦訳上 227 頁)。大量殺戮が始まったのは 8 月であったという事実 (p. 307; DEJ, na) を考えると、125000 名の大部分、すなわち 120000 名が殺されたのは、10 週間の間であったに違いない。

ユダヤ人は喜んで自分の死を受け入れたわけではないために、彼らを捜索して、町に連行しなくてはならず、また、町では、逃亡や抵抗の企てもあったに違いない。また、犠牲者を町の郊外に連れて行くのも非常に困難であったことであろう。

行動部隊は、虐殺を実行する以外に、人民委員、熱狂的な共産主義者、ユダヤ人を捕虜収容所で捜索しなくてはならなかった。1941 年末までに、少なくとも 3350000 名の赤軍兵士がドイツの捕虜となっていたので (p. 351; DEJ, p. 334、邦訳上 258 頁)、この仕事も非常に大変であったろう。たしかに、10 月中旬までに、捕虜となっていたのは、一部にすぎなかったに違いない。こう部隊がすべての仕事をする必要はなかったのかもしれない。行動部隊は 4 つ存在したという事情もある。こうした条件の下で、8 月初旬から 10 月中旬までの 10 週間に、行動部隊 A は、数十万の捕虜の中から、処刑する人物を捜索し、さらに、120000 名のユダヤ人を射殺し、その上、パルチザンと戦ったというのである。

一つの例だけで十分である。ヒルバークは数字をひどく誇張しようとしているので、ほかの行動部隊の犠牲者についてのヒルバークの天文学的数字に立ち入る必要はないであろう。

#### b. 町に戻ってきた逃亡者

「ユダヤ人逃亡者は…逃亡した先から町に戻ってきた」、すなわち、行動部隊が町を去ると、そこで殺された人数よりも多くのユダヤ人がそこにいた (p. 358; DEJ, p. 342、邦訳上 263 頁) と述べることは、まったくのごまかしである。かなりの数のユダヤ人がドイツ占領下の町に戻ってきたことが真実であるとする、このことは、ドイツ人がユダヤ人を虐殺「しなかった」ことを確実に示しているのではないだろうか。このようなことは、草原の火のようにすぐに広まるからである。このような虐殺は、バービー・ヤールでのような、町の郊外で行なわれたから、大規模な殺戮作戦を隠すことは難しかったからである。

#### c. ゲットー化の目的と進展

ゲットー化、その時期と目的に関するヒルバークの記述は、まったく非論理的である。

- ・ ゲットー化は最初の殺戮の波 (1941 年 12 月末に終了) と第二の波 (1941 年 9 月に始まる) のあいだで行なわれた。すなわち、1941 年の最後の 4 ヶ月の間に行なわれた。
- ・ 7 月と 8 月に、行動部隊はゲットー化過程の「大半を完了していた。」
- ・ ゲットー化の目的は、「ユダヤ人を最初の波で殺すことができなかった」ので、射殺するユダヤ人の逮捕を簡単にするためであった。
- ・ ゲットーはまた、ユダヤ人労働力の利用を可能とした。

これは絶望的なほどの混乱である。東部地区において、ドイツ人は、イデオロギー的な狂信にもとづいて、ユダヤ人の絶滅政策を実行するか、それとも、治安維持と経済的



な観点から、ゲッソー化政策を追求するかどちらか一方である。この二つを簡単に結び合わせることはできない。ゲッソー化しても、特定のカテゴリーのユダヤ人(人民委員、パルチザン、人質その他)を殺戮することができるし、地元の司令官が自然発生的な虐殺を命令することもできるというのは、別問題である。

ヒルバークはゲッソー化を説明するにあたって、最初の波で殺されなかったユダヤ人がドイツ占領下の町に戻ってきたと述べているが、この説明はまったくナンセンスである。どうしてそのようになるのか。リガでの二つの虐殺事件の最初では、21名が10600名のユダヤ人を殺すことができたというのに。

さらに、ゲッソー化が1941年秋と年末までのある時期に行なわれたとすれば、行動部隊は、少なくとも7月か8月に、「大半を完了していた」ことになる。

先に進もう。1943年夏、ヒムラーは、ゲッソーを強制収容所に変えるように命令した(なぜなのか。ゲッソーの目的は当初、ユダヤ人の射殺を簡単にするためであったというのに)。ラトヴィアでは、これは円滑に進んだが、リトアニアでは力の行使が必要であった。リトアニア系ユダヤ人は射殺されたのであろうか。ヒルバークは、部分的にはそうであろうと信じているが、彼らが発見された場所ではなく、ラトヴィアとエストニアにおいてであった。なぜ、リトアニアではないのであろうか。ラトヴィアとエストニアの生存者は東部ポーランドのソビボルに送られた。そこは、ヒルバークによると、ユダヤ人のガス処刑のための「絶滅収容所」であった。だから、彼らをそこに送ることは、殺すためにすぎないに違いない。

これらのユダヤ人がラトヴィアやエストニアで殺されずに、貴重な輸送スペースと食料を浪費したのか、その理由はなぜである。ラトヴィアとエストニアに送られたリトアニア系ユダヤ人の一部はダンツィヒ東部のシュトゥットホフ収容所に送られたというが、そこはヒルバークによると、絶滅収容所ではなかったのである。40

1941年末にリガとミンスクに移送されたドイツ系とチェコ系ユダヤ人の話に進もう。

もし、ヒルバークの言うように、ヒトラーのユダヤ人絶滅命令がこれよりもかなり前に出されていたとすれば、この移送の目的は、移送者の殺害以外ではありえない。(もう一度繰り返しておくが、なぜ、ドイツ人は即座に彼らを殺さなかったのであろう。あるいは、チェルムノの最初の「絶滅収容所」の開設まで、あと1ヶ月を待たなかったのであろう。)事実、ヒルバークによると、ドイツ帝国と保護領からミンスクに到着した5000名のユダヤ人は、到着するとすぐに殺されている。残りは、のちにポーランドに送り返されている。ヒルバークは、彼らがそこで殺されたのか、働かされたのかは述べていない。リガでは、多くの不運な人々が死んだが、それは、射殺ではなく、疫病の蔓延によるものであった。生存者は「親衛隊や陸軍、海軍、空軍、鉄道、企業」に貴重な労働力を提供していたので、このことは、ドイツ人には大きな経済的損失であった。ドイツ人は、ドイツ系ユダヤ人にスペースを開けるために射殺されたとされる27800名のラトヴィア系ユダヤ人を殺さなかったとしたならば、もっとうまく事態を切り抜けたのではないだろうか。21名が殺害したとされる10600名については言うまでもない。

「スピードを出している自動車がゆっくりとカーブを曲がろうとするときは、暗闇で、月の光が明るかった。その中には、沈黙に沈みながら話をする、立っている人々が座っていた。」これは、ドイツの有名なナンセンス子守唄の出だしである。占領されたソ連地区でのドイツのユダヤ政策に関するヒルバークの説明は、この子守唄のようなものである。

#### 4. 東部戦線の背後では約 120 万のユダヤ人が殺戮されたという主張にはまったく証拠がない

1943 年初頭、ドイツ人は白ロシアのカチンで 4000 名の犠牲者の大量埋葬地を発見した。そして、この犠牲者は、1939 年にソ連軍の捕虜となったポーランド軍将校と兵士であることが判明した。すばやく招請された国際専門家委員会は、この判断を確認した。ナチスは、この発見を利用して、幅の広い反ボリシェヴィキキャンペーンを始め、それに成功した。ニュルンベルクでは、ソ連は、ドイツに罪をなすりつけることに成功したが、ポーランドや西側で、それを信じるものはだれもいなかった。これらのポーランド軍兵士を殺害したのはスターリンの悪党であり、他の場所も含めると犠牲者は 10000 名以上に上るということをモスクワが白状したのは、1990 年のゴルバチョフの発言においてであった。  
41

ソ連のドイツ占領地域に暮らしていたももとの 400 万のユダヤ人のうち、約 135 万が死んだ、ゲットー、収容所、パルチザン戦争にいたのはごく少数であり、その大半が殺された、というのがヒルバーグの説である。この「その大半」という用語を 120 万とすると、ソ連にいたドイツ人は、ソ連がカチンで殺したポーランド軍兵士の 300 倍以上のユダヤ人を殺したことになる。この話は、共産主義者にとっては、カチンでの恥辱を注ぐ絶好の機会であり、彼らは、大いに関心を向けたに違いない。ドイツがそうしたように、ソ連も国際赤十字委員会のような国際専門家委員会に駆け込んだであろう。ニュルンベルク裁判では、殺害されたユダヤ人の数十万の死体を発掘するフィルムを展示したことであろう。

しかし、そのようなことは起こらなかった。ヒルバーグはその理由を次のように説明している。

「1942 年 6 月に、ヒムラーは第四 a 特殊部隊の隊長、パウル・ブローベル SS 大佐に『東部における行動部隊の処刑の痕跡を消せ』と命令した。ブローベルはコード番号 1005 という特別作戦部隊を作った。この作戦部隊は墓穴を掘り返して遺体を焼くという任務を負った。ブローベルは占領地域を移動して、大量埋葬の墓穴を捜し出し、保安警察職員と協議した。一度、彼は国家保安部からの客人(ハルトウル)を、観光客を史跡に案内するかのようになり、ブローベルの部下が 34000 名のユダヤ人を殺害したキエフ周辺の大量処刑の墓穴に案内した。

しかし、最初からこの仕事は困難に直面した。…ロシア人が占領地域を席卷したときには、ブローベルは任務のごく一部しか達成していなかった。」(p. 408f; DEJ, p. 389, 邦訳上 295 頁)

ヒルバーグは、この話の典拠として、この当時の文書を提示しておらず、かわりに、ニュルンベルク裁判以降の裁判に提出されたブローベルの供述書<sup>42</sup>を典拠としている。

もしブローベルが任務の「ごく一部しか」達成していなかったとすれば、それは、掘り出されていない多くの大量埋葬地を発見したはずである。ソ連がこの発見を利用しようとしなかった理由は不明である。

「ごく一部」というのが、ブローベルが半分の墓の死体、すなわち 60 万の死体を発掘して焼却することができたと推定しておこう。彼が焼却の燃料として選択したのは、森林地帯で容易に入手しうる木材ではなく、ガソリンであったという。戸外の死体にガソリンを注ぎ、火をつけても、その大半は地中にしみこんでしまう。それを防ぐには、死体を、例え

ば金属製の浴槽のようなコンテナに積み上げなくてはならない。その場合、焼却ごとに 16 ガロンのガソリンが必要である。43 死体を木材の山に積み上げれば、ガソリンはもっと少なくなるであろう。

これは、非現実的な推定なのだが、ブローベルと彼の部下が、貴重なガソリンが流れ去ってしまうのを防ぐのに必要な資材を持っていたとしよう。とすると、60 万の死体の焼却には、 $(600000 \times 16 =) 9600000$  ガロンのガソリンが必要であろう。しかも、当時のドイツは、航空機、装甲車両、トラック用の燃料不足のために、深刻な危機に陥っていたのである。

ガソリンを使った戸外での焼却では、骨は残ってしまう。通常は、骨片だけではなく、肩甲骨、骨盤の大半が残る。歯はまったく破壊されない。また、灰が残り、それは体重の 5% である。44 もしも、ブローベルと彼の部下が、1941 年末にリガで殺害したとヒルバークが述べている 27800 のユダヤ人を跡形もなく処理しようとしたとすれば、次のような措置をとらなくてはならないであろう。

- ・  $(27800 \times 30 =) 834000$  の歯を取り除かなくてはならない(ユダヤ人は平均して 2 つの歯を欠いていたとして)。
- ・ 数百万の骨を取り除かなくてはならない。
- ・  $(27800 \times 2.5 =) 69500\text{kg}$  の灰を散布しなくてはならない(多くの子供がいたことになっているので、犠牲者の体重を平均 50kg と推定した)

60 万の死体を跡形もなく処理するには、上記の数字は、さまざまな要素から、20 倍以上となるであろう。ブローベルと彼の部隊が、とくに、殺人現場が数多く、広い地域にまたがっていることを考慮すると、この任務をどのように遂行したのか、それはミステリーである。

ヒルバークは、このような本質的問題に触れようとはしない。これが問題であることすらわかっていない。彼は、現場検証と法医学的調査を避ける「紙の上の歴史家」45として、自分の世界の物理的実態からまったく遠ざかっているのである。

ドイツ人は、大量射殺と同時に、移動ガストラックで人々を殺したとされている。序文で指摘したように、ヒルバークはガストラックの写真を一つも提示していない。有名な *Nationalsozialistische Massentoetungen durch Giftgas* はガストラックについて少なくとも 64 頁を割いているが、一つの写真もない。46 これには十分な理由がある。伝説に包まれたガストラックを目撃したものは誰もいないのである。

結論はこうである。ヒルバークは、東部戦線の背後で約 120 万のユダヤ人が殺されたという点について、物質的証拠をまったく提供しようとしていない。

## 5. ヒルバークの資料的証拠

大別すると、ヒルバークが東部戦線の背後でのユダヤ人の殺戮の証拠としてあげているものは、二つのカテゴリーに分かれる。資料と目撃証言(後者には、実行者は定義上目撃者であるので、実行者の自白も含まれている)である。

まず、資料的証拠を検討しよう。その大半は、1941 年 6 月から 1942 年までの行動部隊「作戦報告」である。これは、行動部隊司令官からヒムラーへの日常報告である。この報告には、多くの虐殺が記載されており、アラビア数字の犠牲者数もついている。ソ連

がこの文書を発見したのは、ベルリンの国家保安部事務所であろう。

ドイツ人がこのような犯罪証拠が敵の手に落ちることを許したままにしたという事実が、驚きである。ドイツ人が、「絶滅収容所」や東部戦線の背後での数百万の死体を跡形もなく焼却することができたとすれば、紙の山など簡単に焼却することができたであろう。だから、この文書には最初から偽造の疑いがあるのである。また、文書の信憑性についての技術的問題がある。アメリカの研究者バッツは、次のように要約している。47

「報告は、定期的な反パルチザン活動を報告している以外に、ユダヤ人の大量処刑の個別的な活動を報告しており、普通は、数千にわたる犠牲者の数をあげている。多くの場合、時には百枚のコピーが作成されて配布されたという。[ドイツは、東部戦線の背後での虐殺を、できるだけ早く、残りの世界に知らせようとしていたのである。]それらは複写され、サインはほとんどない。あったとしても、非犯罪的な頁にある。例えば、資料 NO-3159 には、R. R. Strauch のサインがあるが、行動部隊のさまざまな部隊の場所を示している表紙だけである。また、NO-1128 は、ヒムラーがヒトラーに、1942 年 8-11 月の 363211 名のロシア系ユダヤ人の処刑を報告したものである。この話は、NO-1128 の 4 頁にあるが、ヒムラーのイニシアルは、1 頁目にある。さらに、ヒムラーのイニシアルは簡単に偽造できる。3 本の垂直線と 3 本の水平線があるだけである。」

バービー・ヤールはこの作戦報告が偽造であることの反駁できない証拠である。1941 年 9 月 29 日、キエフに侵入した直後、ドイツは、多数の国防軍兵士と民間人を殺した抵抗運動への報復として、33000 名のユダヤ人を射殺したという。虐殺は 1941 年 10 月 7 日の作戦報告 106 号に報告されており48、犠牲者の数はドイツ的正確さで 33711 名とされている。報告によると、この当時のキエフのユダヤ人人口は 30 万であった。

「ホロコースト」史家によると、このあと数週間、数ヶ月に、バービー・ヤールではもっと多くのユダヤ人が殺された。

ウド・ワレンディ49やティーデマン50といった研究者は、この大量殺戮のリアリティをくつがえすような長い矛盾のリストを作っている。重要な論点は以下のとおりである。

- ・ 犠牲者の数は、さまざまであり、30 万にまで達していることもある。
- ・ 1931 年には、約 85 万がキエフで暮らしており、うち、14 万がユダヤ人であった。51 1941 年 6 月 22 日のドイツ侵攻後、民間人の大量疎開が起こった。だから、ドイツ軍がやってきたときにキエフに残っていたのは、30 万のユダヤ系・非ユダヤ系住民であった。52
- ・ ドイツ占領区でのユダヤ人への危険を考えると、租界の中でユダヤ人が占める割合は、平均よりも多かったに違いない。だから、1941 年 9 月に、ドイツが遭遇したユダヤ人は 45000 名以下であったに違いない。こうした状況では、30 万のユダヤ人に言及している作戦報告 106 号は、偽造と思われる。
- ・ 射殺に加えて、目撃者によると、ドニエプル川に沈める、地雷による爆殺、手榴弾による爆殺、生き埋め、装甲車による押しつぶしなどのナンセンスな殺害手段があったという。今日では、ホロコースト正史は、これらの殺害手段については、苦々しく沈黙している。
- ・ 目撃証言は、殺害手段だけではなく、犯罪現場についても一致していない。

- ・ ソ連は痕跡の法医学的調査をやったこともなければ、痕跡を保存しようともしていない。
- ・ 戦後、犯罪現場はゴミ捨て場として使われ続けている。いつも自国の殉教者を大切にするソ連人としては、考えられないような配慮の欠如である。

バービー・ヤールでの虐殺が起こらなかったという決定的証拠は、この分野の専門家ボールによるドイツの航空偵察写真の研究である。53 赤軍がキエフを奪回した直前の1943年9月、ドイツは死体を掘り返して、焼却し、9月29日にそれは終わったという。9月26日の偵察写真は、この当時、バービー・ヤール溪谷にはまったく人間の活動がなかったことを示している。人間集団、乗り物、火をつける木材の山、火や煙などはまったく存在していない。木が自然に成長していることを除いて、地形も植物分布も1941年と比べても、まったく変化していない。

このことは、バービー・ヤールでの大量射殺が宣伝による嘘であることを暴露しており、このことが作戦報告に記載されているという事実は、行動部隊の報告が疑わしいものであり、注意深い分析の対象であることを意味している。

東部戦線の背後におけるドイツの大量虐殺といわれているものは、バービー・ヤールほど大規模なものではない。この虐殺の第一の「証拠」が、作戦報告の一つである。作戦報告によって「立証」されているその他の虐殺は、信用に値するものなのであろうか。

もちろん、行動部隊の本物の報告がソ連の手中に落ちたということはある。そうだとすると、本物の報告が偽造の手本となり、本当の虐殺の犠牲者数が水増しされ、起こってもいない虐殺が発明されたのであろう。

ヒルバーグが簡単に触れているガストラックについて少し触れておこう。ガストラックが実在した証拠としてヒルバーグが引用している唯一の文書が、1942年5月16日に、SS下級突撃隊長ベッカーがSS上級突撃隊長ラウフにあてた書簡である。54

ヴェッカーは、この文書がおそらく偽造であると指摘している。55 このテーマに関するすべての資料を渉猟したピエール・マラスは、ここに言及されている貨物トラックを「ガストラック」として使うことはできないことを示した。例えば、この貨物トラックの製造スペックでは荷物室の高さは1.50メートルの高さしかない。56

ガストラックの話の技術的欠陥は、ザウラーの5トン車がこれらの殺人トラックであったとされていることにある(p. 349; DEJ, na) ザウラーの車両はすべてディーゼル・エンジンであるが、ディーゼル・エンジンの排気ガスは、酸素濃度が高く、一酸化炭素の濃度が低いので、殺人には不適切なのである。「ガストラック」と誤って名づけられているトラックを生産したザウラー社はまた、発生ガスを燃料とする大量の貨物トラックを生産している。この燃料はガソリンの代替となったので、第二次大戦中のドイツでは数十万台が使われた。発生ガスは35%までの一酸化炭素を含んでいるので、それこそ致命的である。だから、ディーゼルの排気ガスとは逆に、発生ガスは理想的な凶器である。しかし、これが、大量殺戮に使われたという報告は存在しない。57

## 6. ヒルバーグの「供述書」と他の目撃証拠

正統派の歴史家たちも、目撃証言にもとづいてなされた第三帝国に対する多くの告発を否認してきた。例えば、カチンの虐殺はニュルンベルク裁判ではドイツの犯罪とされたにもかかわらず58、今日では、もはやそのように考えているものはいない。人間の脂肪

から石鹼を作ったというおそろしい話も、ニュルンベルクでソ連によってなされたものであるが<sup>59</sup>、著名な歴史家でそれを受け入れているものはいない。ヒルバーグでさえ、それを「噂」としている(pp. 1032f.;DEJ, p. 967)。ソ連がニュルンベルクで行なったドイツに対するその他の告発は、もはや忘れ去られてしまっているが、人間石鹼物語以上に、ゆがんだ精神から発したものに違いない。

例えば、ソ連は、ナチスがペダルでこぐ頭蓋骨破壊マシンを使って、ザクセンハウゼン強制収容所で、84 万名のロシア軍捕虜を殺害したと告発した。<sup>60</sup>

西側連合国も、その喧騒な恐怖宣伝の面で、ソ連に劣らなかった。ニュルンベルク裁判では、合衆国検事ジャクソンは、ドイツの軍需大臣シュペーアがアウシュヴィッツで原子爆弾を使って 20000 名のユダヤ人を殺したと非難した。<sup>61</sup> ダッハウの犠牲者は、収容所の掲示板では長らく 238000 とされていたが、実数は約 30000 名であり、しかも、少なくとも半分は、輸送が破壊され、疫病が蔓延した戦争末期の 4 ヶ月に死亡した。<sup>62</sup>

また、ニュルンベルクでは、イギリス・アメリカは、ダッハウ、ブッヘンヴァルト、その他の西側収容所でのガス室についての嘘に忠実であった。例えば、イギリスの首席検事ショークロスは、ドイツが「アウシュヴィッツ、ダッハウ、トレ布林カ、ブッヘンヴァルト、マウトハウゼン、マイダネク、オラニエンブルグのガス室と炉の中で、大量生産のように、[殺人]を行なった」<sup>63</sup>と非難した。こうした事例は、今日の「ホロコースト」史家を当惑させているので、彼らは、これらの事例を真っ赤な嘘として否定するのではなく、それに言及することを避けている。

ニュルンベルク裁判に登場したナンセンスな告発についての興味深いコレクションは、ポーターとレインアルドによって集められてきた。<sup>64</sup>

捏造されたドイツの虐殺を確証してきたのは、「目撃者の報告」や「実行者の自白」であったが、その価値を評価することは難しい。同じことは、東部戦線の背後での虐殺についての多くの目撃証言にもあてはまる。その多くは、ニュルンベルク裁判やその後の戦犯裁判のために作成されたものである。その一つの事例が、上述した、東部戦線の背後でのブローベルの供述書である。ブローベルは、自分と部隊 1005 は大量埋葬地の大半を発掘して、犠牲者の死体を焼却したと供述している。同時に、ハルトウルという名の国家保安部メンバーの別の供述書によると、「観光客を史跡に案内するかのよう、ブローベルの部下が 34000 名のユダヤ人を殺害したキエフ周辺の大量処刑の墓穴に案内した<sup>65</sup>」という。キエフ近郊(パービー・ヤール)の虐殺は起こりえなかったもので、これらの供述は虚偽である。

戦勝国は、このような目撃証言を強制する手段にはことかかなかった。1948 年、判事シンプソンとローデンが率いる代表団は、アメリカが自白を引き出すために拷問を使っていたことを明らかにした。<sup>66</sup> 被告が、免訴や減刑の約束で、自白したり、同僚を告発したりすることもあった。ヘトルのケースが典型である。<sup>67</sup> 「民主主義的な」アメリカがこのような方法に訴えたとすれば、ソ連がそれ以上のことをやったのは当然である。

これが、ヒルバーグがソ連系ユダヤ人の虐殺の証拠としている「目撃証言」や「実行者の自白」の本質である。以下の文章は、このような目撃証言からの一部であり、「ホロコースト」の巨人が何を読者に押し付けようとしているのか、如実に示している。この文章は、pp. 347-348(DEJ, pp. 332-333, 邦訳上 255-256 頁)にある。ヒルバーグの典拠は、1946 年 8 月 23 日のドイツ語の合衆国ユダヤ新聞 Aufbau(ニューヨーク)に掲載された記事であり、その記事は、SS 上級集団長フォン・デム・バッハ＝ツェレフスキの話にもと

づいている。ヒルバーグは、この自白がいつどこでなされたのか読者に明らかにしていない。

「一度、1941年8月半ばに、ヒムラーは自らミンスクを訪れたことがある。彼は、行動部隊Bの司令官ネーベに、100人の人間の集団を射殺するように要請した。このような『一掃』が現実にはどんなものか見てみたいからであった。ネーベは行動した。犠牲者は二人を除けばすべて男であった。ヒムラーは一団のなかに、青い目と金髪の20歳ぐらいの青年を見つけた。発砲する直前に、ヒムラーは、死を運命づけられたこの男に近づき、質問をした。

『おまえはユダヤ人か』

『はい』

『おまえの親は二人ともユダヤ人か』

『はい』

『ユダヤ人でない先祖はいないのか』

『いません』

『それでは、私はおまえを助けられない』

射撃が始まると、ヒムラーはしだいに落ち着きがなくなっていった。一斉射撃のたびごとに、彼は地面を見た。二人の女が死にきれないでいると、ヒムラーは巡査部長に、彼女たちを苦しめるなどわめいた。

射殺が終わると、ヒムラーともう一人見ていた同僚が話をした。もう一人の目撃者とはフォン・デム・バッハ＝ツェレフスキSS大将で、のちに病院に運ばれたあの人物である。フォン・デム・バッハはヒムラーに向かって言った。

『全国指導者殿、たった100人ですよ』

『どういう意味だ』

『部隊の隊員の目をご覧なさい。どんなに彼らが動揺していることか。この隊員たちは一生だめになってしまったんですよ。どんな部下を、私たちはここで訓練しているんでしょう。神経症か野蛮人かのどちらかですよ！』

ヒムラーは目に見えて動揺し、そこに集まっている者全員に話をした。彼は以下のように言った。行動部隊は、不愉快極まる任務を遂行するために召集された。もしドイツ人が喜んでそんなことをしているとすれば、私には気に入らない。しかし、諸君の良心はまったく害されていない。というのは諸君はあらゆる命令を無条件に実行すべき兵士であるからだ。自分だけが神とヒトラーの前で起こっていることすべてに対して責任をとる。…

この演説ののち、ヒムラー、ネーベ、バッハ＝ツェレフスキ、そしてヒムラーの幕僚長ヴォルフは、精神病院を視察した。ヒムラーはネーベに、できる限り早くこの人々の苦しみを終えさせるようにと命令した。同時に、ヒムラーはネーベに、射殺よりもっと人道的方法を『心の中でじっくり考える』ように依頼した。ネーベは、精神病患者にダイナマイトを使う許可を求めた。バッハ＝ツェレフスキとヴォルフは、この病人たちはギニアの豚ではないのだと抗議した。しかし、ヒムラーはこれを試してみるように決定した。ずっとあとになってネーベがバッハ＝ツェレフスキに打ち明けたところによると、患者に試みられたダイナマイトはひどい結果をもたらしたとのことである。」

いったい誰がこんなことを考えるのであろうか。行動部隊司令官ネーベは、かつては、市民生活のなかの刑事警察長官であったのに、今度は、ダイナマイトを使った大量殺戮

を実験したがる技術的な愚か者になってしまったというのである。

ヒルバーグは、このような「目撃証言」と「実行者の自白」を、本物の資料と同じように資料的な価値のあるものとして扱っているのである。

## 7. ヒルバーグは「バルト収容所での射殺」を発明している

ヒルバーグは、バルト諸国からドイツ帝国へのユダヤ人の移送に関して、バルト地方の収容所は 1944 年 5 月の数ヵ月後に解体されたと記している。

「1944 年 8 月から 45 年 1 月までに、数千人のユダヤ人がドイツ帝国の強制収容所に移送された。バルト地方の収容所にいた何千もの人間は、赤軍の到着以前に、そこで射殺された。」(p. 408;DEJ, p. 388、邦訳上 291 頁)。

「ドイツ帝国の強制収容所」とは、シュトゥットホフ(p. 405;DEJ, p. 385、邦訳上 289 頁)、およびダッハウの隣接収容所であるカウフェリング(ヒルバーグは言及していない)であった。68

シュトゥットホフ強制収容所の資料を研究すると、次のような事実が明らかとなる。

1944 年 7 月 12 日から 10 月 14 日までに、10458 名のユダヤ人がカナウス(リトアニア)からシュトゥットホフへ、14585 名のユダヤ人がリガ(ラトヴィア)からシュトゥットホフに移送された。以下がその日付と移送者の数である。69

日付	出発地	移送者数
7 月 12 日	カナウス	282
7 月 13 日	カナウス	3098
7 月 13 日	カナウス	233
7 月 16 日	カナウス	1172
7 月 17 日	カナウス	1208
7 月 19 日	カナウス	1097
7 月 19 日	カナウス	1072
7 月 25 日	カナウス	182
7 月 25 日	カナウス	1321
8 月 4 日	カナウス	793
8 月 9 日	リガ	6382
8 月 9 日	リガ	450
8 月 23 日	リガ	2079
8 月 23 日	リガ	2329
10 月 1 日	リガ	3155
10 月 14 日	リガ	190
合計		25043

もしも、シュトゥットホフだけがバルト諸国からの 25043 名のユダヤ人を受け入れ、それ以外に、多数のバルト系ユダヤ人(われわれには不明)がダッハウの隣接収容所カウフェリングに送られたとすれば、ドイツ帝国の強制収容所に配分されたユダヤ人の総数は、ヒルバーグが述べているような、ほんの「数千」ではないであろう。このような無分別な



数字の歪曲は理解できない。ヒルバーグは、バルト地方の収容所からの「失われた」ユダヤ人をドイツの大量射殺の犠牲者に数えたかったのであろう。

このごまかしは、カナウスとリガからシュトゥットホルフへの移送がポーランド人歴史家 Krzysztof Dunin-Wasowicz によって 1967 年に資料的に跡づけられているだけに 70、犯罪的である。「ホロコースト」についての「決定版」を執筆したアカデミックな歴史家が、適切な研究文献にあたらないか、ポーランド語の知識もないとすれば、まったく言い訳にはならないであろう。

当然、ヒルバーグはバルト系ユダヤ人の収容者の射殺についてまったく資料を提示しておらず、目撃証言、とくに、テネンバウムの証言だけに依拠している。

## 8. 占領されたソ連領のユダヤ人には何が起こったのか

資料が絶望的なほど欠落している中で、現在の条件の下で、たとえ概数であっても、ドイツ人によって殺されたソ連系ユダヤ人の数を確定することは不可能である。アウシュヴィッツでガス処刑されたとされる人々の数よりも困難である。アウシュヴィッツでのガス処刑とされている事件は、図面の記載されており、今日でもその一部が残っている特定の建物の中での出来事であり、その場所が大量ガス処刑に適しているかどうかは、技術的にも、評価しうる。しかし、東部戦線の背後での大量射殺については、その場所の多くが不明であるので、半世紀後に、犯罪現場を検証することは不可能である。唯一可能なのは、広大なロシアの中でどこを発掘すればよいのか知ることができるという条件のもとでの、考古学的な発掘調査である。

ソ連の後継国家は、東部戦線の背後での事件の様相を明らかにするドイツ側資料を所持していると思われるが、問題の資料は政治的な理由から利用できないままである。東部地区でのユダヤ人口の損失問題が解決できるのは、そのような資料を検証することができてからのことである。それまで知られていなかった航空偵察写真が、いわゆるバービー・ヤールの虐殺のような事件のリアリティあるいはリアリティの無さを明らかにしてくれるかもしれない。

東部戦線の背後ではソ連系ユダヤ人の大量射殺が実行されたにもかかわらず、ドイツがユダヤ人の物理的強制収容という政策を追求していたこと、そしてそれは初期からのことであることは明らかである。1941 年 8 月 19 日の 350 歩兵連隊長の報告がその一つの証拠である。<sup>71</sup>

「『ユダヤ人問題』は、もっと徹底的に解決しなければならない。私は『田舎』に住むユダヤ人を全員捕まえて、集中・労働収容所へ入れることを提案する。疑わしき輩は除去しなくてはならない。」

連隊長がユダヤ人問題の「徹底的解決」という用語で、ユダヤ人絶滅を意味しているわけではないのは明らかである。連隊長はこの場合、「疑わしき輩」の除去（これは「殺害」を意味している）という用語を使っているのだから、ここで「コード言語」を使っているわけではない。もしも、「コード言語」を使っているとすれば、疑わしき輩とそれ以外のユダヤ人を区別するのはナンセンスだからである。

ヒルバーグが多くの頁を割いて記述しているゲットー化政策がこの説を確証している。この政策は、治安上の配慮（ゲットーに集中されたユダヤ人を統制するのが容易となる）と経済的必要にこたえるものであった。ヒルバーグ自身も、リガのゲットーに暮らして

いたユダヤ人が、その手仕事の能力のおかげで、ドイツ人にとって如何に重要であったかを強調している。

ドイツ系およびチェコ系ユダヤ人をミンスクとリガに移送することは、東部地区への再移住によって「ユダヤ人問題の最終解決」に着手する不手際で、混乱をきわめた企てにすぎなかった。1943年以降は、ドイツの敗色が濃くなってきたので、この政策を追求することはできなくなった。

リトアニア系および白ロシア系ユダヤ人をラトヴィア、エストニア、ポーランドに移送するのが意味を持つのは、そこには居住施設と雇用機会がある場合に限ってである。そうでなければ、移送目的は、まったく非論理的となってしまう。

ユダヤ人口の損失は、ヒルバーグの推定よりもはるかに少ない。このことは、ドイツ占領以前と以後のソ連の都市のユダヤ人口を比較してみればわかる。ヒルバーグの著作以前には、標準的な著作と考えられていたユダヤ系イギリス人歴史家ライトリンガーの『最終解決』は、1946年の数字をいくつか挙げている。72

キエフ:	100000 名のユダヤ人	
ドニプロペトロフスク:	50000 名のユダヤ人	
オデッサ:	80000 名のユダヤ人	ヴィンニツァ:
14000 名のユダヤ人		

ライトリンガーのこの数字の典拠は、ソ連のイェディッシュ語雑誌 *Ainikeit* の論文であるが、その発行期日については、彼は明らかにしていない。彼は次のように述べている。

「これらの数字は、深い内部からの帰郷の流れが始まったばかりの時期に記録された。」

ヒルバーグは、ソ連がさまざまな時期(1923年から1926年)に実施した人口調査にもとづいて、上記の4つの都市の戦前の人口を上げている。

キエフ:	140200 名のユダヤ人	ドニプロペトロフスク:
83900 名のユダヤ人		
オデッサ:	153200 名のユダヤ人	ヴィンニツァ:
20200 名のユダヤ人		

ヒルバーグによると、ドイツ占領地域で暮らすユダヤ人のうち40%が疎開か、逃亡によってドイツの軍の手を逃れた。ライトリンガーが引用するソ連系ユダヤ人の雑誌が述べているように、帰郷が1946年に「始まったばかり」であるとする、これらの年のユダヤ人のかなり多くの割合が、ヒルバーグの統計(40%の死亡)よりも、生存していたに違いない。また、ヒルバーグは疎開したか逃亡した者の割合を40%としているが、これは、状況から考えて、低すぎる。サニングの『東ヨーロッパ・ユダヤ人の分散』は、ほとんどユダヤ人と連合国のデータにもとづいた詳しい研究であるが、その資料の一部は疑わしいものであるとはいえ、80%という数字に達している。例えば、彼は、ユダヤ人反ファシスト委員会書記ベンゲルソンが、1942年にモスクワで次のように発言しているのを引用

している。73

「疎開は、ウクライナ、白ロシア、リトアニア、ラトヴィアのユダヤ人の圧倒的多数を救った。ファシストが占領したヴィチェプスク、リガその他の大都市からの情報によると、ドイツ軍がやってきたときには、ユダヤ人はほとんどいなかった。」

ベンゲルソンが、ユダヤ人を救うにあたってのソ連の貢献を強調して、疎開した人数を誇大にしたことはありうる。74 逃亡したか疎開したユダヤ人の実際の割合は、ヒルバークの40%よりは多く、サニングの80%よりは少ないであろう。さらに、帰郷運動が始まったのは1946年であったことを考えると、上記の4つの都市の戦前と戦後のユダヤ人口や、ドイツ占領地域のソ連系ユダヤ人は、大量殺戮、ゲットー化、強制収容所でほぼ5分の2を失ったという説とも矛盾している。実際の割合ははるかに低かったことであろう。

## V 移送

### 1. 初期の状況

1942 年初頭、ドイツ帝国、占領国、同盟国からのユダヤ人は大量に、ポーランドの強制収容所とゲットーに送られ、少数が、ドイツ帝国の強制収容所、占領ソ連地域の収容所とゲットーに送られた。移送された人々の数は、保存されているドイツの移送リストのおかげで、問題の諸国の大半については、正確に知られている。例えば、フランスでは、セルジュ・クラルスフェルトの研究によると、約 76000 名のユダヤ人が移送され、それはフランスに暮らすユダヤ人の 5 分の 1 であり、その大半が外国のパスポートを持っているものであった。<sup>76</sup> ベルギー、オランダ、その他の西ヨーロッパ諸国、ドイツ帝国に関しても、数に関しては疑問の余地が無い。ハンガリーについては、ユダヤ人移送者の数は 438000 名であると広く認められているが、アメリカの研究者バツ教授だけがこれに疑問を呈している。<sup>77</sup> しかし、ヨーロッパ・ユダヤ人が集中していたポーランドからの移送については、資料がまったく不完全で、公式の数字にはかなりの疑問の余地がある。

それゆえ、ヒルバーグは、自著の第二巻で 515 頁 (DEJ, 470 pages, 邦訳上 297-515 頁、下 3-145 頁) も割いて移送を記述しており、そこでは、移送の日付と目的地および移送者の数についてはかなりしっかりとした資料的な土台に立脚している。ただし、核心のポーランドに関しては例外であるが、ヒルバーグはまず、ヨーロッパの中でも、ナチスが自分のユダヤ政策を自由に実行できたドイツ帝国本国、ボヘミア・モラヴィア保護領、総督府の状況を記述し、ついで、ナチスが地元の政府や行政機関に配慮しなくてはならなかった国々の状況に移っている。ハンガリーが前者の、オランダが後者の代表例である。

この 515 頁は、大量の無意味な些事で自分の本を膨れ上がらせるというヒルバーグの戦略を如実に示している。

ヒルバーグは、自著の表題『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』とはまったく関係の無い情報の洪水の中に読者を沈める。彼は、クロアチアのパヴェリッチ政府の鉱業大臣がフルコヴィッチであること、スロヴァキアのティソ政府の運輸・公共事業大臣がスターノであること、ルーマニアのアントネスク政府の労働大臣がトメスクであること、その他意味の無い事柄を記述している。彼は、少なくとも 7 頁 (pp. 428-435; DEJ, pp. 410-416, 邦訳上 311-314 頁) を割いて、ドイツ帝国の鉄道「行政 juggernaut」を詳しく記述し、運輸省帝国鉄道管理局のメンバーをペダンティックに列挙して読者をうんざりさせている。

ヒルバーグは、自分が考えているような頁数に達するために、苦勞して集めた、次のような逸話を挿入している。

「1942 年 10 月 3 日、ラドムの宣伝局は、一枚の葉書の配達から生じた騒動を報告している。ポーランドでは、地方のドイツ人住民に向けてクラカウ新聞が発行されていた。この新聞のラドム支局長はリヴォフから一枚の葉書を受け取った。この葉書は、ドイツ語でこう始まっていた。『私はドイツ語ができない。すべてポーランド語からドイツ語に翻訳してくれ』。あとはポーランド語で続けられた。

『くそつたれのリヒャルトさんよ。お前たちに子どもがひとり生まれた。その子が生涯苦しまんことを。われわれユダヤ人がお前たちのために苦しんでいるように。心の底からそう願う。』

この匿名の葉書は、受け取り人を不安にし、プロパガンダの専門家を心

配させた。宣伝局は、これが多数の葉書の洪水の前触れであることを恐れ、この葉書は、犯人を突き止めるために保安警察に送られた。」(p. 548;DEJ, p. 522、邦訳上 397 頁)

このような文章はヒルバークの著作を大部なものとはしているが、良質なものはしていない。

## 2. 移送目的:労働配置か絶滅か

戦争が長引くにつれて、ドイツ帝国やその支配下の国々では、労働力不足がますます際立ってきた。大量の文書資料が、ナチスが一生懸命に、産業、とくに軍需産業のために、新しい労働者を募っていたことを明らかにしている。ここでは、ユダヤ人労働力の配分が決定的であった。ウーチのゲットーのユダヤ人は国防軍のための鉄兜を生産していたが、このように比較的自由に暮らしていたユダヤ人に加えて、数十万のユダヤ人が強制労働力として強制収容所や労働収容所に送られるか、軍需産業で強制労働に従事した。

ヒルバークは、ドイツ人がユダヤ人絶滅政策を追求していたと考えているので、彼にとっては、移送目的は論理的に、一つの目的、すなわち、移送者を絶滅組織のもとに移送することであった。チフスその他の疫病、栄養失調によって、収容所やゲットーでは死亡率がきわめて高かったことを示す、資料的な証拠は大量に存在しているが、ドイツの目標が絶滅であったことを示す資料、とくに、ユダヤ人がガス処刑される「絶滅収容所」が実在したことを示す資料はまったく存在しない。他方、多くの資料が、ユダヤ人が戦争経済に配分されていたことを示している。以下に、いくつかの例を挙げておこう。

ヴァンゼー会議の5日後の1942年1月25日、ヒムラーは強制収容所の監察長官グリックスに次のように書いている。78

「強制収容所に10万のユダヤ人男性と5万までのユダヤ人女性の導入をアレンジすること。強制収容所は、次の数週間で、大きな経済的任務を遂行することを求められるであろう。SS大将ポール79が詳細を伝えるであろう。」

1942年4月30日——定説によると、チェルムノとベウジェッツで数十万の大量絶滅が進行中で、ソビボル、アウシュヴィッツ「絶滅収容所」で同様のことが始まろうとしていた時期——、ポールは次のようなメモをヒムラーに送っている。80

「戦争は強制収容所の仕組みを決定的に変えてきており、囚人の配分に関する収容所の責任を本質的に変えてしまった。治安維持、再教育、予防措置を目的とする囚人の収容はもはや第一義的ではない。焦点は経済的な側面に移った。まず戦争目的のための(兵器産業)、ついで平時の目的のためのすべての囚人労働力の利用が、第一義的となってきた。これを実現するには、強制収容所を、初期の一面的な政治的形態から、経済的な必要に合わせた組織に徐々に変えていかなくてはならない。」

ヒルバークその他の「ホロコースト」の巨人が、五番目の「絶滅収容所」としてトレ布林カが稼動し始めた時期としている月の1ヵ月後の1942年8月21日、外務省ドイツ課長ルターは、覚書に次のように記している。81

「権力奪取後のドイツのユダヤ人政策の原則は、あらゆる手段をつかってユダヤ人の移住を促進することにあった。現在の戦争は、ヨーロッパでのユダヤ人問題を解決する機会と義務とをドイツに提供している。…言及されている総統の指示[ヨーロッパからすべてのユダヤ人を排除せよという1940年8月のヒトラーの決定]にもとづいて、ドイツからのユダヤ人の移送が始まった。同時に、ユダヤ人に対する措置を取っている諸国の国民であるユダヤ人も移送されるべきであると論じられた。…東部地区に移送されたユダヤ人の数は、当地での労働力の需要を満足させるには十分ではなかった。」

この記述は、東部地区へのユダヤ人の移住が労働力を利用する目的であったことを示している。

収容所での高い死亡率はおもに疫病によるものであったが、栄養状態の低さ、衣料の不足によるものでもあり、経済的な効率を著しく低下させていた。このために、1942年12月28日、グリュックスはすべての強制収容所長に一般的な注意事項を送り、そのなかで、囚人の労働力の維持への責任をこれらの所長たちに負わせた。彼は次のように書いている。82

「収容所の医師団は、自分たちの持っているあらゆる手段を使って、収容所での死亡率がかなり低くなるようにするであろう。…収容所の医師は、以前よりも注意深く、囚人の栄養状態に配慮し、収容所長の行政的措置に対応しながら、改善策を提案すべきである。こうしたことは、紙の上だけではなく、収容所の医師団によって定期的に監察されるべきである。…SS全国指導者は、収容所の死亡率を是が非でも低くするように命令している。」

ヒムラーが死亡率を低くせよという命令を出した時期は、ヒルバークやその他の「ホロコースト」史家によると、6つの「絶滅収容所」がフル操業していた時期である。絶滅論はまったく資料的な根拠を持たないのである。

事実、収容所の状況は、この指令の結果著しく改善され、死亡率は8ヶ月で80%ほど縮小した。83

ヒルバークによると、すでに430万のユダヤ人が絶滅されており、80万のユダヤ人が絶滅される予定であった1943年10月26日、ポールは19の強制収容所長に一般的な注意事項を送り、次のように述べている。84

「ドイツの軍需産業の分野では、過去2年間に実行された改善努力のおかげで、強制収容所は戦争の中で決定的に重要となった。われわれは無から、比類の無い兵器工場を建設してきた。

今、われわれは全力を傾けて、すでに達成されている生産レベルを維持するだけではなく、それをさらに改善しなくてはならない。そのことは、作業場や工場が今のまま残っているかぎり、囚人の労働力を維持し、高めることによつてのみ可能であろう。

再教育政策が採用されていた初期の時期には、囚人が有益な仕事をするかどうかは問題とならなかった。しかし今では、囚人の労働能力は重要であり、収容所長、連絡所長、医師団のすべての権限は囚人の健康と効率を維持するために拡大されるべきである。偽りの同情からではなく、わ

れわれは囚人たちの手足を必要としているからである。囚人たちはドイツ民族の偉大なる勝利に貢献しなくてはならないのだから、われわれは心から囚人の福祉に配慮しなくてはならない。

私は、病気のために労働できない囚人を10%以下に抑えることを第一の目標としたい。責任ある部署にいる人々は、いちがんとってこの目標を達成すべきである。それには以下のことが必要であろう。

- 1)適切な栄養供給
- 2)適切な衣服供給
- 3)すべての自然保健措置の利用
- 4)仕事の実行には必要ではない作業をさけること
- 5)報奨の奨励」

ヒルバークによると、まさにこの8日後の1943年11月3日に、ドイツ人はマイダネクとその隣接收容所で4万名以上のユダヤ人を射殺したというのである(p. 559;DEJ, p.532 は、ドイツ人は「一回の作戦で17000名以上を射殺した」と述べている。

1944年に関しても、その多くがユダヤ人であった囚人を軍需産業に配分したことを示す資料が大量に存在する。例えば、5月11日、ヒトラーは個人的に、20万のユダヤ人を戦闘機生産分野に配分するように命令した。85 その数日後、ヒルバークとその一派によると、ハンガリー系ユダヤ人を乗せた最初の死の列車がビルケナウに向かっていた。これ以上のコメントは必要ないであろう。

移送の経済的側面についての資料が大量に存在しているために、ヒルバークもこのテーマを避けることはできなかった。彼は、ポーランド系ユダヤ人の移送と関連して、このテーマに20頁(pp. 550-570;DEJ, pp.523-542、邦訳上398-411頁)を割いており、ユダヤ人労働力の利用の実例をいくつか挙げている。例えば、p. 551(DEJ,pp. 524f、邦訳上398-399頁)で、次のように記している。

「オーバーシュレジエンでは、シュレジエン地域における労働徴発の担当機関、シュメルツ機関によって、何万ものユダヤ人がゲッターから収容所に送り込まれた。1942年までに、何千ものユダヤ人が軍需工場の建設に雇用されていた。彼らは、不可欠の存在だったので、オーバーシュレジエンの上級親衛隊・警察長官シュマウザーSS大將は、1942年4月にヒムラーへの手紙で、大規模な建設プロジェクトに雇用されている6500人のユダヤ人の交替要員を得ることは難しい、と訴えた。数ヵ月後、クルップがブレスラウ近郊のマルクシュテットに海軍の大砲生産工場建設を計画していたとき、この企業は、近くの建設プロジェクトでトット機関(シュペーアの建設機関)が多数のユダヤ人を雇用しているのに気づいた。クルップは、ファンガー海軍中將の『全面的な同意』を得て、これらのユダヤ人を海軍の工場を建設するために移送しないことを提案した。1944年、シュレジエンのクルップ工場は、まだこれらのユダヤ人数千人を雇用していた。」

p. 564(DEJ, p. 537、邦訳上408頁)で、ヒルバークは「ユダヤ人労働力を利用した比較的重要な企業」をリストアップしている。リストには17社がある(DEJは16社、邦訳も16社)。

労働力を緊要に必要としていたドイツ人が、一方では気まぐれに、膨大な数の労働力を絶滅していたという説は、馬鹿げたものであるために、絶滅論の擁護者全員を当惑させている。このために、彼らはずっと、労働に不適切なユダヤ人だけがガス処刑された

のであって、労働に適切なユダヤ人は生かされていたという議論に頼っている。このような言い逃れは、同じ歴史家が、ドイツ人は4つ6つの絶滅収容所で年齢や健康状態にかかわらず無く、無差別のすべてのユダヤ人をガス処刑した<sup>86</sup>、したがって、数十万の潜在的に有用な労働者を殺してしまったと主張していることとまったく矛盾してしまっている。もしも、絶滅政策が存在したのであれば、それなりの論理があったに違いない。しかし、ヒルバークとその一派がナチス体制に帰している政策には、まったく論理が存在しないのである。

このような悲鳴をあげるような矛盾を少しでも和らげるために、ヒルバークは、ナチスの指導部の間で絶滅の支持者と反対者の間で内部抗争があったという話を発明している。例えば、p. 552(DEJ, p. 525、邦訳上 399 頁)では、こう述べている。

「1942年には、民政当局、東部鉄道、軍司令部や軍需監査部と契約している民間企業、そして親衛隊自身も、種々の事業でユダヤ人労働者を使用していた。[こうした部局の中で、代替できないユダヤ人労働者が殺戮センターに流入するのをチェックしようとしていたのは、軍司令官ギーナント、軍需監察官シンドラー中將であった。](この部分は邦訳には無い)」

この記述に関する典拠はまったく存在しない。なぜならば、ギーナントとシンドラー將軍が代替できないユダヤ人労働者が殺戮センターに姿を消し去ってしまうのを阻止しようとしたという話は、ヒルバークの「創作」だからである。

### 3. ヒルバークが創作したガリツィアでの大量射殺

p. 521(DEJ, p. 496、邦訳上 376 頁)では、「ホロコースト」の高名な司祭は、次のように述べている。

「スタニスワウOFFでは、1941年10月12日に、ほぼ1万人のユダヤ人が墓地に集められ、射殺された。42年3月にも射殺が行われ、このあとゲットーの火事が3週間も続いた。4月には、ベウジェツへの輸送が行われ、さらに射殺行動が夏に始まり、このなかで、ユダヤ人評議会のメンバーと治安隊の隊員が、街頭の柱に吊るされた。9月と10月には、ベウジェツに向けて大規模な輸送が行われた。…」

ベウジェツへの移送、1942年3月の射殺、「街頭の柱に吊るされた」ユダヤ人といったことはひとまず脇において、最初の[情報]、すなわち、1941年10月12日のスタニスワウOFFの墓地での約1万人のユダヤ人の射殺について考えてみよう。この数は、この小さな町の人口に対応している。ヒルバークはこの事件について、どのような証拠を挙げているのか、墓地での1万人の射殺について、どのような典拠資料を上げているというのであろうか。まったく一つも無い。目撃証言ですらないのである。言い換えれば、この話は、まったくのキメラなのである。

1943年11月3日に、マイダネクとその隣接收容所のトラフニキとポニャトーヴァで起こったとされる4万以上のユダヤ人軍需労働者の大量射殺については、ヒルバークは少なくとも目撃証言というかたちで、典拠資料をあげている(p. 563;DEJ, p. 537、邦訳上 404 頁)。「ホロコースト」文献では、この事件は「収穫祭」と呼ばれているものであるが、イタリア人研究者マッテオニヨはこの虐殺を始めて厳密に科学的に調査し、それは伝説



の領域に入れるべきものであると断定している。87

#### 4. 屠殺場に行く羊のように

もしも、数百万のユダヤ人が殺戮目的で建設された殺戮工場で殺されたとすれば、これを秘密にしておくことはできないであろう。ヒルバーク自身もこの明白な事実を認めている。例えば、チェルムノ、トレ布林カ、ベウジェッツの「絶滅収容所」について、次のように記している。

「ポーランドは、…6つの絶滅収容所のすべての本拠地であり、輸送は、どの方向に向けても300キロメートルにも満たない距離でしかなかった。多くの目がこれらの輸送に向けられ、その目的地まで追っていった。ポーランド国内軍(ロンドンから指揮された地下活動の軍隊)副司令官、タデウシュ・ポルコモロフスキ大將は、1942年春にはヴァルテガウのクルムホフ(ヘウムノ)絶滅収容所についての完璧な情報を手にいれたと報告している。…42年7月、ポーランド国内軍は、数十万のユダヤ人がトレ布林カで跡形もなく消えてしまったという報告を鉄道労働者から得ていた。88

収容所から漏れてきた情報がまったく正確なこともあった。ルブリン地区では、ザモシチ・ゲッターの評議会議長、ミエシスワフ・ガルフィンキェルがそうした情報を受け取った。1942年早春に、彼は、ルブリンのユダヤ人が満員の列車でベウジェッツに輸送され、そのたびに空の列車がさらに犠牲者を運ぶために戻ってくる、と聞いた。彼は、もっと詳細な情報を手に入れるように求められ、タモスツォウとベウジェッツの近隣のユダヤ人共同体とコンタクトをとって、次のことを知らされた。つまり、毎日1万から1万2000のユダヤ人が、特別な鉄道の支線上にあり、有刺鉄線で囲まれ、厳重な警戒を施された敷地に到着しており、ユダヤ人たちはそこで『奇妙な方法で』殺されている、というのである。弁護士であったガルフィンキェルは、これらの報告を信じなかった。数日後、2、3人の見知らぬユダヤ人がベウジェッツから逃亡してきて、収容所内でのガス殺について彼に語った。それでも彼は聞いたことを信じなかった。しかし、42年4月11日、まさにザモシチで検挙が行われた。ガルフィンキェルは、ゲッターの残った住民を数えて、3150人連れて行かれたことを確認した。翌日、評議会役員(ヴォルステイン)の13歳の息子が収容所から帰ってきた。この少年は裸にされた人々を見ており、親衛隊員が彼らに話すのを聞いていた。ヴォルステインの息子は、まだ服を着たまま、どぶに隠れて、ベウジェッツの秘密を手にして、有刺鉄線の下をはい出たのである。」(pp. 517f.;DEJ, pp. 492f, 邦訳上 373-374頁)

このような状況の下では、大量ガス処刑のニュースは野火のようにポーランド各地に、そしてそこから、隣接する諸国に広がって行ったに違いない。絶滅の危険にさらされたユダヤ人たちは、このニュースにどのように反応したのであろうか。ヒルバークは率直に述べている。

「ポーランド中で、ほとんどのユダヤ人は集合地点に自発的に出頭して、絶滅収容所に向かう列車に乗り込んだ。開いた傷口から血が噴き出るように、ゲッターからの脱出は、ポーランドのユダヤ人社会の何世紀にも及ぶ生活をあつという間に終わらせてしまったのである。」(p. 520:DEJ, p. 495, 邦訳上 375頁)

これはお世辞ではない。ヒルバーグがここで自分の「人種」、仲間のユダヤ人について述べている証言である。この文章のあとに続くユダヤ人の逃亡や抵抗の試みに関する記述は、大半のユダヤ人が自発的に殺戮センターに送られることを認めたという恐るべき主張を消し去っていない。

わが「ホロコースト」の教皇が語っているように、1944年8月は、ポーランド系ユダヤ人のすべてが絶滅されてしまっていた時期であった。しかし、その時期に、ウーチのゲッソーのユダヤ人は、アウシュヴィッツ行き列車に自発的に、抵抗もせず乗り込んだというのである。その理由は以下のとおりとされている。

「実際、ウーチは、移送の遅れによって最大のゲッソーとなっていた89。8万の住民は、さらに2年間、囚人食や1日12時間労働と格闘した。そして、44年8月、『ゲッソーの移動』という見出しのついた告示が張り出された。ユダヤ人たちは、死刑の罰則を科されて移動のために出頭するように命じられたのである。

今度は、ユダヤ人も、ビーボウが彼らをどこに送ろうとしているかを知っており、その結果、座り込みストのようなものが第一作業場と第二作業場で起こった。これらのユダヤ人は長い間持ちこたえ、戦争の終結が間近にせまった今、自発的に死に赴くつもりはないことを示したのである。ドイツ人はプロパガンダ闘争の開始を決定した。ビーボウが話し始めた。…

私は、つねに最善を尽くしてきたし、今もなお最善を尽くしたいと考えている。すなわち、『このゲッソーから移ることで君たちの命を救うために』。ちょうど今、ドイツは最後の力を出して戦っている。何千というドイツ人労働者が前線に行っている。これらの労働者と交替しなければならないので。ジューメンズ・シュツェルト社は労働者を必要としている。ユニオンも、チェンストホヴァの軍需工場も労働者を必要としている。…旅は10時間から16時間かかる。すでに食料は列車に積み込まれている。全員、20キログラムの荷物を持っていける。ポットやフライパン、日用品も持っていった方がいいだろう。ドイツでは、そのような品物は空襲で焼け出された人にしか与えられないからだ。常識だ。以上のようにできなければ、武力が行使され、私はもう助けることができない。

第一作業場と第二作業場のユダヤ人労働者は、その決意を変えた。投降したのである。8月末には、ゲッソーは小さな清掃隊を除いて空になった。犠牲者たちが送られたのは、ドイツの工場ではなく、アウシュヴィッツ絶滅収容所であり、そこで毒ガスで殺されたのである。」(p. 543;DEJ,pp.517f, 邦訳上 393-394 頁)

ウーチのユダヤ人は藁のように押し黙っていたのであろうか、それとも、哀れむべきほど臆病であったのであろうか。自分たちの死刑執行人の約束を信じていたとすれば前者であろう。自分たちの運命を知っていながら、逃げようとしないうか、逃げるチャンスがないか、少なくとも、死刑執行人をできるだけ多く一緒に連れて行こうとしなかったとすれば、後者であろう。羊のように、彼らは屠殺場に向かっていったという話なのである。

1944年であっても、ハンガリー系ユダヤ人はまったく同様であった。ヒルバーグは次のように記している。

「…ハンガリーではユダヤ人が1944年なかばまで生き残っていた。彼らはヒトラーが政権の座にあった最後の年に殺された。枢軸側はすでに敗北に向かいつつあった。…ハンガリーのユダヤ人は、自分たちの共同体がまだ

被害を受けないうちに、これからどうなるか、十分警告され、十分知識を与えられていたほとんど唯一のユダヤ人である。最後に、ハンガリーの集団移送は、外部から隠蔽することができなかったという理由でも目立っている。すなわち、彼らは全世界から完全に見えるところで、公然と連れ去られたのである。」(pp. 859f.;DEJ, p. 797、邦訳下 96－97 頁)

このテーマについて、ヒルバークが、ハンガリー・シオニスト前副議長ルドルフ・カストナー博士の発言を引用している。

「ブダペストでわれわれは、ヨーロッパのユダヤ人の運命を追う唯一の機会を得た。彼らがいかにして次から次へとヨーロッパの地図から姿を消して行ったかをわれわれは見ていた。ハンガリーの占領のときには、死んだユダヤ人の数は 500 万をこえていた。われわれは行動部隊の活動については非常によく知っていた。アウシュヴィッツについては必要以上によく知っていた。…われわれは、早くも 1942 年には、東方でアウシュヴィッツその他の絶滅収容所に移送されたユダヤ人の身に何が起こったか、その全体像をつかんでいた。」(p. 888;DEJ, p. 823、邦訳下 117－118 頁)

1944 年 3 月 19 日、アイヒマンと「国家保安部の移送専門家」数名がブダペストで、ユダヤ人共同体の指導者たちと会合した。この会議について、ヒルバークは次のように記している。

「その集まりのあいだにアイヒマンは生涯最大のショーの一つを演じた。歴史家レヴァイの言葉を借りると、『彼はユダヤ人評議会に、そしてその組織をつづいてハンガリー系ユダヤ人全体に、事実上催眠術をかけた』。

アイヒマンは演説を始めるにあたり、集まったユダヤ人に悪い知らせを伝えた。第一に、ユダヤ人労働大隊を増強すると 90、彼は言ったが、ユダヤ人労働者は厚遇され、夜には家に帰ることも許される、と聞き手たちに請け合った。第二に、ユダヤ人評議会はハンガリー国内の全ユダヤ人を管轄するものとして形成すること。ユダヤ人評議会は、ドイツからの命令の伝達路として、資金と徴税の中心的取り次ぎ機関として、そしてハンガリー系ユダヤ人に関する情報の中心的受託所として活動しなくてはならない。第三に、ユダヤ人評議会はドイツからの命令をすべて掲載した新聞を発行しなければならない。…

ドイツ側の要求について、さまざまなことをアイヒマンは言った。…

ユダヤ人たちは安心した。いまや自分たちは何をすべきなのかを知った。自力でユダヤ人評議会のリストを作成し始めた。…

同時に評議会はユダヤ人住民に声明を出し、規律を守り、命令に従うよう呼びかけた。『中央評議会から命令を受けたら、指示された場所と日時に報告することはすべての人の義務である。』(pp. 889f.;DEJ, pp.824f、邦訳下 118－119 頁)

要点を繰り返しておこう。ハンガリー系ユダヤ人は「これからどうなるか、十分警告され、十分知識を与えられていた」。彼らは、ユダヤ住民が「いかにして次から次へとヨーロッパの地図から姿を消して行ったか」を見てきた。1942 年以来、彼らは、「東方でアウシュヴィッツその他の絶滅収容所に移送されたユダヤ人の身に何が起こったか、その全体像をつかんでいた。」そして、ユダヤ人指導者は何をしたのか。彼らは、自発的に、「ドイツからの命令の伝達路」の役割を引き受け、ユダヤ人住民に「指示された場所と日時に

報告する」ように命令した。ヒルバーグは、ユダヤ人共同体の指導者は「ドイツ側の人質」となっていると述べている(p. 890;DEJ, p. 825、邦訳下 119 頁)

言い換えれば、ヒルバーグが述べているように、移送目的が実際に移送者の絶滅であったとすると、ユダヤ人指導者は、自分の民族の絶滅に自発的に協力する臆病な悪人であったことになる。

## 5. アウシュヴィッツで「ガス処刑」された人々がシュトゥットホフにも出てくる

シュトゥットホフ強制収容所はダンツィヒの東方 36kmのところであり、戦争終結前年のドイツのユダヤ政策を理解する上で、非常に重要な収容所であるが、ヒルバーグは、大部な自著では 4 回しか触れていない。1944 年 6 月 29 日から 10 月 28 日のあいだ、シュトゥットホフはバルト地方(カナウスとリガ)とアウシュヴィッツからの 5 万以上のユダヤ人を受け入れた。91 シュトゥットホフ記念館の文書で、幾つかの移送リストを調べることができる。92 アウシュヴィッツからのユダヤ人のうち、11464 名がウーチから、10602 名がハンガリーからであった。93 また、リガとカナウスからシュトゥットホフに移送されたユダヤ人の多くが、ハンガリー系であった。92 彼らは最初は、ハンガリーから、おそらくはアウシュヴィッツの鉄道ジャンクションを経由して、バルト地方に移送され、赤軍の進撃によってドイツ軍がバルト諸国から後退し、当地の収容所を疎開せざるを得なくなったときまで、弾薬工場で働いていたに違いない。

当時、シュトゥットホフは、労働力の一大配分センターであった。さまざまな隣接収容所に配分されていたユダヤ人囚人、その多くは女性であったが、さらに南に移送されるか、農業労働者として雇用された。94

アウシュヴィッツからシュトゥットホフへの移送者はウーチとハンガリーから移送されてきたハンガリー系ユダヤ人のごく一部であった。その他の人々の処置は依然として明らかではない。東部地区での文書が公開されれば、このテーマについての研究は飛躍的に進むであろう。他方、無事にアウシュヴィッツを去ったユダヤ人の存在は、アウシュヴィッツがヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅センターであったという説に対する、強力な反証である。この移送については、ユダヤ人を労働力として配分するというに関係する多数の文書が残っている。だからこそ、ヒルバーグはシュトゥットホフへの移送に触れていないのである。これらの思想は、ヒルバーグの絶滅論をくつがえしてしまうからである。

ウーチからの移送、ハンガリー系ユダヤ人の移送の理由は、ドイツのゲットー管理局長がウーチのユダヤ人に明らかにしたものの、アイヒマンがハンガリー系ユダヤ人共同体の指導者との会合で明らかにしたものと同様であった。ユダヤ人は労働者として徴募されるというのである。アウシュヴィッツとその隣接収容所で雇うことができない人々は、シュトゥットホフやその他の収容所、あるいは軍需工場に移送された。

ユダヤ人はこのことを知っていた。もしも、自分たちが冷酷な殺戮に直面していることを知っていたとすれば、あるいは、少しでも疑っていたとすれば、アウシュヴィッツに向かう列車に乗り込まなかったであろう。もちろん、彼らはヒルバーグが見下して表現しているような哀れな弱虫ではなかった。彼らが確実な死を予感していたとすれば、懸命に逃亡しようとするか、必死に武器を取ることであろう。

言い換えれば、ウーチとハンガリー系ユダヤ人の共同体の指導者は、何年にもわたって根気強くばら撒かれていた絶滅とガス処刑の物語がまったくの戦争宣伝であることを知っていたのである。

## Ⅶ. 殺戮センター

### 1. 初期の状況

p. 927 (DEJ, p. 861、邦訳下 148 頁)から、「ホロコースト」のメインテーマ、すなわち、殺戮目的のための特別に建設された殺戮センターでのユダヤ人の大量殺戮というテーマに入っていく。ヒルバーグはこれについて次のように記している。

「殺戮センター作戦の[収容所の…邦訳]最も注目すべき点は、[絶滅過程の]当初は別として、それが前例のないものであったということである。かつて史上、人間がベルトコンベアー的に殺害されたことはない。」(p. 927:DEJ, p.863、邦訳下 148 頁)

この章では、第二巻の冒頭からヒルバーグを非常に悩ませていた中心的問題、すなわち、このようなセンターが実在した資料的な証拠が完全に欠落していることが、大半の比重を占めている。世界中の「ベルトコンベアー、アSEMBリー・ライン」の図面や青写真を書き、その写真をとることはできるが、ヒルバーグのそれはできないからである。

チェルムノ、ベウジェッツ、ソビボル、トレ布林カという4つの「純粋な絶滅収容所」からは、まったく文書資料は残っていない。正統派の歴史家は、ドイツ人が文書資料を破壊したためであると説明している。しかし、それでは、アウシュヴィッツとマイダネクについては、ドイツ人は不注意にも、文書資料の山をなぜ残していったのであろうか。連合国の宮廷歴史家たちは、第二の可能性、すなわち、ソ連とポーランドの共産主義者たちはアウシュヴィッツやマイダネクと同様に、4つの絶滅収容所の記録を捕獲したが、それらが、これらの収容所について宣伝された虚像とあまりにも矛盾しているので、破棄してしまった、あるいは、秘密の文書館に隠匿してしまったという可能性を考えたこともない。

ベウジェッツについて、ヒルバーグは、ルブリン総督府内政局住民・福祉部副部長ロイターの雑誌に触れている。この雑誌によると、グロボツニク95の副官ヘーフレは、ユダヤ人用の収容所が総督府の境界近くのベウジェッツに建設中であり、ユダヤ人は境界を越えることはできたが、総督府にはもう戻れなかったと述べている(p. 940f.;DEJ, p. 878、邦訳下 158 頁)。ソビボルとトレ布林カも総督府の東の端にあった。ドイツ側資料が「東部地区へのユダヤ人の再定住」について繰り返し語っており、正統派の歴史家もこれらの再定住が行なわれたことを否定していない<sup>96</sup>ことを考えると、明らかに、これらの収容所は、ユダヤ人たちがさらに東方に移住していくための通過収容所であったに違いない。もちろん、ヒルバーグは、こうした仮説をまったく考慮しようとはしていない。

これら3つの収容所から、あるいは、ウーチの西方に位置するチェルムノ(クルムホフ)からは、戦時中のドイツ側資料はまったく残っておらず、チェルムノのいくつかのバラックの土台以外には、建物の痕跡もまったく存在していないので、ヒルバーグは、2、3の目撃証言としばしば引用されるリュッケルの参考書 *Nationalsozialistische Vernichtungslager im Spiegel deutscher Strafprozesse*<sup>97</sup>——これ自体、西ドイツの裁判での目撃証言にもっぱら依拠したものであるが——に依拠しながら、好き勝手におしゃべりしている。ヒルバーグは、アウシュヴィッツとマイダネクについては、そのようなことはできていない。第一に、殺人ガス室とされる建物が部分的に現存しており、それが殺人目的であったのかどうか検証できるからである。第二に、大量の戦時中の記録が残っており、そこには、絶滅政策や殺人ガス室の存在を示唆するようなものはなく、むしろ、これらの収容所の経済的重要性を示す証拠が大量にあるからである。

「労働力の利用」という節(pp. 982-1000;DEJ, pp. 917-935、邦訳下 186-199 頁)では、ヒルバークはこのテーマを詳しく取り上げている。p. 985 (DEJ, p.921、邦訳下 189 頁)では、彼は、「殺戮センターにおける親衛隊企業」を表にまとめ、pp. 987-994 (DEJ, pp. 922-931、邦訳下 190-195 頁)で、アウシュヴィッツでの I.G.ファルベンの活動を記述している。以下がその抜粋である。

「特徴的なことだが、アウシュヴィッツへの I.G.ファルベンの関与は、ユダヤ人を殺害したり死に至らしめようという願望ではなく、生産上の複雑な問題——合成ゴム(ブナ)の生産の拡大——に起因していた[タイヤの製造に必要であり、戦争のために重要である天然ゴムの不足を考えると]…。

ルートヴィヒスハーフェンに第三番目の工場を建設することを決定した。だが、それだけでは必要とされた生産水準には達しなかった。そこで二つの選択肢が考えられた。つまりヒュルス工場における 4 万トンから 6 万トンへの増産か、もしくは 2 万 5000 トンの生産能力のある新工場の建設である。新工場はノルウェーかアウシュヴィッツが考えられた。

当初から経済省はアウシュヴィッツを推進した。…42 年 2 月 6 日、テル・メーアとルートヴィヒスハーフェン工場長代理オットー・アンブロス博士は、アウシュヴィッツの損得について四カ年計画庁の化学工業担当官クラウフと協議した。

アンブロスは、アウシュヴィッツが水、石炭、石灰に恵まれており、交通網も良好であると強調した。マイナス面は熟練労働力にかけていること、ドイツ人労働者がその地に住みたがらないことであった。…

1941 年 3 月 19 日ならびに 4 月 24 日、技術委員会 98 はアウシュヴィッツでの生産の詳細を決定した。そこには合成ゴム工場と酢酸工場の二つが予定された。…

アウシュヴィッツにおける投資は当初、5 億ライヒスマルク(最終的には 7 億ライヒスマルク)であった。…労働は約 170 人[社]の請負人[請負会社]にまかされた。工場が建設され、道路がつくられ、囚人のバラックが建てられ、有刺鉄線が工場の囲いにされた。アウシュヴィッツの町が I.G.ファルベン関係者たちであふれ、社宅群が二つ建てられた。合成ゴムのために、I.G.アウシュヴィッツに必要な建設資材をすべて確保できるように、クラウフは完成までの第一の優先順位をおくことを指示した。その間、I.G.アウシュヴィッツはフルステン鉱山やヤニナ鉱山の施設とともに石炭補給を保障された。二つの工場はユダヤ人囚人であふれていた。」(pp. 991ff.;DEJ, pp. 924f., 928f、邦訳下 191-194 頁)

こうして、強制収容所に隣接するアウシュヴィッツの町は「I.G.ファルベンの関係者たちであふれ」、「労働は約 170 社の請負会社にまかされた。」一体、ナチスは全力を尽くして、アウシュヴィッツの工業的な殺人のニュースがすぐにヨーロッパ全体に広まるようにしていたのであろうか。しかし、世界は沈黙していた。ヴァチカンも、赤十字も沈黙しており、そして、ドイツをあらゆる虐殺行為の咎で非難していた連合政府でさえもアウシュヴィッツについては触れていなかった。まったく不思議である。

ヒルバークは、アウシュヴィッツへの I.G.ファルベンの関与が「ユダヤ人を殺害しようとする願望に起因してはいない」ことを認めていながらも、「親衛隊のメンタリティが I.G.ファルベンの役員たちの心をとらえていた」と述べている。

「ある日、二人の囚人レイモン・ヴァン・デン・シュトラテン博士とフリッツ・

レーナー＝ベーター博士が仕事にかかっていた。そのとき I.G.ファルベンから訪問していた重役たちが通りすがった。なかのひとりがレーナー＝ベーター博士を指して、随員の親衛隊員に言った、『このユダヤの豚どもがもう少し早く仕事をする事ができればねえ』。また、もうひとりの重役はふっともらした。『彼らが働けなければ、ガス室で殺してしまえ』。(p. 994;DEJ, p. 930、邦訳下 194-195 頁)

身元不詳のI.G.ファルベンの重役が仕事の遅いユダヤ人をガス室で脅かしたというこの話は、1947年7月18日、ニュルンベルクの後継裁判で、アウシュヴィッツの囚人であったヴァン・デン・シュトラテンの行なった供述によって「証明」されている。この事例は特徴的である。「ガス室」99の実在、ユダヤ人の絶滅へのドイツ産業の関与は、連合国の裁判での目撃証言によって「証明」されているのである。検事や敗戦国ドイツの判事にとって、このような証言を手に入れるのは稚技に等しかったであろう。以前の支配者に対する復讐に燃える強制収容所の囚人にはこと欠かなかったであろうし、「供述」を書き留めるタイプライターや文房具にもこと欠かなかったであろう。「ホロコースト」についてのヒルバーグの証拠とは、大半がこのようなものである。

## 2. 「絶滅収容所」の犠牲者数についてのヒルバーグの想像上の数字

p. 956(DEJ, pp. 893, 894、邦訳下 170 頁)で、ヒルバーグは「絶滅収容所における『最終解決』」をまとめ、次のような死亡者数をあげている。

チェルムノ100	: 150000 のユダヤ人
ベウジェツ	: 550000 のユダヤ人
ソビボル	: 200000 のユダヤ人
トレ布林カ	: 750000 のユダヤ人
マイダネク101	: 50000 のユダヤ人
アウシュヴィッツ	: 1000000 のユダヤ人
合計	: 27000000 のユダヤ人

ヒルバーグは、これら 6 つの収容所の非ユダヤ人犠牲者については脚注で済ませてよいと判断しており(p. 955; DEJ, p. 894、邦訳下 170 頁)、その中で、典拠資料をあげずに、アウシュヴィッツでは、250000 の非ユダヤ人、大半がポーランド人が殺された、チェルムノ、トレ布林カ、アウシュヴィッツでは、これもまったく典拠資料をあげずに、数万のジプシーがガス処刑されたと記している。

思慮のある読者であれば、どのようにしてヒルバーグがガス処刑されたユダヤ人 270万という数字に到達したのか知りたいと思うであろうが、その希望は満たされない。まったく典拠資料は挙げられていないのである。例外はチェクの『アウシュヴィッツ・カレンダー』102であるが、それは、アウシュヴィッツに到着した移送者を扱っているにすぎない。言い換えると、この数字は、ヒルバーグがさまざまな身元不明の著者からコピーし、自分なりに部分的に「修正」した、曖昧模糊としたものから取り出した詐欺まがいの数字である。103

フォーリソンは、ヒルバーグの著作を、労力を使った面では評価しているが、その質に関しては「劣悪」と呼んでいる。104 ヒルバーグは、まったく証拠もなく、6 つの収容所で

殺されたユダヤ人 270 万という数字を袖の中から取り出しているが、この「ホロコースト」の教皇の恥知らずなやり口を考えると、フォーリソンの評価に同調せざるを得ないであろう。ダヴィドヴィチは、500 万以上のユダヤ人が同じ 6 つの絶滅収容所で絶滅されたと述べているが<sup>105</sup>、このような「ホロコースト」の初期の研究の品質がもっと「劣悪」だとしても、それはヒルバークへの弁護にはならないであろう。

ベウジェッツ、ソビボル、トレ布林カ、チェルムノについては、典拠資料や物質的痕跡がなければ、合理的な犠牲者数を出すことはできない。アウシュヴィッツについてさえも、1985 年には、ヒルバークは、たとえ「決定版」と銘打っても、数字の資料的な証拠を提示できなかったはずである。この当時まだ、ソ連の文書館の死者登録簿は利用できなかったからである。(この間に利用できるようになった死者登録簿その他の資料を検討すると、アウシュヴィッツで死亡したユダヤ人、非ユダヤ人の数は 16 万から 17 万のあいだである。<sup>106</sup>) マイダネクに関して言えば、ヒルバークは、マイダネク記念館の文書館にある資料を研究する労をとりさえすれば、犠牲者(ユダヤ人、非ユダヤ人)の概数を算出する資料を見つけ出すことができたであろう。<sup>107</sup>

### 3. ヒルバークによる「絶滅収容所」での凶器と死体の除去

#### a. 「純粋な絶滅収容所」

ベウジェッツ、ソビボル、トレ布林カを建設したのは、親衛隊経済管理本部土木建設局(1942 年 3 月に C 課として開設) 108 であった。ヒルバークによると、立地条件は、「隔離と、鉄道への近接を考慮して選ばれた」(邦訳下 157 頁)。収容所の立地条件を検証すると、ソビボルとチェルムノの場合には、「隔離」について語る事ができる。ベウジェッツとトレ布林カは同じ名前の町から約 1 キロメートルのところにあるので、大量殺戮を隠匿することはできなかったであろう。ガス室については、ヒルバークは次のように記している。

「各収容所におけるガス室の数と規模についての情報は、文書記録ではなく、目撃者の回想に依拠している。新しいガス室は古いものより大きかったことについては一致している(42 年夏のベウジェッツにおける同時的ガス殺害能力は 1500 人と推定されている)。ガス室の総数は以下のようであった。ベウジェッツ=3(のち 6)、ソビボル=3(のち 4、5 もしくは 6)、トレ布林カ=3(のち 6 もしくは 10)」(footnote on p. 942; DEJ, p. 879、邦訳下原注 61 頁)

チェルムノでは、ヒルバークによると、ユダヤ人がガストラックで殺されたという(p. 934; DEJ, p. 879、邦訳下 154 頁)。この「神秘的な」乗り物については、東部戦線の背後での事件の箇所ですでに述べているので、これ以上付け加えることはない。

使用されたガスと死体の除去については、ヒルバークは次のように述べている。

「ベウジェッツで最初に使われたガスはびん詰めされたもので、安楽死施設に送られた一酸化炭素か、もしくはシアン水素であった」(p. 941; DEJ, p. 878、邦訳下 158 頁)。

同頁の脚注で、ヒルバークは次のように詳述している。



「オーベルハウザー(ベウジェッツの上級突撃隊長)がびん詰め(Flaschengas)ガスについて触れている。RückerlのNS-Vernichtungslager, pp. 136-137の彼の陳述を参照。オーベルハウザー事件での判決は、ガスがシアンであったことを特定している、Ibid., p. 133」。

「のちに、これら 3 つの収容所(ソビボルとトレ布林カは最初から)はディーゼル・モーターを備えるようになった[のちにベウジェッツはディーゼル・モーターを備えるようになったと報告されている…邦訳]。ソビボルに短期間勤務したドイツ人は、捕獲されたソ連戦車の 8 シリンダー・200 馬力のエンジンがあり、それは、一酸化炭素と二酸化炭素の混合物をガス室に放出した[ソビボルは 8 シリンダー・200 馬力・水冷式のソ連製ガソリン機関をもっており、それは一酸化炭素と二酸化炭素の混合物をガス室に放出するものであった]」(p. 941;DEJ, p. 878、邦訳下 158 頁)。

死体がどのように除去されたのかについては、ヒルバークはこう述べている。

「1942 年には、クルムホフ、総督府の収容所、ビルケナウでは、死体は大きな墓穴に埋められた。まもなく、死体の第二の処理方法が必要になった。…内務省の断種問題担当官である参事官のリンデン博士は、ルブリン地区を訪問したとき、のちの世代の人間はこういう問題を理解できないかもしれないと言ったという。ゲシュタポ長官ミュラーも同じ考えに駆られて、第 4a 出動部隊の司令官ブローベル SS 大佐に、東部占領地域の大量埋葬場を破壊するように命令していた。ブローベルと『1005 部隊』はクルムホフへと移動して、その大量埋葬場をどのように処理できるかを調査した。彼は焼却用の積み薪を築いたり、簡単な焼却炉を作ったり、爆破さえ試みた。…

1942 年から 43 年頃、すべての殺戮センターで死体の発掘が行われた。クルムホフでは、ユダヤ人の作業班が大きな墓穴を掘り返し、死体を引きずり出して、新たに掘られた墓穴や原始的なかまどの中に放り込んだ。ベウジェッツでは、この仕事は、42 年の晩秋に、1 日に 2000 体を焼却することができる収容所の焼却地域で始まった。1 カ月後に、第二のもう少し小さな焼却場ができ、二つの焼却場は 43 年 3 月まで日夜、同時に使用された。ソビボルとトレ布林カでは、穴掘り人がやって来て、死体(ソビボルでは狭軌道の列車で運ばれ、トレ布林カでは引きずって運ばれた)が、古くなった線路で作られた焼却格子の上に積み重ねられて焼かれた」(p. 1045;DEJ, p.976f.、邦訳下 227-228 頁)。

#### b. マイダネク

ヒルバークは、ルブリン収容所のガス室の数や場所についてはまったく事実を提供していない。ガス処刑は一酸化炭素によって行なわれたという。109 ヒルバークは、マイダネクではチクロンBを使った殺人も行なわれたというポーランドの研究書にある主張も紹介している(footnote on p. 943;DEJ, p. 880、邦訳下 159 頁)。彼は、死体の除去方法については何も語っていない。他の「絶滅収容所」と比べると、犠牲者の数は少なかったもので、この問題はほとんど重要ではないというのであろう。

#### c. アウシュヴィッツ・ビルケナウ

p. 946(DEJ, p. 884、邦訳下 164 頁)には、この収容所のガス室に関するヒルバークの情報が載っている。

- ・ 中央収容所(アウシュヴィッツ I)の焼却棟に一つのガス室

- ・ ビルケナウの以前の農家であるブンカー I、5つの小さなガス室がある110
- ・ ビルケナウのもう一つの農家であるブンカー II
- ・ ビルケナウの焼却棟 II と III のおのおのの一つの地下ガス室、それは、1943年3月と6月に稼動し始めた
- ・ ビルケナウの焼却棟 IV と V のおのおのの一つの地上ガス室、それは、1943年3月と4月に稼動し始めた

アウシュヴィッツでの凶器はチクロン B であったという。ヒルバーグは、このガスを選択したのは収容所長ヘス個人であったと述べている。

「[ヘスは]トレ布林カを訪問したのち、一酸化炭素を使う方法が効率的ではないことに気がついた。そのために、彼は、別のタイプのガス、すなわち、すぐに作動するシアン化水素(青酸——商標チクロン B)を自分の収容所に導入した」(p. 945:DEJ, p. 882)。

本物の「絶滅収容所」ビルケナウでは、ガス処刑された犠牲者の死体と自然死した人々の死体は、1943年3月の操業を始めた4つの焼却棟で焼却された(pp. 974ff.;DEJ, p. 884)。ヒルバーグによると、その理論的な処理能力は1日4000名以上であった(p. 1045:DEJ, p. 978、邦訳下228頁)111 ヒルバーグは、だまされやすい読者に、1944年5月と6月には、毎日、ほぼ10000人のユダヤ人がガス処刑され、8月後半にはもっと多い数字が達成され、焼却棟の処理能力が不十分であったので、残った死体は壕で焼却されたと述べている(p. 1045f.;DEJ, p. 978、邦訳下228頁)。

#### d. 健康な胃を持ったホロコーストの教皇

毎日の殺人事件裁判では、凶器が回転式拳銃であるのかナイフであるのか、ハンマーであるのか斧であるのかについての専門家報告が準備されている。数百万の人々が「絶滅収容所」で殺されたというような非人間的な大犯罪では、凶器に関する詳細をすべて聞くことができると考えるであろう。ガス室の話だけではなく、さまざまなガスの使用についてである。ヒルバーグの話をまとめておこう。

トレ布林カとソビボルについては、目撃者はガス室の数さえも一致していない。賢人は、「ヒキガエルを飲み込んででも病気になる人はいない人は、奇妙な胃を持っているに違いない」と述べているが、このことは巨人ヒルバーグにもあてはまる。

- ・ ベウジェッツで当初使われたのは、一酸化炭素とシアン化水素のびん詰めされたガスであった。西ドイツのナチス裁判についてのリュクケルルの本は、シアン化水素であった(「オーベルハウザー事件での判決は、ガスがシアン、チクロン B であったことを特定している」と述べている。殺人者は凶器を変えて、ディーゼル・モーターを使うようになった。
- ・ トレ布林カでは一酸化炭素を使った方法(すなわち、一酸化炭素をガス室に送り込むディーゼル・モーターの使用)が「効率的ではなかった」ので、ヘスはアウシュヴィッツではチクロン B を使うことに決定した。とすれば、ベウジェッツでは、なぜ、チクロン B を止めて、ディーゼル・エンジンを使うことになったのであろうか。

ヒルバーグはまた、このヒキガエルをのみこみながら、目をぱちくりさせることもない。

続けよう。チクロンBは「びん詰めガス」ではない。媒体に吸収されているシアン化水素であり、今日でも、害虫やネズミの駆除のためにCyanosilという名前で使われている。112製品は缶状である。缶が開けられると、ガスが放出され始める。温度が高ければ高いほど、放出は速やかである。チクロンBに関するヒルバーグのコメント(pp. 948f.;DEJ, pp. 884)を見れば、彼がこのことを知っていることがわかる。彼は、チクロンBが「びん詰めガス」であったという西ドイツの裁判所の裁定を引用するにあたって、西ドイツの裁判所は、凶器についての専門家報告を求めることによって、チクロンBとは何であるのか決定する労をとらなかったということの間接的に明らかにしている。

アウシュヴィッツの初代所長ヘスの問題に移ろう。ヘスは、トレブリンカで使われていたディーゼル排気ガスによる大量殺戮手段が効果的ではないことを知って、アウシュヴィッツではチクロンを使うことに決めたという。ヒルバーグがこの話の典拠としているのが、1946年4月5日になされたヘスの供述書である。113

出来事を跡づけてみよう。p. 946(DEJ, p. 884、邦訳下 161 頁)で、ヒルバーグは、アウシュヴィッツ I での大量ガス処刑の開始が「1942 年初頭」、ビルケナウのブunker 1 と 2 での開始が「1942 年春」であったと述べている。10 頁後の p. 956(DEJ, p. 893、邦訳下 170 頁)では、トレブリンカが稼動し始めたのは 1942 年 7 月としている。とすると、ヘスは、1942 年 7 月に、トレブリンカでの方法が効率的ではないことを知って、アウシュヴィッツ I では 1942 年初頭に、ビルケナウでは 1942 年春に、チクロン B を使ったガス処刑をはじめたことになる。これは、論理的であろうか。

ベウジェッツでの死体の除去に関して、1942 年晩秋から 1943 年 3 月までのあいだに、55 万の死体が戸外で焼却されたという。この収容所のあとにはまったく死骸の痕跡を発見できないのだから、この方法は非常に成功したに違いない。だとすれば、非常に効率的であった死体除去方法がなぜアウシュヴィッツでは採用されなかったのであろうか。大金をはたいた焼却棟の建設に、なぜ、トップフ社が招請されたのであろうか。焼却棟の建設が役立たないことは、1944 年 5 月、6 月、8 月に明らかとなっている。ビルケナウでは、このときに、毎日 10000 以上が、8 月にはそれ以上が、焼却されなくてはならなかったのであり、ここに掘られた戸外の壕が「遺体処分の障害を打ち破ったのである」(p. 1046;DEJ, p. 978、邦訳下 229 頁)というのである。ヒルバーグが述べているように、ビルケナウの焼却棟の理論的な最大処理能力は 1 日 4000 名よりも少なかったため、6000 名ほどの残りは壕で焼却されたに違いないことになる。なのに、どうして役に立たない焼却棟を建設しなくてはならなかったのか。二つぐらいの壕を掘れば十分間に合ったはずである。

ヒルバーグの胃は、非常に強い。次々とヒキガエルを飲み込んでも、胃の痛みを感じることはない。

#### 4. ヒルバーグの方法:通貨の切り下げ

法律学では、一般的に認められている証拠の序列がある。序列の頂上には、物理的証拠、すなわち犯罪の物理的痕跡(死体、凶器、血痕、指紋その他)の調査がある。次に位置するのが、文書的証拠であり、最下位に位置するのが、証言証拠である。そのなかでも、特定の証言証拠、すなわち、事件に直接関与している人々の証言は、とくに信頼できないとみなされている。114

ヒルバーグにあつては、この順番は逆である。証言証拠、とくに、関係者の証言が最上

位となっており、次に、文書的証拠がきている。物理的証拠については、ヒルバーグはまったく関心を向けていない。

ヒルバーグは、文書資料が目撃者の供述と矛盾しているときには、自分の絶滅論を補強してくれるかぎり、いつも目撃者の供述を支持している。価値ある研究を行なっているとの名声を持った歴史家であれば、文書資料と目撃証言とが食い違った場合、前者を選択するに違いない。反修正主義の立場を取るフランス人歴史家ジャック・バイナク Jacques Baynacは的確にもこう指摘している。115

「科学的な歴史家にとって、目撃証言は真実の歴史ではない。それは歴史のオブジェである。目撃証言を支持するような文書資料がなければ、目撃証言の価値は低いものである。科学的歴史学の原則は『文書資料がなければ、証明された事実もない』というものであるが、それは決して誇張ではない。」

バイナクの見解は、学会や法曹界での定説であるのだから、この数行の文章だけでも、ヒルバーグの「殺戮センター作戦」の章を粉々に打ち砕くのに十分であろう。

ヒルバーグが、科学的に認められている証拠の序列をまったく逆転してしまっている事例は、害虫駆除剤チクロンBについての文章である。薬剤は、チフスの媒体となるシラミを駆除するために、多くの収容所、絶滅収容所とはされていない収容所でも、使用されていた。死亡率が強制収容所でひどく高くなることがあったが116、それはおもに、チフスの蔓延のためであった。

p. 949(DEJ, p. 886、邦訳下 166 頁)で、ヒルバーグは次のように述べている。

「親衛隊はチクロンを製造していなかったため、ガスは私企業から入手しなければならなかった。それを供給していたのは化学系企業であった。これらの企業は毒ガスによって『害虫駆除』を専門的にやっていた。チクロンはこれらの企業が製造した8つの製品のひとつであった。これらの企業は、建物、バラック、船舶の大規模な消毒をやっていたが、さらに特設ガス室での衣服の消毒、ガスマスクで保護された人間のしらみの駆除などを考えていた。要するに、これらの企業は密閉された空間で、動物や害虫を駆除するために、きわめて強力なガスを使用していたのだ。」

ヒルバーグが、典拠としてあげているのは、1942年2月27日に、ペテルスとゾーセンハイマーという二人のガス専門家が行なった講義である。117 彼はまた(p. 949;DEJ, p. 886 の脚注で)、やはり1942年の「害虫駆除のためのチクロンの使用指示」という使用者マニュアルにも触れている。118

彼が引用している戦時中のドイツ側資料は、チクロン B は害虫駆除用であり、それ以外の目的のためではありえなかったことを明白に示している。しかし、ヒルバーグは次のように書いてしまうのである。

「アウシュヴィッツに必要な[チクロン B の]の薬材量は多くはなかったが、それでもかなりのものであった。アウシュヴィッツに供給されたほとんどすべてが人間のガス処刑のために必要であった[相当の配給量が、人間のガス殺害にたびたび用いられた。燻蒸消毒にはごく少量が使われた…邦訳]」(pp. 952f.;DEJ, pp. 889f.、邦訳下 168 頁)

この件についてのヒルバークの情報は、ルーマニア系ユダヤ人ベンデルであった。ベンデルはアウシュヴィッツの囚人であったが、彼についてはのちに立ち返ろう。

興味深いことに、1989年、プレサックはヒルバークの説をまったくひっくり返して、チクロンのうち97-98%が害虫駆除に、2-3%がユダヤ人殺害のために使われたと述べている。119

ヒルバークが文書資料よりも目撃証言に比重を置いているのはまったく弁明の余地のないことであり、さらに、大半の場合、とくに信用できない関係者の証言を使っているために、その不法性の程度は高くなっている。彼が引用する目撃者の多くは、ユダヤ人強制収容所の囚人である。ドイツ人や、とくにSS隊員についての客観的な証言を期待することはできないし、その上、彼らは、自分たちの自由を奪った人物を絞首刑にしたり、少なくとも投獄したりするような裁判で、証言するという幸運に恵まれた人々であった。

さらに悪いことがある。ヒルバークは、あらかじめ決定されている自分の教義を立証するために、目撃証言をつまみ食いしているのである。彼が自分の研究をはじめて発表した1961年までに、通説の「ホロコースト」理論はすでに固まっていた。すなわち、大量殺戮は、6つの絶滅収容所でガスを使って行なわれたというのである。その1年前、ミュンヘンの現代史研究所の研究者であり、のちに所長となったブロシャートは、ダッハウ、ベルゲン・ベルゼン、ブッヘンヴァルトその他西側の収容所では、まったく人間のガス処刑はなかったと述べていた。120

ヒルバークは既定の自分の「ホロコースト」説にしがみついており、西側の収容所でのガス処刑に関する多くの信頼できない目撃証言121に触れる必要がないと考えている。マウトハウゼンはオーストリアで、シュトゥットホフはポーランドで今日まで保存されているにもかかわらず、ヒルバークは、これらの収容所のガス室なるものについても検討していない。言い換えれば、ヒルバークは、これらのガス室に関する証言すべてが虚偽である、すなわち、目撃者は嘘をついているか、妄想に取りつかれていると考えているのである。だとすると、6つの「絶滅収容所」のガス室に関する証言が、なぜ、信頼できるとあらかじめ考えられているのであろうか。ヒルバークはこのような決定的問題に、まったく触れようとはしていない。

ユダヤ人の大量殺戮に関する戦時中や戦後の目撃証言を拡大鏡を使って検討してみれば、今では忘れ去られてしまっているあらゆる種類の殺害方法があったことを発見するであろう。1945年に刊行された本のなかで、Stefan Szende博士は、数百万のユダヤ人がベウジェッツで電気によって殺された様子を記している。犠牲者は金属板の上に立たされ、犠牲者を乗せた金属板は地下の貯水槽におろされ、そして、高電圧が水を通じて流されたというのである。このとき、「金属板は焼却棺となり、すべての死体が灰として燃え尽きるまで、灼熱していた」というのである。122 サイモン・ヴィーゼンタールも、ユダヤ人がベウジェッツで電気によって殺されたと主張しているが、殺戮の過程については、Szendeとはまったく異なって描いている。123

「人々は、SS 隊員、ラトヴィア人、ウクライナ人によって、集められ、追い立てられて、『浴室』へのドアのところまで走っていった。そこは一時に 500 名を収容できた。『浴室』の床は金属製であり、天井にはシャワーヘッドがあった。部屋が満員となると、SS 隊員が金属板を通じて、5000 ボルトの電流を流した。同時に、シャワーヘッドから水が流れ出した。短い叫び声があり、処刑は終了した。」

ヴィーゼンタールによると、ベウジェッツでこのように殺害された犠牲者の死体は、石鹼に加工された。124

「1942 年末、『石鹼用の移送』というおそろしい叫び声が始めて登場した。総督府でのことであり、工場はガリツィア、ベウジェッツにあった。1942 年 4 月から 1943 年 5 月まで、90 万人のユダヤ人がこの工場の原材料に使われた。」

前述したように、ヒルバーグは、石鹼がユダヤ人の脂肪から作られたという話を神話とみなしているのであるから (pp. 1032f; DEJ, p. 967, 邦訳下 221 頁)、ヴィーゼンタールを神話の作成者とみなしているに違いない。しかし、ベウジェッツでの大量殺戮には別のバージョンもある。戦時中に、ポーランド人カルスキは、ユダヤ人が貨車に詰め込まれ、石灰をまぶされ、その石灰がゆっくりとユダヤ人の骨から肉を食べつくしていったと述べている。125

「まだうごめいている人肉の積荷を積んだ貨車は、魔法にかけられたかのように、ゴトゴト音を立て、振動し、震え、飛び上がったりしながら、端から端へと移動した。」

別の目撃者、ポーランド系ユダヤ人ルドルフ・レーダーは、ガソリン・エンジンがベウジェッツでの殺戮に使われたと述べている。126 ヒルバーグは、ガソリン・エンジンの方がディーゼル・エンジンよりも好適な凶器であるにもかかわらず 127、*Nationalsozialistische Massentoetungen durch Giftgas*にあるゲルシュタイン証言にもとづいて、後者を採用している (p. 941; DEJ, na, 邦訳下 158 頁)。

完全ではないが、ベウジェッツでの殺戮方法に関する目撃証言は次のようになる。

- ・ 地下貯水槽での電気による殺戮、続いて、死体の焼却 (Szende)
- ・ 金属板の上での電気による殺戮、続いて、死体は石鹼に (ヴィーゼンタール)
- ・ 貨車の中での石灰による殺戮 (カルスキ)
- ・ びん詰めの一酸化炭素による殺戮 (ヒルバーグが p. 941; DEJ, na, 邦訳下 158 頁で引用している不詳の目撃者)
- ・ びん詰めのカクロン B による殺戮 (リュクケルが引用している西ドイツ裁判所の判決)
- ・ ガソリン・エンジンの排気ガスによる殺戮 (レーダー)
- ・ ディーゼル・エンジンの排気ガスによる殺戮 (ゲルシュタイン)

ヒルバーグは 4 番目と 7 番目を支持している。これは、なぜなのであろうか。

以下は、ソビボル、トレ布林カ、アウシュヴィッツでの殺戮方法についてのさまざまな目撃者の証言である。太字体はヒルバーグが、採用しているものである。

ソビボル

- ・ シャワー室に偽装された死の部屋の天井にある穴から落ちてくるらせん状の黒い物体 (アレクサンドル・ペチェルスキー 128)
- ・ ディーゼル・エンジンの排気ガス (ポリヤーコフ 129、*Enzyklopädie des Holocaust* 130)
- ・ **ガソリン・エンジンの排気ガス** (ヒルバーグが p. 941; DEJ, na, 邦訳下 158 頁で引用してい

る戦後の裁判での SS 隊員 Erich Fuchs の自白)

#### トレ布林カ

- ・ 死の部屋から空気を排出することによる窒息 (Wassili Grossman131)
- ・ 熱い蒸気スチームによる熱死 (1945 年 12 月ニュルンベルク裁判に提出されたポーランド委員会報告132)
- ・ コンベア・ベルトの上で、首筋を撃つことによる殺戮 (ユダヤ世界会議のBlackbook133)
- ・ **ディーゼル・エンジンの排気ガス** (ヒルバーグは、*Nationalsozialistische Massentötungen durch Giftgas* からの目撃証言を引用している。p. 941;DEJ, na)

#### アウシュヴィッツ

- ・ 電気浴室、空気ハンマー、戦争ガス (戦時中のポーランド抵抗運動報告134)
- ・ 電気の通ったコンベア・ベルト (ユダヤ系ソ連人ポレヴォイの 1945 年 2 月 2 日『プラヴダ』の記事)
- ・ 炉の中で生きたままで焼却、犠牲者は車から炉に押し込められる (Eugene Aroneau135)
- ・ 壕の中で生きたままで焼却 (Elie Wiesel136)
- ・ **チクロン B による殺戮** (1945 年以来の支配的バージョン)

注目すべきは、こうしたさまざまな殺戮手段が、目撃されたとされていることである。例えば、ポーランドの委員会は、トレ布林カの大量殺戮の「証拠」を提出する責任を負ったニュルンベルクの勝者の法廷で、収容所が閉鎖された 2 年以上のあとの 1945 年 12 月に、凶器を熱い蒸気と定めている。すなわち、ポーランド人は 2 年以上もかけて、トレ布林カという同じ名前の町から 1 キロしか離れていない収容所の中で、数十万の人々が殺された方法を発見したのである。そして、この町には、トレ布林カの生存者があふれていたにもかかわらず、<sup>137</sup> これ以上のコメントは不要であろう。

ヒルバーグはこれらのヒキガエルをすべて満足して飲み込んでいます。彼は、「ホロコースト」の唯一の証拠的土台である目撃証言にある数千の矛盾を無視している。「Hilberg dixit<sup>138</sup>…ヒルバーグがこう述べた」という布告によって、収容所ごとの正しいバージョンを決定してしまっているからである。

#### a. ヒルバーグのスター証人

「殺戮センター作戦」という章 (pp. 927-1057;DEJ, pp.861-990、邦訳下 147-236 頁) のなかのユダヤ人のガス処刑についての典拠をいくつかもう少々詳しく見ておこう。ヒルバーグは、自分が引用している箇所、まったく馬鹿げた箇所があることに目をつぶっていることがわかるであろう。

130 頁にわたる箇所から、ヒルバーグが引用している部分を抜き出し、典拠を示している脚注を探し出しておく。一つの脚注が二つかそれ以上の典拠を示したり、いくつかの脚注が何回も登場したりしているからである。

以下がヒルバーグの典拠である。

#### アダルベルト・リュッケル

リュッケルは、ルードヴィヒスブルクのナチス犯罪訴追中央局長であり、

*Nationalsozialistische Vernichtungslager im Spiegel deutscher Strafprozesse*の著者である。彼はこの本を 41 回、典拠としている。139 この本は、「ホロコースト」のすべての証拠が如何に目撃証言——その大半が裁判で行われたもの——に依拠しているのか、西ドイツの連邦裁判所が物理的証拠を如何に看過してきたのかを示している。その一方で、リュッケルは、ヒルバーグの初版をそのまま引用している。片方の手が、もう片方の手を洗っているようなものである。

#### フィリップ・フリードマン

アウシュヴィッツ「文書」を公表したポーランド共産党委員会のメンバー。この本は最初イェディッシュ語で出版され、その後、『これがオスヴィエチムだった』という題の英語版が出版された。ヒルバーグはこの本を典拠資料として 6 回使っている。140 スターリン主義者の宣伝の実例を知るには好適な本であり、以下がその一部である。141

「これは、もし 1941 年を含めると、オスヴィエチム[アウシュヴィッツのポーランド名]の死の工場は 500 万以上を、ある計算によると 700 万を飲み込んだことを意味する。」

アウシュヴィッツの犠牲者の数を 125 万(100 万のユダヤ人と 25 万の非ユダヤ人)算定しているヒルバーグは、犠牲者が 500—700 万であったとするフリードマンの本を典拠資料とするのに尻ごんではない。

#### ルドルフ・ヘス

ヘスはアウシュヴィッツの初代所長であり、この収容所での大量絶滅の第一級の証人である。ヒルバーグは彼を 26 回言及している。142

彼は、ユダヤ人軍曹バーナード・クラークが率いるイギリスの拷問チームによって143、3 日間にわたって厳しく尋問され、自白した。そして、その自白の中で、最初のアウシュヴィッツ所長は、アウシュヴィッツではすでに 1943 年 11 月までに、250 万人がガス処刑され、さらに、50 万人が病気、飢え、その他の死因で死亡したと述べている。144 自分の好みに合わせて統計数字を操作するヒルバーグは、当然ながら、このヘスの供述については触れていない。ヒルバーグから見ても、かなり誇張された数字は、ヘスの自白が自発的なものではなく、それゆえに、価値のないものであったことを示しているからである。

ヘスは、「自白」の中で、1941 年 6 月にトレ布林カ収容所を訪問した——1942 年 7 月に開設されたはずなのに——とか、存在もしない「ヴォルゼク」収容所のことを語っている。ヘスがポーランドに引き渡されたとき、クラクフ刑務所に収容され、そこで、看守が語ったことを自分の回想録として書き残したのである。145 私は、自著 *Auschwitz. Taeteregestaendnisse und Augenzeugen des Holocaust*<sup>146</sup>の中で、この「回想録」には 33 箇所以上の不可能な個所があると指摘したが、それがすべてではない。

#### ルドルフ・ヴルバ

スロヴァキア系ユダヤ人ヴルバ(もともとはヴァルター・ローゼンベルグ)は、アウシュヴィッツでのユダヤ人絶滅説についての主要な目撃者の一人であると考えられているけれども、ヒルバーグは「殺戮センター作戦」の章では彼のことをわずか 2 回しか典拠資



料としてあげていない。147 ヴルバと彼の同郷人のユダヤ人アルフレッド・ヴェツラーが1944年4月にアウシュヴィッツからの逃亡に成功したのち、彼らは、同年11月に、その他の報告とともに、「戦争難民局報告」という題で報告を書いた。それは、はじめて、チクロンBを使った大量ガス処刑についての物語に触れたものであった。この報告を読むと、ヴルバとヴェツラーがガス室のある焼却棟を実際には目撃していなかったことが分かる。彼らが描いた図面は、焼却棟の実際の配置には一致していないからである。例えば、彼らは、焼却棟Ⅱと死体安置室(いわゆる「ガス室」)が炉室と同じ階にあると述べているが、実際には地下にあるし、また炉の数も間違っている。148

ヴルバはこれらの誤りを1964年の「実際の報告」『私は許すことはできない』149の中で「訂正」しており、ヒルバーグはそれを引用している。彼は、1943年にヒムラーがアウシュヴィッツを訪問し、そのときに、ビルケナウの焼却棟が3000名のユダヤ人のガス処刑から操業開始した150と妄想している(難民局報告では、8000名としている)。このガス処刑の記述についての文章を検証するであろう。実際には、ビルケナウの最初の焼却棟が稼動し始めたのは1943年3月(p. 946;DEJ, p. 884、邦訳下164頁)であり、ヒムラーがアウシュヴィッツを最後に訪問したのは1942年7月であった。151 トロントでのツンデル裁判のとき(1985年)、ヴルバは検事側証人として、まったくのへまをやってしまった。ツンデルの弁護士クリスティの厳しい尋問を受けて、彼は、自分が「詩的な文学操作」を使ってしまったことを認めてしまったのである。152

#### オリガ・レンギル

ヒルバーグは、ハンガリー系ユダヤ人女性レンギルを7回典拠資料としてあげている。153 彼女は自著『5つの煙突』では、ビルケナウの焼却棟が24時間で17280体を焼却できたと述べている。理論的な最大処理能力は1日1000体であった。154 さらに、焼却壕の助けを借りて、1日24000体が焼却されたという。ビルケナウでは、1944年5月初頭から7月22日のあいだに、131万4000人が絶滅されたという。155 前述したように、ヒルバーグは、アウシュヴィッツ・ビルケナウの全存在期間で(絶滅された人々、自然死した人々を含めて)犠牲者は125万人であったと述べている。レンギルはまた、人間の脂肪の産業的な有効利用について、次のようなナンセンスなことを述べている。156

「北方の超人はあらゆる物を有効利用する方法を知っていた。高い温度で溶けていた人間の脂肪を集めるために、巨大な樽が使われた。収容所の石鹼が独特な臭いを発していたのは驚くべきことではない。さらに、囚人たちが、太いソーセージの切れ端を見て疑いを抱くようになったのも驚くべきことではない。」

#### エリー・ヴィーゼル

この証人はおそらく、「ホロコースト」のスター証人の中でもっとも有名な人物であるが、ヒルバーグが典拠資料として引用しているのはわずか2回だけである。157 ルーマニア系ユダヤ人のヴィーゼルは1944年4月から1945年1月まで、最初はビルケナウに、ついでアウシュヴィッツ中央収容所に収容されていた。彼は、「事実報告La Nuit」では、仲間のレンギルによると、131万000名、ビルケナウ数百万のユダヤ人がビルケナウでガス処刑されたとされているときに、一度もガス室については触れていない。158 ヴィーゼルの話は、ユダヤ人は炎の壕に押し込まれた、あるいは自発的に行進していった

というものである。159

「私たちの列は、覆いまでわずか 15 歩であった。私は、父に私の歯がちがちになっているを聞かせないようにするために、唇をかみしめた。あと、10 歩であった。8 歩。7 歩。私たちは、葬式の霊柩車のあとを追うように、ゆっくりと進んだ。あと 4 歩であった。3 歩。私たちの目の前には、壕と炎があった。」

ヴィーゼルが燃えさかる壕からどのように奇跡的に逃げることができたのかを知りたい人は、この本を読めばよい。

#### ミクロス・ニーシュリ博士

ヒルバークが 4 回典拠資料として引用している160ユダヤ人医師ニーシュリは、アウシュヴィッツに収容されており、そこで、メンゲレ博士とともに医師として働いていたと「主張している」。1946 年、彼はハンガリー語で「事実報告」を書き、それは多くの言語に翻訳されて、1992 年に、*Im Jenseits der Menschlichkeit*という題で再刊された。ニーシュリは、ビルケナウでは、1 日 20000 名がガス処刑され、焼却棟で焼却されたと述べている。実際の理論的な最大処理能力よりも 20 倍以上も大きな数字である。彼は、「ブンカー」と呼ばれたガス室に改造されたビルケナウの農家についてはまったく知らず、脱衣地域とされた農家の「横で」、毎日 5000—6000 名が、炎がもえたぎる壕に押し込まれ、生き埋めにされていたと述べている。161

#### ジギスムンド・ベンデル

ヒルバークは、このルーマニア系ユダヤ人医師を、アウシュヴィッツに搬送されたチクロンBの大半がユダヤ人絶滅のために使われたという情報源として 2 回上げている。162 ベンデルは、イギリスが、デゲシュ社社長テシュと彼の側近ヴァインバヒャーを告訴した 1946 年の裁判で、検事側証人であり、この二人を絞首台に送り込むのに大きく貢献した(第三の被告ドロシンは無罪となった)。以下は、イギリスのドラパー大佐によるベンデルに対する尋問である。163

Q: アウシュヴィッツ収容所が存在した全期間に、どれだけの人々が絶滅されましたか。

A: 400 万以上です。

Q: あなたがビルケナウにいたとき、1 日にガス処刑された人々の最大の数はいくつですか。

A: [1944 年]6 月には、毎日毎日 25000 名がガス処刑されました。

Q: ガスでですか。

A: 青酸によってです。…各焼却棟には二つの部屋がありました。焼却棟 1 と 2 [通常の名称ではⅡとⅢ]では、1000 名が押し込まれたので、二つのガス室には 2000 名が収容されました。

Q: 部屋はどのくらいの広さでしたか。

A: 各ガス室は長さ 10m、幅 4m でした。一人も詰められないほど、ぎゅうぎゅうに詰め込まれました。SS 隊員は非常に喜んで、すでに詰め込まれていた人々の頭越しに子供をこの部屋に投げ込んでいました。…死体は大量埋葬地に投げ込

まれましたが、髪は切られ、歯は引き抜かれました。これを目撃しました。

Q: 金歯だけが抜かれたのですか、それともすべての歯が抜かれたのですか。

A: ナチス政府は、400 万の死体から 17トンの金を取り出したにもかかわらず、金が不足していると述べていました。

この後で、ベンデルは、被告の弁護士ツィッペル博士から反対尋問を受けた

Q: ガス室は 10×4×1.6m であるといいましたね。正しいですか。

A: はい。

Q: 64 m<sup>3</sup>となりますね。

A: 確実ではありません。

Q: 1000 人を 64 m<sup>3</sup>の部屋に押し込めることができますか。

A: 自分自身で答えなくてはならないことです。ドイツ的なやり方でのみ可能です。

Q: 10 人を 0.5 m<sup>3</sup>のスペースに押し込めることができるとまじめにお考えなのですか。

A: アウシュヴィッツでガス処刑された 400 万人がその証拠です。…

Q: ドイツ人は死体から 17 トンの金を取り出したと述べていますが、1 トンとは 1000kg のことですね。

A: はい。

Q: ということは、男性、女性、子供や赤ん坊、すべての犠牲者が 4g の金を持っていたと主張されるのですね。

A: 多く持っていた人もいれば、少なく持っていた人もおり、また、まったく持っていなかった人もいたに違いありません。歯の状態によります。

これこそが、巨人ヒルバークが信頼できる証人と呼んでいる人物である。ヒルバークは、物理的証拠あるいは資料的証拠のかわりに、このような疑わしい証言を提供している。誠実な研究者であれば、ヒルバークの本を受け入れることはできないであろう。

### ギッタ・セレニー

*Into that Darkness* (1980 年にドイツでウルシュタインから *Am Abgrund. Eine Gewissensforschung* という題で出版)の著者。ヒルバークは 8 回触れている。164 ハンガリー系ユダヤ人女性セレニーは、トレ布林カ所長フランツ・シュタンゲルが西ドイツの監獄にいたときに、何回もインタビューし、彼女の本によると、彼は監獄の中で、収容所で大量殺戮を認めたという。シュタンゲルは、最後のインタビューののちに、不可解な状況の下で死んだ。セレニーの本は、シュタンゲルが実際にそのような供述をしたということについてまったく証拠を提示していないので、歴史資料としては価値がない。会話の証拠としての録音テープも提出していないし、インタビューとされるもののメモも発表していない。死者に口なしというわけであるから、セレニーは望みどおりのことを彼の口から語らせることができる。

さらに、シュタンゲルがトレ布林カでの大量ガス処刑を自白していたとしても、それはまったく証拠とはならないであろう。彼は終身刑について控訴していたのであり、自分の犯罪について争うことは、「強情な否認」とみなされ、減刑や恩赦を不可能にしてしまうからである。自白した被告は、ユダヤ人の絶滅を認めた代償として、西ドイツの裁判所

からわすかばかりの恩赦を期待できたからである。165

#### クルト・ゲルシュタイン

ベウジェッツでの大量ガス処刑についての主要証人であり、ヒルバークは、典拠資料として6回使っている。166 SSの衛生担当将校であったゲルシュタインは、戦後の自白でこれらのガス処刑を記述している。もっと正確に言えば、6つの自白の中である。フランス人のロックが指摘したように、ゲルシュタインの自白は少なくとも6つあり、それぞれがかなり異なっているからである。167 ゲルシュタインは1945年7月にフランスの監獄で自殺した。彼は、2000万から2500万がガス処刑されたと主張している。彼は、ベウジェッツでは、700-800名のユダヤ人が25㎡のガス室に押し込められたと述べているが、それでは、1平方メートルのスペースに28-32名が押し込められたことになる。アウシュヴィッツについては、彼自身は行ったことがないのだが、数百万の子どもたちが、青酸のしみこんだ木綿の詰め物を鼻の下に入れられることによって殺されたと述べている。殺された囚人の衣服や靴が35-40mも山積みになっていたという妄想が、彼の自白の白眉である。168

#### ルドルフ・レーダー

ゲルシュタインと並んで、レーダーはベウジェッツでのガス処刑の唯一の証人であり、この収容所での自分の経験を1946年にクラクフで出版した。169 ヒルバークは彼を典拠資料として2回引用している。170 彼は、収容されたとき60歳以上であり、役に立つ若いユダヤ人がもつといたにもかかわらず、労働部隊に選別された。彼は数ヶ月を、「サディスティックな喜びをもって残虐のかぎり尽くす無慈悲な怪物」のもとで過ごし、少なくとも80回以上の絶滅作戦を生きのびた。ある日、無慈悲な怪物は、レーダーと一人のSS隊員を自動車に乗せて、買い物にやらせた。このSS隊員は眠ってしまい、レーダーは逃亡することができた。171 彼は自分の報告の中で、「300万人」がベウジェッツで殺されたと述べている。172 彼があげている凶器は、ゲルシュタインのようにディーゼル・エンジンではなく、ガソリン・エンジンである。173

#### ヤンキエル・ヴィエルニク

ポーランド系ユダヤ人で、靴職人、トレ布林カの囚人。ヒルバークは5回典拠資料としている。174 以下は、彼の「体験報告」から選んだ二つの抜粋である。175

「ウクライナ人はいつも酔っ払っており、収容所で盗むことに成功したすべてを売って、ブランディ代にあてた。…彼らは、たらふく飲み食いしてしまうと、別の娯楽を探し始める。自分たちの区画の傍らを通り過ぎていく裸の女性移送者の中からもっとも美しいユダヤ人少女たちを選び出して、兵営に連れて行き、強姦してから、ガス室に送った。…

死体はガソリンに浸された。これにはかなりの費用がかかったが、結果は不十分であった。男性の死体は簡単には燃えなかった。飛行機が頭上を通過するとき、すべての作業が中断され、空からの偵察に対するカモフラージュのために、葉っぱが死体かけられた。非常におそろしい光景であり、人間が目にするものの中でもっともグロテスクであった。妊娠した女性の死体が焼却される時には、そのお腹が開かれた。胎児が現れ、母の子宮の中で燃えていくのを見ることができた。…悪人たちは灰の側に立

ち、悪魔的な笑いを浮かべながら、身をゆすっていた。彼らの表情は、まったく悪魔的な満足感に満ちていた。彼らはブランディや最上の酒でそのシーンを焦がしながら、食べ、大酒を飲み、長い時間をかけて、炎で身を暖めた。」

ヴィエルニクは、かなり長い期間、絶滅作戦に直接参加したと主張している唯一の目撃証人である。その彼は、自分自身で燃える死体について驚くべきことを語っているのである。176

「女性の死体は、男性の死体よりもよく燃えることが分かった。だから、女性の死体は、火を燃やすために使われた。」

これが、ヴァーモント大学教授である巨人が、現代の知的世界に提示している主要な目撃証人である。納税者たちは、彼が 30 年間に渡って、自分の感受性の高い子どもたちに「教え」続けてきた理由をまさに疑うことであろう。

#### b. ヒルバークのお気に入りのユダヤ人目撃証人：フィリップ・ミュラー

わが「信頼すべき」目撃証人のパレードをミュラーでしめくろう。スロヴァキア系ユダヤ人のこの人物は、アウシュヴィッツで 3 年間を過ごし、焼却作業に配置された特別労務班に属していた。戦後丸 34 年たった 1979 年に、ゴースト・ライターのヘルムート・フライタークの助けを借りて、ミュラーは *Sonderbehandlung* と題する本 177 を書いた。ヒルバークは少なくとも 20 回典拠資料として引用しており 178、これは、スター目撃証人のヘスよりも 6 回少ないだけである。名誉に値する人に名誉を。「ホロコースト」に関するこの本からいくつかの文を引用しておこう。それは、ヒルバークにとって本質的な内容のものである。

ミュラーは、アウシュヴィッツ I の中央収容所での最初の作業日にガス室にいた。

「シュタルクが『働け、死体から衣服をはげ』と叫び、ひどく殴りつけてきたので、私は作業に移った。私の前に、女性の死体があった。震える手を広げながら、私はこの女性のストッキングを脱がし始めた。…少し休憩したかった。シュタルクを注意深く見つめ、彼の目に触れないときに、一息入れる機会を待っていた。彼が焼却室に向かったとき、その一瞬がやってきた。目の片隅に、食べ物が入った半開きのスーツケースが写った。忙しいふりをしながら、片手で服を脱がし、もう一方の手でスーツケースをまさぐった。片方の目でドアのほうを見ていると、シュタルクが突然戻ってきたので、急いで、いくつかの三角形のチーズとケシの種ケーキを引っつかんだ。汚れた、血に染まった指でケーキを砕いて、がつつと食った。」(Müller, pp. 23f.; EA, p. 12)

ミュラーのこの記述は、まったくありえないことである。彼は青酸で汚染された部屋の中ではガスマスクをつけていたはずであるが、その中でものを食べたというのである。SS は特別労務班をガスマスクなしでガス室に送り込んだのであろうか。それとも、特別労務班は青酸に抵抗力があったのであろうか。

ガス処刑の話では、犠牲者は前もって服を脱いでいたはずである。死体から衣服を剥ぎ取る作業には、余分な何百時間の重労働が必要であり、特別労務班にも危険が大きくなったはずである。青酸に触れることは危険であり、皮膚に付着するからである。

「[1つの炉室で]3体を焼却するには20分が割り当てられていた。この時間を厳格に守らせるのがシュタルクの仕事であった。」(Müller, pp. 20; EA, p. 16)

今日、近代的な焼却棟の炉室で1体を焼却するには、平均ほぼ1時間である。179 トップフ社は戦時中のドイツの強制収容所に焼却棟を設置したが、この時間がその戦時中の焼却棟にも適用できることは、とくに、オランダの通過収容所ヴェステルボルクのデータから確証できる。そこには、焼却ごとの時間が確定されている。180 もしも、一つの炉室で2体を焼却するとすると、約2倍の時間がかかる。それは、1kgの木材をかまどで燃やすよりも、2kgの木材をかまどで燃やす方が、約2倍の時間がかかるのと同様である。だから、一つの炉室で3体を焼却することが可能であるとすれば、焼却時間はほぼ3倍となり、ミュラーが述べている時間のほぼ12倍である。しかし、「3体を焼却するには20分が割り当てられていた。この時間を厳格に守らせるのがシュタルクの仕事であった」というのである。SSが命令すれば、熱力学の法則も通用しなくなるらしい。

ドイツ人医師に対するミュラーの印象はひとときわ好意的ではない。

「SSの医師たち、とくに、SS大尉キットとSS中尉ウェーバーは、ときどき焼却棟を訪れていた。彼らが訪れているときには、屠殺場で働いているかのようであった。彼らは牛の売人のように、まだ生きている男性と女性の太ももやふくらはぎにさわり、犠牲者が処刑される前に、極上の品を選別した。処刑が終わると、選ばれた死体が台の上に上げられた。医師たちは、太ももやふくらはぎからまだ温かい肉を切り取り、それを容器の中に投げ込んだ。射殺された人々の筋肉はまだ伸びたり、縮んだりしており、バケツを飛び上がらせた。」(Müller, pp. 74; EA, p. 46)

ミュラーは、自殺を決意してガス室の中の犠牲者に加わった。しかし、

「薄暗い明かりのついたガス室の雰囲気は、緊張した絶望的なものだった。死が切迫していた。数分後のことであった。われわれについての記憶、痕跡はまったく残らないであろう。もう一度、人々は抱き合った。親たちは自分たちの子供を激しく抱きしめたので、私の心は張り裂けそうになった。突然、数名の裸の若い女性が私のところにやってきた。彼女たちは、黙って私の前に立ち、考え込みながら私をじっと見つめ、激しく頭を揺らした。ついに、その一人が勇気を奮い起こして、私に話しかけた。『あなたが自分の意志で私たちともに死ぬことを選択しました。その決意は無意味であると伝えに来ました。私たちは死ななくてはなりません。しかしあなたには、助かるチャンスがあります。収容所に帰って、私たちの最後の瞬間の様子を伝えてください。彼らにいっさいの幻想を捨て去ることを説明してください。彼らには子供たちがいないので、それは簡単なことでしょう。多分、あなたはこのおそろしい悲劇を生きのびることでしょうから、何が起こったのかをすべての人々に伝えてください。もう一つあります。私が死んだら、金のネックレスを取り、それをボーイフレンドのサーシャに渡してください。彼はパン屋さんで働いています。ヤナからの愛と伝えてください。すべてが終われば、ここで私を見いだすでしょう。』彼女は、私の立っているコンクリートの柱の隣の場所を指さした。これが彼女の最後の言葉だった。私は、死を目前とした彼女の冷静さ、超然さに驚き、心を大きく動かされた。そして、彼女のさわやかさにも。私が彼女の心動かされる話に答える前に、彼女は私の手を取って、ガス室のドアの前に引きずっていった。彼女たちは私をドンと押し、私はSS隊員の真ん中に出た。クルシュスが最初に私を見つけ、す

ぐ棍棒で私を殴った。私は床に倒れ、立ち上がると、彼の拳骨で殴り倒された。3、4回目に立ち上がると、クルシュスは私に叫んだ。『糞をお前の間抜けな頭の中に入れろ。お前がどれほど生きられるのか、いつ死ぬのかを決めるのはわれわれだ。お前ではない。炉にシヨンベンを引っかける。』そして、彼は私のかをひどく殴ったので、私はドアのところへよろめいた。』(Müller, pp. 179; EA, p. 113f)

いたるところで、巨人ヒルバーク教授は、だまされやすい読者に、ユダヤ人は立錫の余地もないほどガス室に押し込まれたので、子どもたちは大人の頭越しに投げ込まれたと述べている。しかし、ここでは、ガス室には、走ったり、「英雄」を押し出したりするだけのスペースがあったという目撃証言を提示しているのである。さらに悪いことに、ガス室にいる人々がこれから何が起こるのか知っていたとすれば、彼らは、自分たちが逃げようとするかわりに、ミューラーを、明らかに開いているドアから押し出そうとしているのである。

ビルケナウにハンガリー系ユダヤ人の移送が行われていた1944年夏、特別労務班は忙しかった。

「…二つの壕は長さ40–50m、幅約8m、深さ2mであった。しかし、この苦悶の場所はまだ、まったく使用可能ではなかった。粗雑な作業が終わると、あくどい絶滅実行人が自分の考えで、それを洗練されたものとした。エックハルト[オット・モル]が助手を連れて、壕の中に降り、25–30cmの幅の筋を引いた。それは、真ん中から端まで長く引かれていた。中央からゆるい坂となっている溝を掘ることによって、壕の中で燃えている死体から脂肪を集め、それを溝の両端にある二つのなべに集めることができたのである。…

死体が山詰めされていたので、空気を外から送り込むことができなかった。このために、火を燃え立たせる係りであるわれわれは、燃えている死体に絶えず、石炭や木材アルコールを注がなくてはならなかった。それに加えて、大量に集められた人間の脂肪が、壕の両側の二つのなべの中で煮えたぎっていた。じゅうじゅうという脂肪が長い曲がったロッドの上にあるバケツに汲み取られ、壕に注がれ、炎をいつそう燃え立たせて、はちばちといわせた。』(Müller, pp. 207f.,217f.; EA, p. 130,136)

ヒルバークは p.1046 (DEJ; p. 978) でこのきわめて馬鹿げた光景を取り上げている。焼却にあたっては、脂肪が最初に燃えることは明らかである。脂肪は溝の中には流れていかず、すぐに炎となってしまうであろう。液体の脂肪はオイルのように燃えるからである。

ミューラーその他の目撃者はビルケナウの壕での焼却を描いているが、そのようなことが問題の時期に起こりえなかったことは、連合国の航空写真によって明らかである。この航空写真の解釈についてはボールの精力的な研究181に負っている。1944年5月31日の写真には、焼却棟Vの背後から小さな煙が昇っているが、それは、目撃証言が描いているような壕からのものではない。その他の場所や、その他の航空写真には煙のようなものはまったく写っていない。182

ミューラーは、SS 軍曹モルが次のようなやり方で楽しんでいと述べている。

「彼が時々熱中していたもう一つの異常な娯楽は、泳ぐかえると呼ばれていた。不運な犠牲者が焼却棟の周りのプールの一つに入ることを強制され、疲労で死んでしまうまで、かえるのような声を上げながら泳がなくてはならなかったのである。』Müller, p. 228.; EA, p. 142)

これが、ヒルバーグが 20 回も引用しているお気に入りのユダヤ人目撃証人ミューラーなのである。おそらく、ヒルバーグはミューラーの本の p. 271(EA,na)にある次のような告白に気づかなかったのであろう。

「…私には、すべてが夢の中の出来事ではなかったとは確信できない。」

### 5. 工学と毒物学から見たヒルバーグによるユダヤ人絶滅の記述

ヒルバーグには、自分の証人が記述している物事が技術的、自然科学的に可能かどうかという問題は、まったく関心となっていない。証人が述べていることが正しそうであれば、それだけで十分なのである。修正主義者だけがこのような問題を提示して来た。183 ここでは、最初に、「純粹の絶滅収容所」をとりあげ、それから、アウシュヴィッツを取り上げよう。

#### a. 凶器としてのディーゼル・エンジン

ヒルバーグによると、ベウジェックとトレ布林カでは、ディーゼル・エンジンで殺戮が行なわれ、チェルムノでは、やはりディーゼル・エンジンを備えたザウラー社のトラックが殺人のために使われた。ヒルバーグは 145 万のユダヤ人がこの方法で殺されたと述べている(トレ布林カで 75 万、ベウジェックで 55 万、チェルムノで 15 万)。

ドイツ系アメリカ人ベルクが、ディーゼルの排気ガスが大量殺人目的に適しているかどうかを徹底的に検証している。57 以下が彼の分析の要約である。

ディーゼル排気ガスを使って人を殺すことは原則的に不可能ではないけれども、毒性を持つ一酸化炭素をほとんど含んでいないので、かなり困難である。ガソリン・エンジンでは、1 m<sup>3</sup>あたり 7%以上の一酸化炭素濃度となるのに、ディーゼル・エンジンは 1%の濃度の一酸化炭素を作り出すことさえできない。動物実験によると、ディーゼル・エンジンのガス室では、目撃証人が述べているような時間では184、室内の動物を殺すことはできない。殺すには、少なくとも 3 時間かかり、その間ずっと、エンジンは重負荷でまわり続けていなくてはならない。185 こうした条件の下では、エンジンが 1 日に数回停止するという事実も考慮しておかなくてはならない。186 この結果、エンジンをしばしばオーバーホールしなくてはならず、犠牲者の列がガス室の外で長く続くことになる。

ディーゼル・エンジンが比較的無毒であることはよく知られている。だから、イギリスとフランスの間にトンネルを建設するときには、ディーゼル・エンジンだけが使われたのである。もしも、ドイツ人が、言われているところの時間内で数百万のユダヤ人を殺害して、跡形もなく死体を処理することができたとすれば、技術的な天才であろう。しかし、技術的な天才であれば、きわめて非効率的な凶器を使わないであろう。

ヒルバーグが、ソビボルではガソリン・エンジンが使われたと述べているが、ガソリン・エンジンの方が、凶器としては適切であろう。しかし、1991 年、*Enzyklopädie des Holocaust* は、ソビボルでの凶器はディーゼル・エンジンであったと述べている。おそらく、ヒルバーグも *Enzyklopädie* もまもなく、ガソリン・エンジン説もディーゼル・エンジン説も放棄して、ソビボルでの 20 万から 25 万人の殺害は、ソ連系ユダヤ人ペチェルスキーが 1946 年に述べているように、「天井の穴からばらばらと落とされた黒い物体」によって行なわれたと述べることであろう。少なくとも、「記憶」の方が新鮮だからである。



b. 「純粹絶滅収容所」での死体の除去：ベウジェッツのケース

犯罪学の原則は、死体がなければ犯罪もなかったというものである。この原則は、もしも、死体を完全に消し去ってしまったことが証明されれば例外となる。では、「純粹絶滅収容所」がガス処刑した 165 万の死体はどこにあるのか。巨大な戸外焼却のあととは一体どこにあるのか。

165 万人の死体は、最初は大量埋葬地に埋められ、のちに掘り返されて、焼却されたという。これらの大量埋葬地が存在していたとすれば、それを作ることによる大地の変化が、わかるはずである。とくに、航空写真を使えば、地勢の変化、植生の変化による変動は簡単に見て取ることができるであろう。航空写真専門家ポールは、1944 年のトレ布林カ、ベウジェッツ、ソビボルの航空写真には、大規模な大地の変動の痕跡がまったくないことを明らかにしている。すなわち、数十万の死体を埋めた大量埋葬地は存在しなかったと結論せざるを得ないのである。187 ヒルバーグとは違って、われわれは、ベウジェッツも含む、「ホロコースト」が行なわれたとされる現場を、写真撮影のためにではなく、研究のために訪れている。188 大量埋葬地があったとされているところは、収容所があったところとされている土地から、緩やかに上った場所である。ガス室があったとされている場所からは、かなり高い土地にある。ドイツ人は、大量に埋葬作業を行なうには、55 万以上の死体を高い土地に運び上げなくてはならなかったことになる。

ベウジェッツで 55 万の死体を跡形もなく焼却したということについての技術的前提を検証しておこう。(他の「絶滅収容所」については、数は、犠牲者の数に応じて修正されるべきである)。ヒルバーグは、1942 年晩秋から 1943 年 3 月までに、言い換えると、せいぜい 4、5ヶ月のあいだに、ガス処刑された 55 万人のユダヤ人の死体が、最初は一つの、ついで二つの焼却地域で焼却されたと述べている。この時期は、雨や雪が多いので、1 体を焼却するには 300kg の木材が必要となるであろう。189 すなわち、合計で、165000 トンの木材が必要となることになる。第 5 章で述べたように、戸外焼却では、体重の 5% が灰として残る。大量殺戮の犠牲者には子供も多く存在したとすると、体重を 50kg として、2.5kg の灰が残ることになる。したがって、 $(550000 \times 2.5 =)$  1375000kg あるいは 1375 トンの灰が残るであろう。さらに、木材の灰が残り、その量は木材の質によっても異なるであろうが、少なくとも、1 トンあたり 3kg の灰が残るであろう。190 すなわち、ベウジェッツでは少なくとも、495 トンの木材の灰が残ることになる。結局、大量焼却が行なわれた後には、約 2000 トンの灰が残る。それに加えて、無数の骨や歯が残ることになる。

木材はどこから来たのであろうか。収容者は収容所からどのくらいの距離を歩いて、あるいは移送されて、膨大な量の木材を伐採したのであろうか。それにはどれほどの収容者が必要であったのであろうか。伐採のこぎりは。楔は。荷車やトラックは。馬は。遠く離れた森での食事は。逃亡を防ぐにはどれだけの看守が必要であったのであろうか。木材はどこに保管され、雨や雪から守られたのであろうか。速やかに燃やすために、それは木片に砕かれたのであろうか。緑の木々をすぐ使うには、木片に砕いたほうがよい。ドイツ人は、膨大な灰の山と数百万の骨や歯をどのように処分したのであろうか。55 万の死体を、1km しか離れていないベウジェッツの住民に気づかれずに、戸外でどのように焼却したのであろうか。大量の黒煙と人肉の焼けるにおいは、簡単に気づかれてしまうであろうし、レジスタンス運動に報告されてしまうであろう。レジスタンス運動は、ポーランド各地での情報をよく知らされており、そうした情報を絶えず、ロンドンの亡命政府に

提供している。191 しかし、レジスタンス運動は、ベウジェットで数ヶ月続いたはずである大火についてはまったく報告していない。通信員たちは盲目であったのであろうか。

### c. 凶器としてのチクロン B

害虫駆除剤チクロンBを使って大量ガス処刑を行なうとすれば、通常の温度のもとでは、媒体から青酸ガスが放出されるには、2 時間かかることを念頭においておかななくてはならない。開発者が、ゆっくりと放出するように考えたのである。第一に、そうすることで、作業グループが毒をまいたのちに、害虫駆除室を安全に離れることができるからである。192 さらに、ガスがゆっくりと放出されることで、ガス処理される空間がたとえ気密ではなく、ガスを漏らしてしまうことがあっても、かなりの時間にわたって、高い濃度を維持できるからである。ガスはガス処理される建物の隅々にまで浸透し、そこにいる害虫を駆除できるのである。

それゆえ、たとえ効率的な換気システムが存在したとしても、チクロン B を使った殺人ガス室の換気は、少なくとも、チクロン B の丸薬が投入されてから 2 時間以上で完了することになり、特別労務班は、換気が完了するまで長い時間待機したのちに始めて、ガス室に入ることができる。このときにも、彼らはガスマスクを装着してはならない。さらに、死体で満杯の部屋を清掃する仕事は、汗をかく仕事であり、青酸は湿った皮膚から簡単に浸透してしまう毒であるので、危険な仕事であるために、防護服をつけてはならない。

目撃証言は、こうした条件とはまったく矛盾している。数百万の人々がアウシュヴィッツで殺されたとすれば——このような数字は、ヒルバークがたとえ触れていないとしても、ヒルバークが引用しているほとんどすべての目撃証言のなかに、終戦直後から登場している——、ガス処刑は、高度な処理能力のもとで、速やかに行なわれたに違いない。このテーマに関して、ヒルバークの目撃証人の何人かを検証してみよう。

### フィリップ・ミューラー 193

「すでに、[壕掘の]前の夕方に、3 つの移送集団が約 4 時間ごとに、焼却棟 V に消えていき、ガス処刑された。叫び声、うめき声、がたがたいう音がおさまると、ガス室は数分間換気された。そして、SS は囚人特別労務班を中に送り込んで、死体を搬出させた。」

### ルドルフ・ヴルバ 150

「しかし、11 時ごろ、ちょうど 2 時間後、車がやってきた。ヒムラーとヘスが出てきて、そこにいた将校としばらく話をしていた。…しかし、ついに、すべての準備が整った。屋根にいた SS 隊員に鋭い命令が与えられた。彼は、丸いふたを開けて、丸薬を自分のしたの頭の上に落とした。…中にいた全員が死ぬと、[ヒムラー]はその次の手順に非常に興味を示した。特別なエレベーターが死体を焼却棟まで引き上げたが、焼却はすぐには始まらなかった。金歯が抜かれなくてはならなかった。魚雷の弾頭を耐水性とする髪が、女性の頭から切られなくてはならなかった。金持ちのユダヤ人の死体は、彼らが宝石——おそらくダイヤモンド——をうまく隠していると考えられていたので、解剖のために、脇へ置かれなくてはならなかった。これは、非常に複雑な仕事であったが、新しい装置が、熟練した作業員の腕によって、スムーズに稼動した。ヒムラーは煙突から厚い煙が出始めるまで待っており、そして腕時計を見た。1 時であった。ランチタイムであった。」

#### フィリップ・フリードマン194

「ガスは速やかに作用した。3-5 分後には、全員が死んでいた。死体が搬出されると、部屋の空気が入れ替えられ、新しい犠牲者グループが連れられてきた。この時期、ガス室は 1 時間で 4000-5000 名を処理できた。」

#### ルドルフ・ヘス195

「私がアウシュヴィッツに絶滅用の建物を建てたとき、チクロン B という結晶化した青酸が必要でした。それは、小さな穴から死の部屋に投げ込まれました。死の部屋で人間を殺すには、天候にもよりますが、3-15 分が必要でした。われわれは人々が死亡したことを知りました。わめき声がやんだからです。通常は、30 分待ってドアを開き、死体を運び出しました。」

#### ベンデル196

「彼らは、さまざまな棒で殴られながら、中に入れられ、そこで待機させられた。死が待っていることを知ったときには、逃げようとしたからです。最後に、彼ら[SS]がドアを閉めることに成功しました。泣き声や叫び声が聞こえ、彼らは争って壁をたたき始めました。2 分ほどたつと、まったく静かになりました。5 分後にドアが開けられましたが、さらに 20 分は中に入ることはできませんでした。それから、特別労務班が作業を始めました。」

要点を繰り返しておこう。

- ・ ミューラーは、ガス室が「数分間」換気され、その後で、特別労務班員が中に入ったと述べている。
- ・ ヴルバはガス処刑が始まったのは 11 時であったと述べている。その後で、金歯が抜かれ、髪が切られた、「金持ちのユダヤ人」は解剖に回された(3000 の裸の死体から彼らを探し出したわけである)。始まってから 2 時間後に、すべての作業が終わり、ヒムラーは車に乗って昼食をとりに行った。
- ・ フリードマンは、ガス室が 1 時間で 4000-5000 の犠牲者を処理することができたと言っている。この時間の中で、ガス処刑、換気、部屋の清掃すべてが行なわれたのである。
- ・ ヘスは、中の人々が死亡し、ガス室を清掃するまで、「30 分」待っていたと述べている。
- ・ ベンデルは、犠牲者が死亡してから 5 分後に、ドアが開けられ、ガス室が換気された(青酸からの保護装置を装備した SS 隊員と特別労務班が待機している廊下のほうに)と述べている。そして、20 分待ってから、特別労務班員が部屋に突入したというのである。

言い換えれば、目撃証人が述べていることは、通常の科学、日常生活の経験とは一致していないのである。しかし、ヒルバークは、彼らを「心から信じている」。

ヒルバーク「決定版」が出たあとに、いわゆる殺人ガス室とみなされている部屋の壁から採取されたモルタルのサンプルについての分析が、ロイヒター197とルドルフ198によって行なわれた。害虫駆除ガス室からのサンプルとは違って、そこにはほとんどシアン化合物が残っていなかった。

d. ヒルバークによる、ビルケナウの焼却棟ⅡとⅢでのガス処刑の実際手順  
ヒルバークは、目撃証言を次のようにまとめている。

「アウシュヴィッツの犠牲者たちは、ガス室に入って、模造のシャワーが動かないことに気づいた。外部のメイン・スイッチによって電灯が消され、赤十字の車がチクロンを運んできた。特殊なフィルターを備えたガスマスクをした親衛隊員が、格子ごしにガラス製シャッターを持ち上げて、ガス室へチクロンの缶を次々に投入した。…15分以内には(5分のことも)ガス室内の全員が死亡した。

毒ガスを封じ込めておく必要はもはやなくなり、約30分後には扉が再び開かれた。…ユダヤ人の特別作業班が、ガスマスクをつけて、通り道を作るためにドアの近くの遺体を引きずり出した…」(pp. 1042f.; DEJ, pp. 975f, 邦訳下 226-227 頁)

ガス室として使われた死体安置室の大きさと処理能力を次のように記している。

「死体安置室は非常に大きく(250平方ヤード)[200 m<sup>2</sup>]、おのおの、2000名を押し込めることができた。」(p. 947; DEJ, p. 884)

目撃証人が述べているようなガス処刑手順が不可能なことは、付属の図版から明らかである。199 1944年の航空偵察写真の分析、アウシュヴィッツSS中央建設局のオリジナル図面の研究、現在の建物の建築学的調査によれば、戦時中にいわゆるガス室の屋根に穴がなかったことは明らかである。この結果、フォーリソン教授は、「穴がなければ、ホロコーストもない」という格言を提示している。

処刑と換気時間が技術的に短すぎるという事実、「ガス室」(死体安置室 1、図の 7) 200の屋根には穴が存在しなかったという事実を別にしても、目撃証言が記述している絶滅方法は馬鹿げている。特別労務班員は死体で満杯の部屋(200 m<sup>2</sup>の中に2000体ということは、1 m<sup>2</sup>あたり10体を意味する)に入って、死体を一階の炉室にまで引き上げていくのである。そのとき、エレベーターを使用したといわれているが、このエレベーターは1回にせいぜい10体を乗せることができるだけであり、ガス処刑のたびに、炉室とガス室とのあいだを200回も上下しなくてはならないことになる。15炉室のおのおのが、1時間で1体を焼却できるとすると、24時間たってもガス室には(2000-360=)1640体残ることになる。そして、1944年の春と夏には、4つの焼却棟で毎日10000名がガス処刑されたとされているので、その状態で、次の2000名が入ってくる。SS隊員は、前日の1640体が残っているガス室に、次の2000名をどのように押し込んだのであろうか。201

ヒルバークは多くの目撃証言を研究している。彼はそれらを使って、「絶滅収容所」での大量絶滅についてのグロテスクな図式を作り出したが、一瞬たりとも、このようなことが実際に起こりえるのかどうか疑いもしなかったのである。彼は、ふたたびフォーリソン教授の言葉を引用すれば、物理的現実と信頼できる証拠からまったくはなれたところで暮らしている「紙の上の歴史家」なのである。

d. ビルケナウではときには毎日10000体が焼却されたという主張

ヒルバークが p. 946(DEJ, p. 884)で述べているように、1943年3月から稼動し始めたビルケナウの4つの焼却棟は、全部で46の炉室を持っていた(焼却棟ⅡとⅢがおのおの

15、焼却棟ⅣとⅤがおのおの8)。炉室での1体の焼却には、すでに述べたように、平均1時間かかる。トップフ社がビルケナウに導入した石炭燃料炉は丸24時間稼働できない——1日稼働しては1日休む、定期的に清掃しなくてはならない、清掃の前には温度を落とさなくてはならない——という事実を考慮すると、稼働時間を12時間と推定しうし、それでさえもはるかに長い時間であろう。この場合、ビルケナウの46の炉室は最大で1日920体の処理能力であるので、子供の死体の存在を入れると、約1000体としておく。

このような明白な事実を考えると、ヒルバークがp. 1045(DEJ,p. 978)に引用しているアウシュヴィッツ中央建設局の1943年6月28日の書簡は、焼却棟ⅡとⅢの毎日の処理能力をおのおの1440体、焼却棟ⅣとⅤの能力をおのおの768体としているが、この文書は、おそらくソ連起源の偽造文書であろう。202 (DEJは過ちをおかして、焼却棟ⅣとⅤの能力を768体のかわりに、268体としている。)第三帝国でさえも、技術的に不可能なことは起こりえない。

ミューラーその他の目撃証人は、焼却壕の存在を指摘しているが、それは航空偵察写真によって反駁されているので、ヒルバークが主張する焼却能力(1日に10000体以上)は、理論的な最大値よりも10倍以上も多い。実際には、マッソーニョ、ディアナ、プレサックの研究から、焼却棟はしばしば停止してしまい、その処理能力は劇的に低下してしまうことがわかっているので、はるかに、少ないであろう。

唯一の科学的な結論は、1944年春と秋の数十万のユダヤ人の殺戮は、その数の焼却が技術的に不可能であるので、起こりえなかったということである。第三帝国であっても、死体はひとりでに消え去ることはないのである。

## Ⅷ ユダヤ人犠牲者についてのヒルバーグの統計:もう一つのごまかしの分析

### 1. 犠牲者の「3つのカテゴリー」

第3巻で、ヒルバーグは、ドイツ支配地域でのユダヤ人の人口損失について議論している(pp. 1280-1300;DEJ,pp. 1199-1220、邦訳下 397-410 頁)。統計には、疫病、体力消耗その他で収容所やゲットーで死亡したユダヤ人も入っているので、「ユダヤ人死亡者統計」という副題が適切であるが、実際には、「殺されたユダヤ人の統計」となっている。(DEJ では、このテーマは、「ユダヤ人死亡者統計」という題で付録に入っている、[邦訳でも同様])。ヒルバーグは、510 万のユダヤ人犠牲者という数字をあげており(p. 1300;DEJ,p 1220、邦訳下 409 頁)、古典的な 600 万という数字をほぼ 100 万下げている。彼は、p. 1282(DEJ, p. 1202、邦訳下 398 頁)で次のように記している。

「加算法による推定はすべて、戦時文書に見られる人数の源泉と意味を反映しているはずである。この種の数の大多数は、犠牲者を実際に数える作業から出てきたものである。大きく言って、死者の数は 3 つのカテゴリーに分けられる。1、窮乏化(おもにゲットーにおける飢餓と病気)、2、射殺による死亡、3、絶滅収容所への移送による死亡、の 3 つである。」

ヒルバーグが「戦時文書に見られる人数を…反映している、…この種の数の大多数は、犠牲者を実際に数える作業から出てきたものである」とみなしている犠牲者数は、何度も指摘してきたように、まったくのごまかしである。

ヒルバーグは、p. 1299(DEJ, p. 1219、邦訳下 408 頁)で 3 つのカテゴリーの犠牲者の数をまとめている。彼の表を簡単にすると以下ようになる。

- ・ 絶滅収容所: 2700000 以下
- ・ 労働・通過収容所も含む死亡者数の少ない収容所: 150000
- ・ ルーマニアとクロアチアの収容所: 150000 以下
- ・ テレジエンシュタットを含むゲットーとゲットー外での窮乏化: 800000 以上
- ・ 戸外での射殺(ソ連、セルビア、「各地」): 1300000
- ・ 概算合計: 5100000

まず、戸外での射殺に関してである。セルビア系ユダヤ人の数は少なかったため、ソ連に限定する。

pp. 409f(DEJ,p. 390)で、ヒルバーグは特別行動部隊によって 900000 以上のソ連系ユダヤ人が射殺されたとしており、さらに、この数字は、「移動作戦でのユダヤ人犠牲者総数の約 3 分の 2 である」と付け加えている。だから、135 万のソ連系ユダヤ人が殺されたに違いない。彼は、p. 1300(DEJ,p. 1220)では、はるかに少ない数字を挙げている。すなわち、彼は、ソ連でのユダヤ人犠牲者の数を「70 万以上」としており、その内訳を、「13 万」がリトアニア、70 万がラトヴィア、「1000 以上」がエストニアであるとしている(DEJ では 2000)。このような統計を考えると、バルト地方も含むソ連領内でのユダヤ人犠牲者の数はせいぜい 90 万である。前の数と比較すると、45 万の違いはどこから出てきたのであろうか。

おそらく、ヒルバーグは、1939 年秋のポーランド分割のあとに、西から東に逃亡して、1941 年 6 月 22 日以降にドイツ軍によって殺されたユダヤ人を、統計の第二セットにある

90万のソ連系ユダヤ人の犠牲者とを一緒にしてしまったのであろう。45万人いたとすれば、ポーランド系ユダヤ人の犠牲者数から除かなくてはならないが、p. 1300(DEJ, p. 1200、邦訳下 409 頁)では、ヒルバークは、後者を「300 万以下」としている。彼によると、ドイツの侵攻直前の 1939 年 8 月にはポーランドには 335 万 1000 名のユダヤ人がいたのであるから、もしもドイツ人が例外なくすべてのポーランド系ユダヤ人を絶滅したとすると、ポーランドだけで絶滅された数 300 万、ソ連で絶滅された数 45 万となりうるはずがない。

ヒルバークは、ダッハウ、ブッヘンヴァルト、シュトゥットホフといった「普通」の強制収容所と労働・通過収容所で死んだユダヤ人の数を 15 万としているが、それは可能性の範囲内である。203 ルーマニアとクロアチアの収容所での犠牲者数は 15 万とされているが、これらの収容所については研究されてきていないので、何もいえない。

残っているのは、ゲットーとゲットー外での窮乏化での 80 万の犠牲者である。ヒルバークは一体どのようにして、この数字に到達したのであろうか。ポーランド系ユダヤ人の大半はゲットーから追い出されて、「絶滅収容所」に移送され、そこでガス処刑され、ソ連のゲットーからのユダヤ人は、ゲットーが破壊されたときに射殺されたとされているのではなかったのであろうか。ヒルバークはこれらの死者を 2 回数えているのではないだろうか。もちろん、そうである。そうしなければ、望みどおりの最後の数には到達しないからである。

250 万以上の想像上のガス処刑の犠牲者、大量に水増しされた射殺の犠牲者、大量に水増しされたゲットーとゲットー外での窮乏化による犠牲者。「ホロコースト」の教皇は、このようなやり方で、600 万とはいわないが、少なくとも 500 万以上のユダヤ人の犠牲者を数えたというふりをしているのである。

3 つの重要な国でのヒルバークの統計を検証してみよう。

## 2. ハンガリー

1944 年、二つの大きな移送が明らかにハンガリー系ユダヤ人を襲った。5 月と 7 月のあいだに、ブダペスト郊外に暮らしていたユダヤ人の大半が、主としてアウシュヴィッツに移送された。ブダペストにいたドイツの特命大使ヴェエセンマイヤーの送付状によると、移送者は 437402 名であった。ハンガリー摂政ミクロス・ホルティが 7 月 7 日に、この作戦をやめさせ、ブダペストのユダヤ人は移送を免れた。10 月、ホルティが失脚し、シャラシの指導下にある矢の十字架団(ハンガリー・ナチス)が権力を奪取すると、数千のハンガリー系ユダヤ人が、ソ連の侵攻に対する要塞を建設するために、強制的に帝国の国境地帯に駆りだされた。

*Enzyklopädie des Holocaust* は最初の移送について次のように記している。204

「ハンガリー系ユダヤ人の大半は、アウシュヴィッツ・ビルケナウに到着するとすぐに、ガス処刑された。」

ヒルバークもまた、(p. 1000; DEJ, p. 936) で 1944 年のハンガリー系移送者の「大きな集団が、到着するとすぐにアウシュヴィッツの絶滅センターでガス処刑された」と述べている。しかし、「国別の死亡者」を扱った p. 1300( DEJ, p. 1220) の表では、ハンガリー系ユダヤ人の犠牲者の総数を「180000 以上」としている。ここには、1944 年 10 月に実行された第二の移送の死亡者も含めなくてはならないのだから、少なくとも 18 万が死亡し、半数

以上が生き残ったことになる。だから、ヒルバーグは「大きな集団」がガス処刑されたという自分の主張の下を切り取った。アウシュヴィッツで死ななかった人々はどこへ送られたのであろうか。ヒルバーグは数千が各地に分散したと述べている(pp. 999f.;DEJ, na)。その他の人々には何が起こったのか。読者はまったく知らされていない。

また、ヒルバーグがハンガリー系ユダヤ人の犠牲者数 18 万という数字をどこから手に入れたのかも知らされていない。

ビルケナウでは大量殺戮が行なわれたといわれてきたが、技術的な理由から、それは不可能であるがゆえに、ハンガリー系ユダヤ人の実際の損失は、数十万を超えなかったであろう。アウシュヴィッツは、そこには登録されないハンガリー系ユダヤ人のために通過収容所であったろう。アウシュヴィッツからシュトゥットホフに移送されたことは証明されているが205、そのことは、こうした仮説とうまくかみ合っている。

### 3. ポーランド

人口統計の難しさを知らない人は、ポーランドでのユダヤ人の人口学的損失を決定するには、戦前に暮らしていた人々の数から戦後に暮らしている人々の数を引けばよいと考えることであろう。この方法は、とりわけ、有名なヴォルフガング・ベンツ教授が編集した論集 *Dimension des Völkermords*206 が使っている方法であるが、そこには、ユダヤ人の移民という概念は現れていない。ヒルバーグは、寛大な数字を挙げ、15000 のポーランド系ユダヤ人が戦時中に「パレスチナその他の地域」に移住し、「数千が」ソ連が併合した地域で生存したか、ソ連人によって移送させられたとしている(p. 1293;DEJ, p. 1220)。彼は、「300 万までの」ポーランド系ユダヤ人が死亡し、それは、戦前に暮らしていたと(される)335 万 1000 のほぼ 90%であったとしている(p. 1300;DEJ, p. 1220)。

この 300 万という数字は、まったくの空想である。第一に、出発点の数字が高すぎる。311 万 3033 名がポーランドで暮らしていたとする戦前のポーランドの最後の人口調査が行なわれたのは 1931 年であり、ミュンヘンの現代史研究所によれば、30 年代には毎年 10 万ほどのユダヤ人がポーランドから移民したからである。207 1939 年秋にポーランドが分割されると、大量のユダヤ人がドイツ支配地域からソ連支配地域に逃亡した。サニングは、彼の研究書 *The Dissolution* の中で、半分以上のユダヤ人が東部地区に移住した多くの町をあげている。1941 年 6 月 22 日に、ドイツ国防軍はソ連支配地域を速やかに支配したけれども、大半のユダヤ人が赤軍とともに逃亡しており、また、それ以前に、スターリンの執行官の手でさらに東方に移住させられていた。

1946 年 2 月の *United Press* の記事によると 80 万のユダヤ人がポーランドでまだ暮らしていた。208 以下の事実留意すべきである。

- ・ 戦争終結直後に、多数のポーランド系ユダヤ人がアメリカ、パレスチナその他に移住した。
- ・ ソ連に逃亡したポーランド系ユダヤ人の大半が当地にとどまった。
- ・ 戦後もポーランドに残ったユダヤ人の多くが名前を変えて、ユダヤ人であることがわかりづらくなった。209

この問題についての信頼すべき数字がないので、たとえ概数であっても、ポーランドでのユダヤ人住民の損失を正確に数え上げることはできない。いずれにしても、300 万までの死者というヒルバーグの数字から、ガス処刑されたと想像されている犠牲者の数を引いておかななくてはならない(「純粹絶滅収容所」で絶滅されたとされている 165 万人の



大半、アウシュヴィッツで殺されたとされている人々のうちのかなりの数は、ポーランド系ユダヤ人であったと考えられている)。おそらく、ポーランドでのユダヤ人の損失は数十万人に上るであろうが、これはまさに悲劇である。

#### 4. ソ連

1939年の人口調査では、302万のソ連系ユダヤ人がいたことになっているが、1940年の*American Jewish Yearbook*は210,550万人と報告している。このことは、ポーランド系、バルト系、ルーマニア系のユダヤ人のかなりの割合がソ連によって吸収されたならば、説明できる。しかし、1959年の人口調査によると、226万7000名のユダヤ人がソ連領で暮らしていた。ソ連の人口調査では、各人は自分が帰属しているとみなしている民族を申告でき、多くのソ連系ユダヤ人はすでに同化してしまっていた。すなわち、ユダヤ人ではなく、ロシア人、ウクライナ人などとみなしていた。さらに、反シオニスト的な雰囲気はかなり広まっていたので、ユダヤ人であると認めることには、迫害が付きまとっていたに違いない。

驚くべきことに、イスラエルとアメリカへの移住が始まってからかなり経過していた1990年7月1日に、*New York Post*紙は、ソ連系ユダヤ人は500万人存在するとの記事を載せている。このように、数についてはきわめて混沌としているので、第二次大戦中のソ連系ユダヤ人住民の損失について、信頼できる見積もりを出すことはできない。赤軍兵士として戦死したユダヤ人もおり、ドイツ占領区ではない地域で飢餓のために死亡したユダヤ系市民も存在しており、こうした人々はドイツの迫害によって死亡したのではなく、「ホロコースト」ともまったく関係のないことである。

#### 5. 要約

ヒルバークは、「絶滅収容所」とは区別されるドイツの強制、労働、通過収容所でのユダヤ人死亡者の数を約25万と見積もっている。それはかなり高すぎる数字ではなるが、許容範囲かもしれない。アウシュヴィッツとマイダネクで病気、疲弊その他で死亡したユダヤ人もこの数字の中に入れるべきである。この二つの収容所の最大21万の死亡者211のうち、約60%がユダヤ人であったろう。したがって、最大35万のユダヤ人がドイツの収容所で死亡したに違いない。ソ連での大量射殺、ゲットーでの困難な生活、戦争末期の収容所の疎開による死亡者は数十万を超えなかったに違いない。

**ユダヤ人住民の損失についての最終的な数は、100万以下であったに違いない。**

この見積もりは、スウェーデンの研究者ノルトリングの調査によっても確証されている。彼は、戦争が始まったときにヨーロッパの祖国で暮らしていた、1972年の*Encyclopädia Judaica*に載っている722名のユダヤ人についての経歴にもとづいて、そのうち44%が移住し、35%が祖国に残り、移送や収容を免れ、8%が移送されたが生存し、13%が死亡したと結論した。<sup>212</sup>

サニングはもっぱら、ユダヤ系統計と連合国の統計にもとづいた研究の中で、350万のユダヤ人がドイツの権力に服従していた、すなわち、「ホロコースト」が行なわれていたとされている時期に、ドイツの影響地域で暮らしていたとの結論に達している。<sup>213</sup> サニングの数は低すぎ、ドイツ支配地域で暮らしていたユダヤ人の数は500万であったとしておこう。また、ノルトリングの数は事例すべてを代表するものではなく、13%ではなく20%のユダヤ人がドイツ支配地域で死んだこととしておこう。この場合でも、ユダヤ人犠

犠牲者の数は 100 万ほどであり、ヒルバーグが「算出した」あるいは発明した数字の 5 分の 1 にすぎない。

ヒルバーグの方法は、人口学的に鍵となる国であるポーランドの扱い方に典型的である。彼は、戦前のポーランドからのユダヤ人の大量移民を無視し、1939 年のポーランド系ユダヤ人のソ連への大量逃亡を過少評価している。そして、「絶滅収容所」での大量のガス処刑犠牲者を「東部戦線の背後での射殺で殺された」あるいは「ゲットーで死亡した」人々の中に 2 回数え上げ、戦後に移住した数十万のポーランド系ユダヤ人については触れることもなく、多くのポーランド系ユダヤ人が 1945 年以降にはユダヤ人とは認められなかったという事実にも目を向けていないのである。我が巨人が行なっているほど不誠実に、統計を操作し、切り落とすことは誰にもできないのである。

## Ⅷ. 最初のツンデル裁判でのヒルバークの大失敗

1985年、トロントで、ドイツ系カナダ人エルンスト・ツンデルに対する裁判が開かれた。「ホロコースト記憶協会」の教唆を受けて、ツンデルは「虚偽のニュースを広めることに」対する法——のちにカナダ最高裁は憲法違反とした——を犯した罪で起訴された。リチャード・ハーウッドの小冊子 *Did Six Million Really Die?* を配布したからであった。この裁判は、ツンデルに15ヶ月の刑を宣告した。この判決は1988年の控訴審でも確認されたが、刑期は9ヶ月に短縮され、1992年8月27日、カナダ最高裁は判決を棄却した。

ヒルバークは最初の裁判での検事側証人であった。ツンデルの戦闘的な弁護士ダグラス・クリスティ——法廷にいたフォーリソンが問題の核心についてのメモをしばしば渡していた——は、ヒルバークを容赦なく追及した。そして、「ホロコースト」についての「標準的な著作」の巨人は、自分のワートルローをむかえることになった。彼は、3年後の控訴審で、証人としての出廷を拒んだが、検事グリフィスは、3年前の最初の裁判での彼の陳述をふたたび朗読することを求めた。

法廷に引き出されたハーウッドの小冊子と同名の優れた作品 *Did Six Million Really Die?* の中で、クラシュカは、ヒルバークの陳述を部分的に要約し、また裁判記録から直接に部分的に引用している。

クリスティは、ヒルバークの初版(当時第二版はまだ準備中であった)の中に登場するヒトラーの全ユダヤ人絶滅命令について質問した。ヒルバークは、何回も言い訳したのちに、ついに、このような命令が存在した証拠がまったくないことを認めた。214

以下は、クリスティとヒルバークの論戦である。215

ヒルバーク: 科学的報告とは何を意味しているのですか。

クリスティ: 簡単な言葉で定義することはなかなかできませんが、科学者、あるいは物理的な証拠を検証することができる人によってなされた報告です。ナチス占領地域のどこかにガス室が存在したことを示す報告を一つでも挙げてください。

ヒルバーク: 質問の意味が十分に理解できません。ドイツのものを指しているのですか、戦後のものを指しているのですか。

クリスティ: ドイツのものであろうと、戦後のものであろうと、連合国のものであろうと、ソ連のものであろうと、どのようなものでもかまいません。一つ挙げてください。

ヒルバーク: 何を証明するためですか。

クリスティ: ガス室を科学的に目撃したという結論を下すためです。一つの科学的な報告だけで結構です。

ヒルバーク: 私は本当に当惑しています。そんなに当惑したことはないのですが。…

判事: 博士、このような報告を知っていますか。

ヒルバーク: いいえ。

ヒルバークは自著の中でゲルシュタインを何回も典拠資料としている。クリスティは、高さ1.8mの部屋で1㎡あたり28—32名を詰め込むことができると主張している人物を狂人か嘘つきとは考えていないかどうかをヒルバークに質問している。216

ヒルバーク: この特定のデータについては、私はとても慎重です。ゲルシュタインはとても興奮しやすい人物だからです。彼はあらゆる種類の供述ができる人物でした。…

クリスティ: ゲルシュタインの陳述のなかには、このような記述がありますね。

ヒルバーク: あります。

クリスティ: ゲルシュタインは、700—800名の人々が25平方メートル、45立方

メートルの空間に押し込まれたと述べています。

ヒルバーグ: そのように述べていますが、私は自分の本のなかでは、この個所は無視しました。

クリスティ: 彼は、ヒトラーとヒムラーがガス処刑を目撃したと述べていますね。

ヒルバーグ: ゲルシュタインはそのような陳述をしています、それは「完全に」、「全面的に」虚偽です。

クリスティ: ゲルシュタインは、ベウジェッツとトレ布林カでは誰もが犠牲者の数を計算しようとしなかった、実際、ユダヤ人だけではないが 2500 万が殺されたと述べていますが、これは信頼できることですか。

ヒルバーグ: 一部は真実で、一部は誇張、明らかな誇張です。この話の中で重要なことは、ガス室に入るときに、計算が行なわれなかったことです。

クリスティ: ということは、明らかに誇張された部分を使わないで、計算が行なわれなかったという部分を信頼できるものとして使ったわけですね。

ヒルバーグ: はい。

ヒルバーグは、東部地区での大量殺戮についてのすべての「証拠」がスターリン時代のソ連資料からのものであることを認めざるを得なくなった。217

クリスティ: すべての場所はソ連支配地域にあり、西側の誰一人として、この収容所を調査することは許されなかったのですね。

ヒルバーグ: 調査要請があったことは知りません。誰も許されなかったとおっしゃいますが、それは何らかの要請があったことを意味しています。私が言えることは、初期にアウシュヴィッツなどを調査した西側の調査官がいたことは知らないということです。

クリスティ: トレ布林カはどうですか。

ヒルバーグ: トレ布林カには 1945 年にはなかったと思います。

クリスティ: ソビボルは。

ヒルバーグ: ありませんでした。

クリスティ: マイダネクは。

ヒルバーグ: マイダネクは別の問題です。

クリスティ: 西側からマイダネクにいった人物がいたのですか。

ヒルバーグ: 私の知る限りありません。

クリスティ: ベウジェッツは。

ヒルバーグ: ベウジェッツは最初のその痕跡が消された収容所です。

クリスティ: チェルムノあるいはシュトゥットホフは。

ヒルバーグ: ありません。

クリスティ: アウシュヴィッツあるいはビルケナウは。

ヒルバーグ: ありません。

ヒルバーグは自分のスター証人ヘスを、アウシュヴィッツの大量殺戮の証拠として何回も引用している、クリスティは、ヘスが存在していないヴォルゼク収容所の名前を挙げている理由を質問している。218

クリスティ: ヘスは存在しないヴォルゼク収容所について何回も言及していますが、それをどのように説明しますか。

ヒルバーグ: それを読んだことがあります。おそらくベウジェッツのことでしょうが。この人物は何にも書くことができなかったのかどうか、話すことができたのかどうか、疲労していたのかどうか、錯覚していたのかどうか、偽ったのかどうか、知ることはとても困難です。

クリスティ: ヘスはヴォルゼクとともにベウジェッツにも言及していますが。

クリスティ:この人物は、理解できない言葉で書かれた自白に署名することを強いられたので、ゲルシュタインと同じような馬鹿げた事例を陳述の中に含めたと考えることができますね。

ヒルバーク:この陳述には明らかな混乱があります。

クリスティ:ニュルンベルク資料 3868-PS ヘスの宣誓供述書を提出します。

ヒルバーク:この資料を前に読んだことがあります、ヴォルゼクが言及されていることも知っています。それを読んだことがあります。恐るべきことです。

クリスティ:この人物について何かがまったく間違っていたことは明白ではないですか。

ヒルバーク:この人物について何かがまったく間違っていたとは言えません。この宣誓供述書が作られた状況について何かがまったく間違っていたと言えます。

「何かまったく間違っていた状況」について、ヒルバークが、ヘスから自白を引き出した3日間の拷問を指していることには疑いない。しかし、彼はこのヘスを、ユダヤ人の絶滅についてのスター証人として26回も引用しているのである。

## X 結論

第二次大戦中、ドイツが支配したヨーロッパ諸国のユダヤ人は広範囲な迫害を経験し、多くの血を流した。

ヒルバーグは、40年以上の研究によって、これらの事件についての膨大な資料を集めた。彼は、これらの資料にもとづいて、『ヨーロッパ・ユダヤ人の迫害』と題する本を書くことができたに違いない。そして、この本は、時間の流れにも耐えて、第一級の歴史家としての名声をヒルバーグに与えたことであろう。

ヒルバーグは、そのチャンスを棒にふるってしまった。彼は、ヨーロッパ・ユダヤ人の迫害だけではなく、化学的な屠殺場での工業化された大量殺戮を意味するヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅も資料的に跡づけようとしたのである。彼は隠された備忘録を持っていた。

このような工業化された大量殺戮についての実態のある物理的証拠はまったく存在せず、戦争による損失をのがれた膨大な資料にも、このようなおそろしい罪の存在を少しでも示唆するものはない。ヒルバーグは、この大量殺戮を「証明」するために、常識的な証拠の序列をひっくり返して、目撃証言を物理的証拠と資料的証拠の上位に置いた。物理的証拠や資料的証拠のかわりに、ルドルフ・ヘスの証言があるが、彼は、1942年7月に開設したはずであるトレブリンカ収容所を1941年6月に訪れたと述べていたりする。また、ゲルシュタインの証言があるが、彼は、ベウジェッツでは1㎡に32名を押し込めることができたと言っている。また、フィリップ・ミュラーの証言があるが、彼は、死体が焼却されると、脂肪が溝に流れ落ち、ひしゃくですくうことができたと言っている。

1982年、ヒルバーグは、自分の誤った方法論を非難する修正主義者に次のように反論している。219

「批判者は、きわめて単純な事実を説明できていない、すなわち、移送された人々はどこになったのかということである。移送は秘密ではなかった。前もって知らされていた。数百万の人々が特定の場所に搬送された。これらの人々はどこにいるのか。中国に身を隠しているのだろうか！」

実際、これらの人々はどこにいるのか。ヒルバーグのいうように、中国に身を隠しているのではない。彼らがどこに身を落ち着けたのか、1978年11月24日のState Times(Baton Rouge, Louisiana, p. 8a)の記事が明らかにしている。

「スタインベルク家は、かつてはポーランドの小さなユダヤ人村で繁栄していた。ヒトラーの死の収容所の前のことであった。今日、200名以上の生存者や祖先が、感謝祭の日に始まった特別な4日間の祝祭を分かちあうために、集まっている。カナダ、フランス、イギリス、アルゼンチン、コロンビア、イスラエル、少なくとも13のアメリカの町から、親戚たちが木曜日にやってきた。シカゴからやってきたイリス・クラスノフはこう語っている。『信じられないことです。3ヶ月から85歳までの5世代がここにいます。みんな歓声をあげながら、すばらしい時間を過ごしています。まったく、第二次大戦の難民連合のようなものです。』」

これが、ヒルバーグが「ガス処刑の犠牲者」とみなした人々の実例である。

嘘をその核心として選択した社会では、ヒルバーグの研究はたたえられている。しかし、この名声は砂上の楼閣であり、彼は粘土足の巨人なのであり、その足が崩れ落ちるの

も時間の問題である。

ヒルバーグ自身が不本意ながら、自分の研究を公平に評価している。この本の責任出版者であるカウンテス博士への手紙の中で、彼はこう書いている。220

「うわすべりなことが、ホロコースト研究の分野では最大の病です。」

ホロコースト研究では品質審査がなされていないと述べたかどうか尋ねられて、ヒルバーグは 2000 年にこのことを確認している。221

「そのとおりです、とくに、合衆国のいくつかのエリート大学では。」

ヒルバーグの母校ヴァーモント大学もそのひとつである。最後に、フォーリソンの文章からの一節を引用して結論としておこう。222

「ヒルバーグの浩瀚な仕事は、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ビザンツの学者が、あらゆる類の偽造文書、偽造史料を作り出しながら、互いに競争していた過去の時代の銜学的なやり方をしのばせるものである。彼らの学識は賞賛に値するが、彼らに欠けていたのは良心である。ベルナール・ラザレが言うには、アレクサンドリアのユダヤ人は、『膨大なエネルギーを費やして、テキスト自体を偽造し、それを自説のための戦いで、自らを支えるために利用した。』バツツの言葉を借りれば『著しく党派的なメンタリティ』をもつヒルバーグと、これらのユダヤ人とのあいだには驚くべきほどの類似点がある。」

### [歴史的修正主義研究会ホームへ](#)

<sup>1</sup> ヒルバーグの伝記については、ヒルバーグの本のドイツ語版 (*Die Vernichtung der eupopäischen Juden*, Fisher Taschenbuch Verlag, Frankfurt 1997) と Barbara Kulaszka (ed.) *Did Six Million Really Die ?*, Samisdat Publishers, Tronto 1992, pp. 5f(online: <http://www.ihr.org/books/kulaszka/falsenews.toc.html>) を参照。

<sup>2</sup> 3 vols., Holmes and Meiter, New York 1985.

<sup>3</sup> Robert Faurisson, “*Mon expérience du révisionnisme*”, in: *Annals d’Histoire Révisionnisme*, no.8, spring 1990; quoted from Robert Faurisson, *Écrits révisionnistes* (1974-1998), 4 volumes, privately published 1999, p.954 (v. III). (online: <http://abbc.com/aaargh/fran/archFaur/1986-1990/RF9003xx1.html>)

<sup>4</sup> Paul Rassinier, *Le drama des jusif européens*, Les Sept Couleur, Paris 1964, Reprinted by La Vieille Taupe, Paris 1984, pp.15-32, 107-221. (online: <http://www.abbc.com/aaargh/fran/archRassi/dje/dje.html>)

<sup>5</sup> コーゴン、ラングバイン、リュッケルルその他が編集した論文集 *Nationelsozialistische Massentoetungen durch Giftgas*(Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt 1986)の序文の中で、編者たちは、過去の事件を「否定」する「ナチスの理論と実践の擁護者」を攻撃しているが、少なくとも、そこから、読者はホロコースト正史に疑問を呈している人々が存在するのを知ることができる。もちろん、著者の名前も表題もあげられてはいないが。

<sup>6</sup> ラッシニエの注目すべき著作 *Le Mensonge d’Ulysse* は 1950 年代初頭に出版されているが、これは、自分の主観が入っている個人的経験の記録であり、学問的な厳格さを持つ研究書ではなかった。

<sup>7</sup> ヒルバーグは、1985 年のトロントでの最初のツンデル裁判のなかで、弁護士クリスティの反対尋問対して、そのように答えている。Barbara Kulaszka (ed.) *Did Six Million Really Die ?*, p. 16.

<sup>8</sup> 脚注の数を減らすために、ヒルバーグを引用するにあたっては、ドイツ語版の頁を( )に記す。英語版の対応箇所はDEJとのタグをつける (訳出にあたっては、当該箇所がある場合には、邦訳を使用する、修正補足がある場合には [ ] を使用する——試訳者)。

<sup>9</sup> Leon Poliakov, *Harvest of Hate*, Holocaust Library, New York 1979, p.108.

- 
- <sup>10</sup> Eberhard Jäckel and Jürgen Rohwer(eds.), *Der Mord an den Juden im Zweiten Weltkrieg*, Deutsche Verlagsanstalt, Stuttgart 1985, p. 185.
- <sup>11</sup> William L. Shirer, *Rise and Fall of the Third Reich*, Simon and Schuster, New York, 1960, pp. ix, x.
- <sup>12</sup> 1995年に、イタリアの歴史家マットーニョとモスクワを訪問し、88000頁を検証して、うち、4000頁をコピーした。
- <sup>13</sup> Christopher Browning, “*La décision concernant la solution finale*”, in: *Colloque de l’Ecole des Hautes Etudes en sciences sociales, L’Allemagne nazie et genocide juif*, Gallimard-Le Seuil, Paris 1985, pp. 191f.
- <sup>14</sup> ナチスとシオニストとの協力については、Edwin Black, *The Transfer Agreement*, New York-London 1994; Francis Nicosia, *Hitler und der Zionismus*, Druffel Verlag, Leoni 1989.
- <sup>15</sup> バービー・ヤール事件の定説は、E.R. Wien, *Die Shoa von Babi Jar*, Hartung-Gorre, Constance 1991. ヒルバークもこの虐殺事件についてp. 311 (DEJ, p. 297) その他で言及している。
- <sup>16</sup> Christopher Browning, *op.cit.* (note 13) p. 192.
- <sup>17</sup> *Canadian Jewish News*, 30<sup>th</sup> January 1992.
- <sup>18</sup> Raul Hilberg, *The Destruction of the European Jews*, Quadrangle Books, Chicago 1967,p. 177.これは、1961年に出版された初版を修正せずに掲載したものである。この点に関して、フォーリソンに感謝する。
- <sup>19</sup> Christopher Browning, “*The Revised Hilberg*”, in: Simon Wiesenthal Center Annual, 1986, p. 294.
- <sup>20</sup> Adolf Eichman, *Ich, Adolf Eichman*, Druffel Verlag, Leoni 1980, p. 479.
- <sup>21</sup> E. Jäckel, J. Rohwer(eds.), *op. cit.* (note 10), p. 126.
- <sup>22</sup> ヒルバークの報告は、, *L’Allemagne nazie et genocide juif*, *op cit.*(note 13), pp. 219ff.
- <sup>23</sup> Carlo Mattogno, *La soluzione finale. Problemi en polemiche*, Edizioni di Ar, Padua 1991,pp. 64f.
- <sup>24</sup> PS-710
- <sup>25</sup> NG-5770
- <sup>26</sup> *Völkischer Beobachter*, 30<sup>th</sup> Semtember 1942
- <sup>27</sup> Adolf Hitler, *Mein Kampf*, Franz Eher Verlag, Munich 1933, pp. 13f.
- <sup>28</sup> Cf. chapter VI.2.
- <sup>29</sup> イスラエルの資料によると、1998年の時点で約100万人の「ホロコースト生存者」が存在する。とすると、なんと、1945年には4-500万人の「生存者」がいたことになる。Cf. Germar Rudolf, “*Holocaust Victims: A Statistical Analysis. W. Benz and W. N. Sanning ---a Comparison*”; in: E. Gauss(ed.), *Dissecting the Holocaust*, Theses & Dissertation Press, Capshaw, AL, 2000, p. 211ff.
- <sup>30</sup> *Newsday*, Long Island/New York, 23<sup>rd</sup> February 1983, p. II/3.
- <sup>31</sup> Robert Faurisson, *Écrits revisionisme*, *op. cit.* (note 3), p. 959
- <sup>32</sup> Victor Suvorov, *Icebreaker: Who Started the Second World War ?*, Hamish Hamilton, London, 1990; V. Suworow, *Der Tag M*, Klett-Cotta, Stuttgart 1995; V. Suworow, *Stalins verhinderter Erstschiß*, Pour le Merite, Selente 2000; E. Topitsch, *Stalin’s War*, Fourth Estate, London 1987; W. Post, *Unternehmen Barbarossa*, Mittler, Hamburg 1995; F. Becker, *Stalins Blutspur durch Europa*, Arndt Verlag, Kiel 1996; F. Becker, *Im Kampfum Europa*, Leopold Stocker Verlag, Graz/Stuttgart 1993; W. Maser, *Der Wortbruch, Hitler, Stalin und der Zweite Weltkrieg*, Olzog Verlag, Munich 1994; J. Hoffman, *Stalin’s War of Extermination*, Theses & Dissertations Press, Capshaw, AL, 2000; J. Hoffman, “*Die Sowjetunion bis zum Vorbend des deutschen Angriffs*”, in: Horst Boog and others, *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg*, vol. 4: *Der Angriff auf Sowjetunion*, Deutsche Verlag-Anstalt, Stuttgart 1987; J. Hoffman, “*The Soviet Union’s Offensive Preparations in 1941*”, in: *From Peace to War*, Providence/Oxford, 1997, pp. 361-380.
- <sup>33</sup> Boris S. Telpuchowski, *Die sowjetische Geschichte des Grossen Vaterlaendischen Krieges 1941-1945*, Frankfurt a. M. 1961, requited from Walter Sanning, *The Dissolution of the Eastern European Jewry*, Institute for Historical Review, Newport Beach, CA, 1983, p. 104.
- <sup>34</sup> このような報復の合法性については、Karl Siegert, “*Reprisals and Orders From Higher Up*”, E. Gauss (ed.), *op. cit.*(note29), pp. 529-548. and also F. W. Seider, *Die Wehrmacht im Partisanenkrieg*, Pour le Merite, Selent 1998; Bogdan Musial, *Konterrevolutionaere Elemente aind zu erschiessen*, Propylaeen, Berlin 2000.
- <sup>35</sup> 1920年のソ連の指導者531名のうち、447名がユダヤ人であった。Cf. Juri K. Begunov, *Tajnye Sily w istorii Rossij*, Isdatelstvo Imeni A. S. Syborina, St. Petersburg 1996.
- <sup>36</sup> *Die Enzyklopädie des Holocaust* (ed. By Eberhard Jaeckel, Peter Longrich and Jurius H. Schoeps, Argon Verlag, Berlin 1993)は次のようなコメントをしている。「[ソ連の] パルチザン集団は、しばしば自然発生的に形成された。多くの部隊は主としてユダヤ人戦闘員で構成されていた。」(p. 1348).
- <sup>37</sup> 共産主義者の奴隷収容所の設計者6名全員がユダヤ人であった (Alexander Solschenizyn, *Der*



---

*Archipel Gulag*, Scherz Verlag, Bern 1974, photographic section) .

<sup>38</sup> Stuttgart 1981.

<sup>39</sup> PS-3710

<sup>40</sup> ポーランドでは現在でも、シュトゥットホフではガス処刑が行なわれたとされている。見学者には、焼却棟の反対側の殺菌消毒室が犯罪現場として展示されている。しかし、西側の歴史家の大半は、このテーマを避けている。ヒルバーグもシュトゥットホフでのガス処刑についてはまったく言及していない。彼は、ここを「絶滅収容所」とみなしていないのである。Cf. Jürgen Graf, Carlo Mattogno, Concentration Camp Stutthof, Theses & Dissertation Press, Capshaw, AL, 2001.

<sup>41</sup> カチン虐殺については、Allen Paul, *Katyn, The Untold Story of Stalin's Polish Massacre*, Charles Scribner's Sons, New York 1991.

<sup>42</sup> NO-3947

<sup>43</sup> Arnulf Neumaier, “*The Treblinka Holocaust*”; in: Ernst Gauss (ed.), *op. cit.* (note 29) p. 489.

<sup>44</sup> *Schlag nach!* Natur, Bibliographisches Institut Leipzig 1952, p. 512, quoted in Arnulf Neumaier, previous footnote.

<sup>45</sup> この適切な表現は、フォーリソンによる。

<sup>46</sup> Eugen Kogon, Hermann Langbein, Adalbert Rückerl (eds.), *op. cit.* (note 5). ガストラックについては、89-146 頁で扱われている。

<sup>47</sup> Arthur Butz, *The Hoax of the Twentieth Century*, Institute for Historical Review, Newport Beach, Calif, 1976, p. 198.

<sup>48</sup> R-102.

<sup>49</sup> Udo Walendy, “*Babi Jar ---die schlucht ‘mit 33.771 ermordeten Juden’?*”, in: *Historische Tatsachen*, Verlag für Volkstum und Zeitgeschichtsforschung, Vlotho/Weser, no. 52(1992).

<sup>50</sup> Herbert Tiedemann, “*Babi Jar: Critical Questions and Comments*”, in: Ernst Gauss(ed.), *op. cit.*(note 29), pp.497-525).

<sup>51</sup> Brockhaus Encyclopädie, Wiesbaden 1967, quoted from Tiedemann, *op. cit.* (note 50), p. 521.

<sup>52</sup> *Zentralblatt des Reichskommissariats für di Ukraine*, Rovno, 2<sup>nd</sup> year, no.2, 9<sup>th</sup> January 1943, pp. 8-20, quoted from Tiedemann (see previous footnote).

<sup>53</sup> John C. Ball, “*Air Photo Evidence*”; in: E. Gauss (ed.), *op. cit.* (note 29), p. 275f.

<sup>54</sup> PS-501

<sup>55</sup> Ingrid Weckert, “*The Gas Vans: A Critical Assessment of the Evidence*”; in: Ernst Gauss (ed.), *op. cit.* (note 29), pp. 217-243.

<sup>56</sup> Pierre Marais, *Les camions à gaz en question*, Polemiques, Paris 1994, especially pp. 135-141.

<sup>57</sup> Friedrich Paul Berg, “*The Diesel Gas Chamber: Ideal for Torture---Absurd for Murder*”; in: E. Gauss (ed.), *op. cit.* (note 29), pp. 435-465.

<sup>58</sup> IMT VII, p. 469.

<sup>59</sup> IMT VII, p. 656f.

<sup>60</sup> IMT VII, pp. 416f.

<sup>61</sup> IMT VII, pp. 579f.

<sup>62</sup> Paul Berben, *Dachau. The Official History*, The Norfolk Press, 1975.

<sup>63</sup> IMT XIX, p. 434.

<sup>64</sup> Carlos Porter and Vincent Reynouard, *Menteur à Nuremberg*, ANEC, BP 21, F-44530, 1998.

<sup>65</sup> NO-5384, mentioned by Hilberg on p. 408 (DEJ, p. 389)

<sup>66</sup> Arthur R. Butz, *op. cit.* (note 47), p. 24.

<sup>67</sup> Germar Rudolf, *op. cit.* (note 29), p. 183f.

<sup>68</sup> E. Jäckel, P. Longerich, J.H. Schoeps (ed.), *op. cit.* (note 36), v. II, p. 806.

<sup>69</sup> Archiwum Muzeum Stutthof, I-IIB-8, p. 1.

<sup>70</sup> Krzysztof Dunin-Wasowicz, “*Zydowsy Więźniowie KL Stutthof*”, in: *Biuletyn Żydowskiego Instytutu Historycznego*, Warsaw 1967, no. 63, p. 10.

<sup>71</sup> Cited by Hilberg on p. 317. Not given in DEJ. 邦訳上 233 頁。

<sup>72</sup> Gerald Reitlinger, *The Final Solution. The Attempt to Exterminate the Jews of Europe 1939-1945*, Jason Aronson, Northgate, New Jersey 1987, p. 500.

<sup>73</sup> Gregor Aronson, *Soviet Russia and The Jews*, New York 1949, p. 18; cited by Walter N. Sanning, *op. cit.* (note 33), p.94.

<sup>74</sup> ソ連の支配者は、ベンゲルソンに報わなかった。彼は、スターリンの粛清の中で逮捕されて、射









